新古今集

上

特別
イ 4
3163
14

新古今和歌集序

夫和歌者群德之祖百福之宗也玄象天成六
際六情〻義未著素鶩地靜三十一字〻詠
甫興尒來源流寔繁長短雖異或歸下情而
達同或宣上德而致化或屬遊宴而書懷或
採艷色而寄言誠是理世撫民之鴻徽賞心
樂事之龜鑑者也是以 聖代明時集而錄之
名窮精嶽何以漏脫然猶崑嶺之玉採之有
餘鄧林〻找伐之世盡物既如此歌亦宜然仍
詔參議右衛門督源朝臣通具大藏卿藤原朝
臣有家左近湯槍中將藤原朝臣定家前上總
介藤原朝臣家隆左近衛槍少將藤原朝臣雅

經等不擇貴賤高下令摭錦句玉章神明之
詞佛陁之作為表希夷雜而同繇始於曩昔迄
于當時彼此總編各得呈進每至玄圃花芳之
朝躁扇風涼之夕斟雖波津之遺流尋淺香
山之芳躅或吟或詠拔犀象之牙角無黨世之偏
採翡翠之羽毛裁成而得二千首類聚而為
二十卷名曰新古今和歌集矣時令節物之篇屢
四序而星羅衆作雜詠之代並群品而雲布深
緝之致蓋云備矣伏惟來自代邸而踐
天子之位謝於漢宮而追汾陽之跡　今上陛下
之嚴親也雖無隙帝道之諮詢日域　朝庭之
本主也爭不賞我國之習俗方今荃宰合格萬

夷詠仁風化之樂万春之日野之草悉靡月宴之契
千秋之津洲之塵惟靜誠膺無為有截之時可頤
染毫採牋之志故撰斯一集永欲傳百王彼上古之
萬葉集者蓋是倭哥之源也編次之起因准之儀
皇序惟邈煙鬱雖披延喜有古今集四人含編命
而成之天曆有後撰集五人奉綠言而成之其後有
拾遺後拾遺今葉詞苑千載等集雖出於
聖王數代之勅殊恨為撰者一身之最固茲訪延喜
天曆二朝之遺美定法阿涉虛五輩之英豪排
神仙之居展刊修之席而已斯集之為祈也先抽
万葉集之中更拾七代集之外深索而微長無遺
廣求而片善必舉但雖張網於山野微會自逃絕

連筌於江湖小鮮偷漏誠當視聽之不達定有篇
章之猶遺今只隨採得且所勒修也揮於古今者
不載當代之 御製自後撰而初加其時之天章名
考一部不滿十篇而今所入之自詠已餘三十首六
義若相兼一兩段可足依無風骨之絶妙還有露
詞之多加偏以耽道之恩不顧多情之眼凡厥取
捨若素尚之餘特運冲襟伏羲基皇德而四十
万年異域自雖觀 聖造之書史焉 神武開帝
功而八十二代當朝未聽 叡策之撰集矣定知天
下之都人士女謳歌斯道之遇逢矣不獨祀仙洞
無何之鄉有嘲風嘯月之興亦欲呈皇家元久之
歲有溫故知新之心修撰之趣不在茲乎于時聖

曆乙丑壬春三月之尒

やまかくれハむりしわめつらひしけたしめく人乃
志まきいまゝさたまらきわしと紀薫原の中
國にことの葉として稲田姫素鵞のさとにわ
抱はしたれり宇宙志りあ里しよりこ乃葉さ
そのみちにりまたこわうのなり続いまゝふ為り
事なくして久不姫なり仏紙にふ家なりこち
とし世とおきめ民をやはくにみちとせりかり
宇れハ代々の見ことをこれをまてたまゝ寸えら
ひとうれたる集とも家にしもそあるひ抱らせ
ことに葉乃花のこれる末のまゝ葉ゝて思ひの露
もれ有る草うれをあるへりしを志りハあれと
を伊勢に満きよれなくさはのむハひろふも

はく毎事なくいはこの杣さけきえまたひくも
をゆへらす抱されかく乃こゝし言れ乃又おなし
うなへしーしれよよわて右衛門督源朝臣通具
大藏卿藤原朝臣有家左近中將藤原朝臣
定家前上総介藤原朝臣家隆左を少將藤
原朝臣雅經おりおなをてむかし今これを
ひらこれをきりきいやし寄人をこゝらすめふみ
無ぬ神なけのことれをもうたむ乃夏まつ入
るまきまてむろくもゝめあまひくゆ川めしむ
をろくえしいをくまつけるところ暮川芸
系の一をちるらす夕の雲れ思ひさゝめられ
ゆへよみりれ雅をれかうたしきあしさむのこ

きゝ風すゝし夫ゆふへなふ木津のなかれをくこ
ゆきをみふこまろをしらめあさか山乃詠をたつ
神くもかれあさきをまりてり万葉集にいまつ
所ハおれをものそ今古今かゝこのかゝ七代の集
ふいまゝ家をたこれをろそなしそゝし
詞乃そのまあそひ第れ海をくみくも氣水
ぬ多れ何ゝ紙も絶水にすむうかの清りを
れかまてろぬくいむりしもなきにあらされハ今
もまゝこしらされとしろなかす無くあ川めらる
所かさちくたゝ海者なつけて新古今和歌集
といふ書かれ見をつゝの山にたゝ川たゝをしれふ
よゝ夏まで清りこひまゝ神なひの得ときす秋

春風まちるかつきれもみち冬ハ白雪の姉しれなれ
小雪洋まる年乃くれまてみれ行ゆよふれさる
なさけなるへし志りのこならすそりき座よと我
きをのうみく民れ問我志りを傳の露もと
乃志何くにようへて人の世をきとわ玉ほこのみち
はへよほり後を志るひあきけるひなのなりちよ
朝を忘れ多かまれ山の雪升のよ和なる人
をしいなりちのたし乃なこにくちめる名を
行しそこも心うちようこれ言葉なりあら
もれをといふ事なしいたむやすみりし君
神を不ことそきれこと葉を拙し傳教大師ハ
我を何う海の志いを乃へ給へりかくのこと紀

志らぬむかし此人のあく語をもあらはしゆさて
見想さりひ乃事をもも志傳ハこのみちなし
うもく世りしそいれ何ひゆつかし語我聞て
あまつひ法さの位よそかたり今ハやもみ志る
名をのかれてたこや乃山よすみり我志めあり
といへともまとへらきしそおこるみちをまのも里
ほし乃位ハまつりと我たまけしちさり我
ます後をしてあめ乃しこ志けきことつき雲
乃うへのいかし風まもかたらさり望れハよろつ
の民長日野れ草のなひかぬなくこれ
海あさ清しきの月志何かすみて和音の
うれあら我をつひ愛鳴乃居をもてあうひ

つくば集とえらびてながき世につたへむとなすか
かの万葉集古今のみちとなり時うつりよ
ますあらたまりて今の人ごころまでにいたりて延喜の
むかし御代には四人に勅して古今集を
えらびしめ天暦のかしこき御代には五人におほ
せごとして後撰集をあつめしめ給ひけりその後
拾遺は拾遺金葉詞花千載なとの集はえらばれし
一人これをうけたまはれる撰へよききてものしみ
をよみ人しらずとしるもあるへししかして古今後
撰の比をおもてあそぶ人のともがら絶て
てなしそれまでむかれたるかのうへにつりて
さこえそれにみかきりはとなくりわたし

てはみのみちをとりつかまつりてはうたのみちをわたく
しのわざにもこの国やまとうたのみちのうた
まくほくれ竹のよろづよのうたかなしきむ
なかりけるはかくのごとくつかうまつれる宗祇の世の事
かきすくひあれと千首よ八過させへし
志の歌を今かまでありえつへさところ三十のとす
おほれりて撰ぶ人のめぐみへきもなく
心らむ人はもありかすきゆへよるへあて
いつまでもまきなれはとりてならひとり流
もさみすえ代もくれなさすくへきの集なりぬること
はみちのすけるおもひふかくしてはのわざを
とりおんさらる道へし時よ元久二年三月

廿六日になむ志賀しおかりぬるめ紙いやしこみ
をさふとゆるあまわいろ乃かこ姫る哉あら紙
ちりといへともなかれをくこそ乃なきをさ川
ぬるゆへにとみのを川の音しをねたをたて
つれを露霜まあらたまるとも松ふく風ぞ
はりうせす春秋ハめく隊とも宅ゆく月の
くもりしなくしてこ乃時にあへらむ言のハこれ
をよ給こひ志のみちをゆふかむもれハ心も紙
志乃たきしめうも

新古今和歌集巻第一

春哥上

みよし野の山もとかけて白雲のかかれ里に春はきにけり
（春のはしめ乃うた）
ほのくゆゑ春こそ空にきにけれ天乃かく山霧さなり
（百ゝ宮ありし時ある所にて）
山ぬるゝ春とも志らぬ松の色に高しくうつ雪の
（天子そ宮ありしとき）
うれしき粉ぬる里の雪風ちれ紙にうみてね春はきにけり
（の名の実白木段太臣太太臣うしんつりけるとき百ゝ宮のよさせ）
（紙けるとし志春のこゝろと）
春ふゆゑいへも給こしきも川春を新にのことゝ志ひけるに
（春しらぬ）
（後恵法師）
春とのへも霞にまきれ此日ゝ波さしにみしわけら鶴山

岩まとちし氷もけさはとけそめて苔のした水みちもとむらん　西行法師

風ませに雪は降つゝしかすかに霞たなひき春はきにけり　よみ人しらす

時はいまは春になりぬとみ雪ふる遠き山辺に霞たなひく　同

堀河院御時百首歌たてまつりけるに残りの雪の心をよみ侍りける　権中納言国信

春日野ゝ下もえわたる草の上につれなくみゆる春のあは雪

よみ人しらす

あすからはわかなつまんとしめし野に昨日もけふも雪はふりつゝ　山部赤人

天暦の御時屏風歌　壬生忠見

春日野乃草はみとりになりにけりわかなつまんとたれかしめけん

崇徳院に百首歌たてまつりける時　前参議教長

わかなつむ袖とそみゆる春日野ゝ飛火の野への雪のむらきえ

延喜の御時屏風歌　紀貫之

ゆきてみぬ人もしのへと春の野のかたみにつめるわかななりけり

崇徳院に百首歌たてまつりける時　皇太后宮大夫俊成

沢におふるわかなならねといたつらに年をつむにも袖はぬれけり

日吉社にたてまつりける子日のうた

さゝ浪や志賀の浜松ふりにけりたか世にひける子日なるらん

百首歌たてまつりしとき　藤原家隆朝臣

谷川のうち出る波も声たてつ鶯さそへ春の山風

和歌所にて春の歌たてまつりしに　太上天皇

鶯のなけともいまた降雪に杉の葉しろき逢坂の関

堀河院百首歌たてまつりける時残りの雪の心をよみ侍りける　藤原仲実朝臣

春きては花とも見よとかたをかの松のうは葉にあは雪そふる

題しらす　中納言家持

まきもくの檜原もいまたくもらねは小松か原にあは雪そふる

よみ人しらす

いまさらに雪ふらめやもかけろふのもゆる春日となりにしものを

凡河内躬恒

いつれをか花とはわかむふるさとの春日の原にまたきえぬ雪

家の百首歌合に餘寒の心を　摂政太政大臣

空ハ猶霞もやらす風さえて雪けにくもる春の夜の月

和歌所にて春山月といふ心をよめる　越前

山ふかミ猶かけさむし春の月空かきくもり雪ハふりつゝ

詩をつくらせて歌にあはせ侍りしに水郷春望といふことを　左衛門督通光

みしま江や霜もまたひぬ芦の葉につのくむほとの春風そ吹

藤原秀能

夕月夜しほみちくらし難波江のあしのわかはをこゆる白浪

春歌とて　西行法師

ふりつミし高ねのみ雪とけにけり清滝川の水の白浪

題しらす

梅かえにものうきほとにちる雪を花ともいはし春のあわ雪

山部赤人

あつさ弓春山ちかく家ゐしてたえすきゝつる鶯のこゑ

題しらす

梅かえになきてうつろふ鶯の羽しろたへにあわ雪そふる

百首歌奉りしとき　惟明親王

鶯の涙のつらゝうちとけてふるすなからや春をしるらん

題しらす　志貴皇子

岩そゝくたるみの上のさわらひのもえいつる春になりにけるかな

百首歌奉りしとき　前大僧正慈圓

天の原ふしの煙の春の色のかすみになひくあけほのゝ空

崇徳院に百首歌奉りけるに　藤原清輔朝臣

朝霞ふかくミゆるや烟たつ室の八嶋のわたりなるらん

晩霞といふことを　後徳大寺左大臣

なこの海の霞のまよりなかむれは入日をあらふおきつ白浪

をのことも詩をつくりて歌に合せ侍りしに水郷春望といふことを　太上天皇

見わたせは山もとかすむ水無瀬川夕へハ秋となにおもひけん

摂政太政大臣家百首歌合に春曙といふ心をよみ侍りける　藤原家隆朝臣

霞たつ末の松山ほのほのと浪にはなるゝよこ雲の空

守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに　藤原定家朝臣

春の夜の夢のうき橋とたえして峰にわかるゝよこ雲の空

きさらぎおもて梅の花さかりなりける所にまかりて 中務
あるじなきや霞める宿に訪ふ人もありなくて花のまさりくる
ちかき人法師歌よみて奉りけるに 藤原高之朝臣
おほ見しは梅の匂ひは霞けりて雲もなきまきのよの月
題しらず 宇治前関白太政大臣
おられけり紅匂ふ梅の花けさ白たへに雪はふれゝと
むかしの梅をよみ侍りける 藤原敦家朝臣
わきもこか袖ふれし梅の花ゆへ枝にうつりて匂ひぬるかな
梅花遠薫といふ心をよみ侍りける 源俊頼朝臣
心あらはとはまし物を梅か香にたか里よりか匂ひきつらん
百首歌奉りし時 藤原定家朝臣
梅か香匂ひをうつす袖のうへに軒もる月のかけそあらそふ
千五百番歌合に 藤原家隆朝臣
梅か香にむかしをとへは春の月こたへぬかけそ袖にうつれる
梅花あかぬ色香もむかしにて同しかたみの春の夜の月 皇太后宮大夫俊成女
梅花にそへて大弐三位につかはしける 権中納言定頼
見ぬ人によそへてみつる梅花ちりなん後のなくさめそなき
返し 大弐三位
春ことに心をしむる花の枝にたかなほさりの袖かふれつる
二月雪落衣といふことをよみ侍りける 康資王母
梅ちらす風もこえてや吹つらんかほれる雪の袖にみたるゝ
題しらず 西行法師
とめこかし梅さかりなる我宿をうときも人はをりにこそよれ
百首歌の中に 式子内親王
詠つるけふはむかしになりぬとも軒はの梅はわれをわするな
土御門内大臣家にて梅香留袖といふことをよませ侍りけるに 藤原有家朝臣
散ぬれは匂ひはかりを梅花ありとや袖に春風のふく
題しらず 八条院高倉
独のみなかめて散ぬ梅花しるはかりなる人はとひこて

文集云不明不暗朧々月 大江千里

てりもせずくもりもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしく物ぞなき

祐子内親王ふぢつぼにすみ侍りけるに女房上人などさるべきかぎり物語して春秋のあはれいづれにか心ひくなどあらそひ侍りけるに人々多く秋に心をよせ侍りければ 菅原孝標女

あさみどり花もひとつにかすみつゝおぼろに見ゆる春の夜の月

百首歌奉りし時 源具親

難波がたかすまぬ波もかすみけりうつるもくもるおぼろ月夜に

摂政太政大臣家百首歌合に 寂蓮法師

今はとてたのむの雁もうちわびぬおぼろ月夜のあけぼのの空

刑部卿頼輔歌合し侍りけるに 皇太后宮大夫俊成

きく人ぞ涙はおつるかへる雁なきて行くなるあけぼのの空

題しらず よみ人しらず

ふるさとにかへるかりがねさ夜ふけて雲路にまよふ声きこゆなり

帰雁を 摂政太政大臣

わするなよたのむの沢をたつ雁もいなばの風の秋の夕暮

百首歌たてまつりしとき

かへる雁今はの心ありあけに月と花との名こそをしけれ

守覚法親王五十首歌よませ侍りける 藤原定家朝臣

霜まよふ空にしほれしかりがねのかへるつばさに春雨ぞふる

閑中春雨といふことを 大僧正行慶

つくづくと春のながめのさびしきはしのぶにつたふ軒の玉水

寛平御時きさいの宮の歌合の歌 伊勢

水の面にあやおりみだる春雨や山のみどりをなべて染むらん

百首歌たてまつりしとき 摂政太政大臣

ときはなる山の岩ねにむす苔のそめぬ緑に春雨ぞふる

清輔朝臣の許にて雨中苗代といふことをよめる 勝命法師

雨ふれば小田のますらをいとまあれや苗代水を空にまかせて

延喜御時の屏風に 凡河内躬恒

春雨のふりそめしより青柳のいとの緑ぞ色まさりける

題しらず 大宰大弐高遠

うちなびき春はきにけり青柳の陰ふむ道に人のやすらふ

みよし野の御川のへ乃古柳陰しうみしき　補仁親王
　　百ゝ二十一ノ
嵐ぬく岸の柳れ以なむしろ　崇徳院御歌
　　建仁元年三月歌合ノ　霞隔遠樹と云ふことを　樓中納言公通
ゆかせされむつゝれよとの柳原みとりを　ぬりく霧むまゝれ
　　百ゝ二十一歌合ノ　雲のうゝとて読ク　殿下門院右衛
春風乃霞吹とく緑ゆかわみられてなひくまゝ柳のいゝ
　　千五百十歌合ノ　雲舞
白雲のゆゑまにまなひくまゝ柳れつゝむ山ゝ雲風さゝく　藤原雅経
　　藤原有家卿下
まゝ柳の原ゝ雲ぬく白露れ志られ幾世の雲へ知らん
　　文内卿
うもくまれ聖への緑の花の草に近まてゝゆる雲れ村消
　　千五百十歌
わらを風の春年れ知る緑乃ぬる蓬人今ハ雲へとひこゝへよかり

　　壬生ニ右月ん
屋ゝれとも草ハもゝなれ雲日暮をゆく雲の日に経さる雲
　　西川法師
春暮山櫻ゆ枝ゝ雲ちかて花をうけるゆ年にはゆゑ
　　白川院御祖ゝ花ゆしほけ向人ゝ家諸花と云ふ心を読けるに隆時卿下
櫻花さゝかゆまりけるとゝ思ふまに日暮風にまゝ雲の山里
　　真ゝ雲院歌合ノ　紀貫之
わかれ雲の山風にあくかれてなりくし日ゝ雲を書しつ
　　拾遺大政大臣家百ゝ二十歌合ノ　歸雁の心を　藤原家隆卿下
思ふさちそこともしられ川書ぬ花の宿かせ聖鳥ゝ世心鶯
　　百ゝ二十歌ノ　或子内親王
此ゆ櫻さ紀ぬとみてうもくりまゝ雲ゆかすめる世ゆゑ外
　　多ゆしらす　ゝゝ人しらす
姉してゝひおきてなかむる雲ゆゑ花の下ひもいかにさらん
　　中納言家持
ゆかん人ゝん人思へ雲ゆゑ　ゝゝ古田の山乃ゝ川ちらされ

さくらの哥とてよみ侍ける　西行法師

吉野山こそのしほりの道かへてまたみぬかたの花をたつねん

和歌所にて歌つかうまつりしに春の歌とてよめる　寂蓮法師

かつらきや高まの桜咲にけり立田のおくにかゝる白雲

題しらす　よみ人しらす

いそのかみふるきみやこを来てみれは昔かさしゝ花咲にけり

源公忠朝臣

春にのみ年はあらなんあら小田をかへすかへすも花をみるへく

八重さくらを折て人のつかはして侍けれは　道命法師

白雲のたつたの山の八重桜いつれを花とわきておりけん

百首歌奉りし時　藤原定家朝臣

白雲の春はかさねてたつた山をくらの峯に花にほふらし

題しらす　藤原家衡朝臣

芳野山花やさかりに匂ふらんふるさとさらぬ峯の白雲

和歌所歌合に羇旅花といふことを　藤原雅経

岩根ふみかさなる山をわけすてゝ花もいくへのあとの白雲

五十首歌たてまつりし時

尋きて花にくらせる木のまよりまつとしもなき山のはの月

惜花といふ心を　皇太后宮大夫俊成

散ちらす人もたつねぬ古郷の露けき花に春風そふく

千五百番歌合に　右衛門督通具

石上布留野の桜誰うへて春はわすれぬかたみなるらん

正三位季能

花そみる道の芝草ふみわけてよしのゝ宮の春のあけほの

藤原有家朝臣

朝日影にほへる山の桜花つれなく消ぬ雪かとそ見る

新古今和歌集巻第二

春歌下

釈阿和歌所にて九十賀し侍しおり屏風に山に桜咲たる所を　太上天皇

桜さく遠山鳥のしたりおのなかなかし日もあかぬ色かな

千五百番歌合に春歌　皇太后宮大夫俊成

いく年の春に心をつくし来ぬあはれと思へみよし野の花

百首歌の中に　式子内親王

はかなくて過にし方をかぞふれば花にもの思ふ春ぞへにける

内大臣に侍りける時家に山花といふ心をよみ侍りける　京極前関白太政大臣

白雲のたなびく山の八重桜いづれを花と行て折らまし

祐子内親王家にて人々花の歌よみ侍りけるに　権大納言長家

花の色にあまぎる霞たちまよひ空さへにほふ山ざくらかな

題しらず　山辺赤人

百敷の大宮人はいとまあれや桜かざしてけふもくらしつ

在原業平朝臣

花にあかぬ歎はいつもせしかどもけふの今宵ににる時はなし

凡河内躬恒

いもやすくねられざりけり春の夜は花のちるのみ夢に見えつゝ

伊勢

山桜ちりてみ雪にまがひなばいづれか花と春にとはなん

貫之

我宿の物なりながらさくら花ちるをばえこそとゞめざりけれ

寛平御時きさいの宮の歌合の歌　よみ人しらず

霞たつ春の山べに桜花あかずちるとや鶯のなく

題しらず　赤人

春雨はいたくなふりそ桜花まだ見ぬ人にちらまくもおし

貫之

花の香に衣はふかく成にけり木の下陰の風のまにまに

千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成女

風かよふねざめの袖の花の香にかほる枕の春の夜の夢

守覚法親王五十首歌よませ侍りける時　藤原家隆朝臣

この程は知るも知らぬも玉鉾の行かふ袖は花の香ぞする

摂政太政大臣家に五首歌よみ侍りけるに　皇太后宮大夫俊成

またや見んかたのゝみのゝ桜がり花の雪ちる春の曙

花歌とてよみ侍りける　祝部成仲

ちりちらずおぼつかなきは春霞たつたの山のさくらなるらん

山さとの（寺イ）（山さとにさかりてよこ行けり）雪のゆふ雲をそこれい入る雲の鐘は花そ散ける
（さかりしらす）（能因法師）
櫻ちる雲は山鳥にうつりわかるゝ世紙のかれにしこりひまなく
（花ゆへ行けり人にさうれて煩けり）（恵基法師）
山櫻花の下かせ吹にかりまの雲にしれ雪のむらく消
（ありしらす）（康資王母）
雲海のそほふる雲のをやこせをおけり源に花そ散ける
（源重之）
鳥のゆへるは風やさうふるんなり嚴の落ものこゝぬ
（百ゝ寄めしし時雲のうへ）（源具親）
時もあまゝ海のむれ鳥のおのさへ花ちるこゝろはみかれ里
（見山花と云ふ心を）（大納言經信）
山ゆゑ板乃むら立みてねまておのへ乃かせに花の散かれ
（堀川院御時百ゝ寄なけるに花寄）（大納言師教）
木の下は苔の緑をみてねたいまて散しまゝる山さくらかれ

（花ナクニ寄ふ行けり）（後京大夫殿輔）
繁まりておのへ乃櫻花ぬこれはあるのひくやしとみるやるほ
（花落宮稀にいふことを）（船戸卿範兼）
落ちまゝはふ人まれにあらてゝいしかせの音のこそする
（ありしらす）（兎川法師）
かかむとて花をも吹こゝ別ぬまゝはちるおこゝろ思しかわきれ
（お前）
山里の庭にわ外のみらもかれ落ちわかやを人もこそ
（五十ゝ寄まわし中に湖上花を）（文内々）
花さそふひらの山風吹にまゝりこ紀川舟の流に向かまて
（開路花を）
あふ坂や木まゝ志の落紅吹かうに嵐ちかすむ雲のまゝ紀村
（百ゝ寄ちまし雲の寄）（二條院讃岐）
山ゆゑ嚴の嵐に花ぬ落の月にあまさる明かこのうら
（百ゝ寄めしける時雲の寄）（崇德院御寄）
山たかゝ岩ゆの櫻ちる時をあまのも衣るつゝとそみる

春日社歌合とて人々歌よみ侍りけるに　落花　藤原雅経

散りまがふ花のよそめは吉野山嵐にさわぐ峰の白雲

最勝四天王院障子に吉野山かきたる所　太上天皇

みよし野の高嶺の桜ちりにけり嵐もしろき春の曙

千五百番歌合に　藤原定家朝臣

桜色の庭の春風あともなしとはゞぞ人の雪とだにみん

ひととせ忍びて大内の花見にまかりて侍りしに庭に散りて侍りし花を硯のふたに入れて摂政のもとにつかはし侍りし　太上天皇

けふだにも庭をさかりとうつる花消えずはありとも雪かとも見よ

返し　摂政太政大臣

さそはれぬ人のためとや残りけむあすよりさきの花の白雪

家の八重桜を折らせて惟明親王のもとにつかはしける　式子内親王

八重匂ふ軒端の桜うつろひぬ風よりさきにとふ人もがな

返し　惟明親王

つらきかなうつろふまでに八重桜とへともいはですぐる心は

五十首歌たてまつりし時　藤原家隆朝臣

桜花夢かうつゝか白雲のたえてつねなき峰の春風

題しらず　皇太后宮大夫俊成女

恨みずやうき世を花のいとひつゝさそふ風あらばと思ひけるをば

後徳大寺左大臣

はかなさをほかにもいはじ桜花咲きてはちりぬあはれ世の中

入道前関白太政大臣家に百首歌よませ侍りける時　俊恵法師

ながむべき残りの春をかぞふれば花とともにもちる涙かな

花歌とてよめる　殷富門院大輔

花もまたわかれん春は思ひ出よさきちるたびの心づくしを

千五百番歌合に　左近中将良平

ちる花のわすれがたみの峰の雲そをだにのこせ春の山風

落花といふ事を　藤原雅経

花さそふなごりを雲に吹きとめてしばしはにほへ春の山風

題しらず　後白河院御製

をしめどもちりはてぬれば桜花今は梢をながむばかりぞ

残春の心を　摂政太政大臣

吉野山花のふるさとあとたえてむなしき枝に春風ぞふく

題しらず　大僧正行尊

[illegible]春のとまりか

百首歌の中に　式子内親王

花はちりその色となくなかむれはむなしき空に春雨そふる

小野宮太政大臣月輪寺に花見侍りける日よめる　清原元輔

たかためかあすはのこさん山桜こほれてにほへけふのかたみに

曲水宴をしける時　中納言家持

から人の船をうかへてあそふてふけふそ我せこ花かつらせよ

紀貫之曲水宴し侍りける時月入花灘暗といふ事をよみ侍りける　坂上是則

花なかす瀬をもみるへき三日月のわれて入ぬる山のをちかた

宇治前太政大臣の家にて[illegible]侍りける　良暹法師

尋つる花も我身もおとろへて後の春ともえこそ契らね

千五百番歌合に　寂蓮法師

思ひたつ鳥はふる巣もたのむらんなれぬる花のあとの夕暮

散にけりあはれうらみの誰なれは花のあととふ春の山風

権中納言公経

春ふかくたつねいるさの山のはにほのみし雲の色そのこれる

百首歌たてまつりし時　摂政太政大臣

初瀬山うつろふ花に春暮てまかひし雲そ嶺にのこれる

藤原家隆朝臣

吉野河岸の山吹咲にけり嶺の桜はちりはてぬらん

皇太后宮大夫俊成

駒とめて猶水かはん山吹の花の露そふ井手の玉川

崇徳院に百首歌奉りける時　権中納言国信

岩根こす清滝川のはやけれは波折かくる岸の山吹

題しらず　厚見王

かはつなく神なひ川に影見えていまかさくらん山吹の花

延喜十三年亭子院歌合歌　藤原興風

足曳の山吹の花ちりにけり井手のかはつは今や鳴らん

飛香舎にて藤花宴侍りけるに　延喜御歌

かくてこそみまくほしけれ万代をかけてにほへる藤浪の花

天暦四年三月十四日藤つほにわたらせ給て花おしませ給けるに　天暦御哥
まとゐして見れともあかぬ藤浪のたゝまくおしきけふにもあるかな
清慎公家屏風に
暮ぬとハおもふ物から藤の花さけるやとには春そひさしき
藤の松にかゝりて年ふりたるをよめる　貫之
緑なる松にかゝれる藤なれとをのかころとそ花ハ咲ける
春のくれつかた実定卿のもとにつかはしける　藤原家経
藤のうら花やあるしとうらむまてみぬくれをなけくしらねは
修行し侍けるころ春のくれによみける　大僧正行尊
木のもとのすみかも今ハあれぬへし春しくれなハたれかとひこん
五十首哥たてまつりしとき　寂蓮法師
暮てゆく春の湊ハしらねとも霞におつる宇治の柴舟
山家三月尽をよみ侍ける　藤原伊綱
こぬまても花ゆへ人のまたれつる春もくれぬるみ山への里
題しらす　皇太后宮大夫俊成女
俤の袖にほふ風にのこるも恨そする春のくれかな
寛平御時きさいの宮の哥合の哥　よみ人しらす
待てといふにとまらぬ物としりなからしひてそおしき春の別は
山家暮春といへる心を　宮内卿
柴の戸をさすや日影のなこりなく春くれかゝる山のはの雲
百首哥よませ侍し時　摂政太政大臣
あすよりハ志賀の花そのまれにたに誰かハとはん春のふるさと

新古今和歌集巻第三

夏哥

題しらす　持統天皇御哥
春過て夏きにけらし白妙の衣ほすてふあまのかく山
更衣をよみ侍ける　素性法師
おしめともとまらぬ春もあるものをいはぬにきたる夏衣かな
前大僧正慈円
散はてゝ花のかけなき木のもとにたつことやすき夏衣かな

夜衣きていくかにか知ぬらんのこれる花はまつかも共ぬはく
夜のさしめの言ふそこと紛けり　望太后家大夫後妻
折ぬしもうつまいかへ川世中の人の心乃ふれ深の持てく
知ノ花如月といつるんをよさせ掛けり　白川院御宇
うれしなの村くさけるかさねをいかさせ月の新しそみる
毎りしらす　志宰ノ大夫ノ子家
知花のさ紀ぬる時は白雲ぬれ波りて泊へるかさねとうこう
無院に紛けり時神さちなて　武子内親王
忌めやわふひを草にふひき結ひる孫のゝ為れ霧の明かれ
おふひをよめり　小侍従
明かなれはその神山のわふひ草年は毎まれ二葉なるらん
寛徳四年三月院の後きにおきの源の紀さる和　藤原雅経
野鳥さはいまかこわさうれ沼に荊草のかりこる海くに志けるなれ
里家雅院に百ゝ奇まけり時夜奇　後賢門院安藝云
さくらおきのおふれ下草志けまさくおくておし花なるれは

毎りしらす　名ノ孫好速
花殺し庭の末持しも我わわひくおきてる月乃新を掃かれ
うにくと恨し人の後ふしを草葉につけて思ふしろ那
夏草にはしをわよくわれ五年の月人もむまとか計に　藤原元真
夜草にはしをりにくれと明鳥なるや我宿に一しもせぬ　延喜御宇
鳴こ忍紙えんやは思ふぬ郭公初うのまなる乃陰よくれて　柿本人麿
空蔵こりまさそ紛けるよ人の問鳥なるなれと中なるおけかの片思のま　吳武甲
明鳥こ忍紛却とはりて思れたらまの常にりちやぬままし
もりこのましてりけり曉却とくさすのちまさけまは　無乳母
郭公み山おる海物し思を以川まのさやれられうさくらん
まりしらす　ふこんしらす
五月山知也月取却とくさすさけたわらす又なかむりも

をのつまこひつゝなくやさ月やみ神なひやまの屋ゝ時鳥
時鳥一こゑなくいゐる歌ハいふそうへ人のいをやもてゐる
中納言家持
郭公なる紀つ出りあし川の山ゆきなそしこ漢よまりしを
大中臣能宣郎下
二あゝとなる紀つ出をさりハ時鳥衣かたしきうたゝねをせ舞
大納言雅信
時鳥ゆゑさうちときぬ思ひねいこぬ人を紡まれのこそきく
紡客守時鳥といふ人を
白川院御所
きそしを粗そ稱られぬ時鳥紡し歌しあれ心なるひま
花園左大臣
神さちなそ郭公をきゝそ
お中納言進房
卯花のうれはなるゝねと時鳥月のつゝれかけなるくなり
今ハ家宮日本大臣ニ紡ける時百ゝ家よませ紡ける時郭公家 皇太后文大夫紡ハ
ひしかふ草の屋乃よ紀の面なり源なそへう山ゆくきす

あゆんそくを花橘に風ふきて山ゆくとさ夜雲にはなくなり
相撲
きゝそあゝ稱なまり物紡時鳥中ゝくなりや歌堂ハ一ゑう
郭しらす
雅里をとひもやくると時鳥心のうさ里紡そこをひまし
山部郎
元治八年 お太政大臣ニ萬葉院家合ニ 時鳥を 周防内侍
歌紡きれ紡りもやまの時鳥雲井のよ小ゑ一ゑうそきく
二こゑ心ゆこさう寸ハ出し時鳥ゆく歌あしのと雨わ歌をも
抜案紡公迎
百ゝ家ニ付ニ時鳥家中ニ
民アヘ範光
ゆくゝきゆ粗一こゑ心ひ和よ老うれ杜の歌堂の葛紡
時鳥をよめり
八條院ニ倉
一ゑりハ心ひうあへぬ時鳥ゆゑそうれと紀の雲乃まよひり
手ゑ百歳家合ニ
接奥敦大臣
有明のつきゆくみし月ハ出ぬ山郭公まり川歌なりしよ

後徳大寺左大臣家に十首歌よみ侍りけるによみてつかはしける　皇太后宮大夫俊成
我心いかにせよとて郭公雲まの月のかげに鳴らん

郭公の歌よみ侍りける　前太政大臣
郭公鳴くやはつせの山の端は月ゆへあるもうらめしき哉

権中納言親宗
有明の月は待ぬに出ぬれど猶山ふかき郭公哉

杜間郭公といふことを　藤原保季朝臣
過にけりしのたの杜の郭公たえぬしづくを袖にのこして

題しらず　藤原家隆朝臣
いかにせんこぬよあまたの郭公またじと思へばむらさめの空

百首歌奉りし時　式子内親王
声はして雲路にむせぶ郭公涙やそゝく宵の村雨

千五百番歌合に　権中納言公経
郭公猶うとまれぬ心かなながなく里のよその夕暮

題しらず　西行法師
きかずともこゝをせにせん郭公山田の原の杉のむら立

郭公ふかき峰より出にけり外山のすそに声のおちくる

山家暁郭公といへる心を　後徳大寺左大臣
をざゝふくしづのまろやのかりのとをあけがたに鳴郭公哉

五首歌人々によませ侍りける時夏歌とてよみ侍りける　摂政太政大臣
うちしめりあやめぞかほる郭公なくや五月の雨の夕暮

述懐によせて百首歌よみ侍りける時　皇太后宮大夫俊成
けふは又あやめのねさへかけそへてみだれぞまさる袖のしら玉

五月五日くすだま遣はし侍りける人に　大納言経信
あかなくにちりにし花のいろいろはのこりにけりな君がたもとに

局ならびにすみ侍りけるころ五月六日もろともになかめあかしてあしたになかきねをつゝみて紫式部につかはしける　上東門院小少将
なべて世のうきになかるゝあやめ草けふまでかゝるねはいかゞみる

返し　紫式部
なにごとゝあやめはわかでけふも猶たもとにあまるねこそたえせね

山路早苗といへる心を　大納言経信
早苗とる山田のかけひもりにけり引しめなはに露ぞこぼるゝ

釈阿和歌所にて九十賀し侍りし折屏風に五月雨　摂政太政大臣
を山田にひくし(め)縄のうちはへてくちやしぬらん五月雨のころ

題しらず　伊勢大輔
いかはかり田子のもすそもそほつらん雲まもみえぬ頃の五月雨

大納言経信
み志ま江の入江のまこも雨ふれハいとゝ志ほれてかる人もなし

前中納言匡房
真こもかる淀のさは水ふかけれとそこまて月の影ハすみけり

雨中木繁といふ事を　藤原基俊
玉かしハ志けりにけりな五月雨に葉もりの神の志めハふるまて

百首歌よませ侍りける　後徳大寺左大臣
五月雨ハおふの河原のまこも草からてや波の下にくちなん

五月雨の心を　藤原定家朝臣
玉桙乃道ゆく人のことつても絶てほとふるさみたれの空

荒木田氏良
五月雨の雲のたえまをなかめつゝ窓より西に月を待かな

百首歌奉りし時　前大納言忠良
あふちさく外面の木陰露おちて五月雨はるゝ風渡るなり

五十首歌奉りし時　藤原定家朝臣
さみたれの月はつれなきみ山よりひとりもいつる郭公かな

太神宮へ奉りし夏歌中に　太上天皇
時鳥雲井のよそに過ぬなりはれぬ思ひの五月雨の比

建仁元年三月歌合に雨後郭公といふことを　二条院讃岐
五月雨の雲まの月乃晴ゆくを志はしまちける時鳥かな

題しらず　皇太后宮大夫俊成
誰かまた花橘に思ひてん我もむかしの人となりなは

右衛門督通具
行末を誰志のへとて夕風にちきりかおかむ宿の橘

百首歌奉りし時夏歌　式子内親王
かへりこぬむかしを今と思ひねの夢の枕ににほふたち花

前大納言忠良
橘の花ちる軒の志のふ草むかしをかけて露そこほるゝ

五十首歌たてまつりし時　　前大僧正慈円

さ月やみみしかき夜はのうたゝねに花橘の袖にすゝしき

題しらず　　よみ人しらず

尋ぬへき人ハ軒はのふるさとにそれかとかほる庭の橘

郭公花橘のかをとめてなくハむかしの人やこひしき

皇太后宮大夫俊成女

橘のにほふあたりのうたゝねハ夢もむかしの袖のかそする

藤原家隆朝臣

今年より花さきそむるたちはなのいかてむかしの香ににほふらん

式子内親王家五十首歌よみ侍りける時　　藤原定家朝臣

夕暮ハいつれの雲のなこりとて花たちはなに風のふくらん

堀河院御時きさいの宮にて閏五月郭公といふ心をおのこともつかうまつりけるに　　権中納言国信

郭公さ月みな月わきかねてやすらふこゑそ空にきこゆる

題しらず　　白河院御製

庭の面ハ月もらぬまてなりにけり梢に夏の陰しけりつゝ

恵慶法師

我宿のそともにたてるならの葉のしけみにすゝむ夏ハきにけり

摂政太政大臣家百首歌合に鵜河を読侍ける　　前大僧正慈円

鵜かひ舟あはれとそみるものゝふのやそうち川の夕やみの空

寂蓮法師

鵜かひ舟たかせさしこすほとなれやむすほゝれゆくかゝり火の影

千五百番歌合に　　皇太后宮大夫俊成

大井川かゝりさしゆく鵜かひ舟いくせに夏の夜をあかすらん

藤原定家朝臣

久かたの中なる川のうかひ舟いかにちきりてやみをまつらん

百首歌奉りし時　　摂政太政大臣

いさりひのむかしのひかりほのみえてあしやの里にとふほたるかな

式子内親王

窓ちかき竹のはすさふ風のをとにいとゝみしかきうたゝねの夢

鳥羽にて竹風夜涼といふことを人々つかうまつりし時　　春宮権大夫公継

窓ちかきいさゝむら竹風ふけは秋におとろく夏の夜の夢

むもふまに新みられし山の井のあさきを月のうつるにしらず
（あすつゝ宮なりしとき）（お大納言忠房）
清日んうこ月いつれ物の紀夫乃と紙漏てもしらむ波のよりれ
（家務四天王院の陳子に清の開かきこゝろ所 権大納言通光）
かさゝても深しかわかり夏衣うすくなりしに雁ゝる月新
（歌百ゝ宮合より）（摂政太政大臣）
深さは秋やかへて初潮にふる河野為之のまゝ紀のかけ
（摂政太政大臣歌まて詩宮と合せけるに為之深自秋といふことを読けり有家歌下）
（あのしられ）（西川法師）
為野為之り清のかかるゝ柳をしりしてよう意まりれ
よられつる野りせの草のきゝひく深く日をうゝ夕ちとの穴
（出家法院に百ゝ宮なりしける時）（藤原法輔歌下）
とのつゝ深くもあらう夏衣日もゝくれの夏のなこわ母
（子五百歳宮合より）（権中納言公雅）
露もうゝ庭のあさく打なひきこむらるゝ夕ちの雲

十市にふゝ夕ちとしくゝのあさのくゝ山をくれゆく
（東云篇遠寺といふ所を読けり）（深後歌歌下）
（夏月をよめり）（後三位歌詞）
庭のおもはゝ深くはゝ夕ちの穴さわけなくもめる月ゝ
（百ゝ宮中より）（東子内親王）
夕ちと乃雲もとまらぬ夏の日のうゝ山に日ゝしの夢
（子五百歳宮合に）（お大納言忠房）
ゆふつく日さ深や庵の里のよさひくもあらう日ゝしの
（百ゝ宮なりし時）（摂政太政大臣）
秋ちかに宮ゝの杜になく蝉乃涙のなやゝ家うしらん
（二條院讃岐）
鳴蝉のよ恋も深しきゝ夕ちれは秋をかけるゝ杜の下露
（おうちの殿のおうをみてよこと歌けり）（壬生忠方）
いつちとうよ深い蛍のうゝ夕ちんのうゝ志ゝぬ草の枕う
（あすつゝ宮なりし時）（摂政太政大臣）
蛍こふ野沢にしけるあれのよれくしたにうゝ雨の風

刑部卿頼輔歌合し侍りけるに納涼をよみ侍りける　俊恵法師

楸おふるかた山かけにしのひつゝ吹けるものを秋の夕かせ

瞿麦露滋といふことを　高倉院御哥

しら露の玉もてゆへるませのうちに光さへそふ床夏の花

夕顔をよめる　前太政大臣

白露のなさけおきける言の葉やほの〳〵見えし夕顔の花

百首歌奉りける中に　式子内親王

たそかれの軒はの荻にともすれはほに出ぬ秋そ下にこととふ

夏の歌とてよみ侍りける　前大僧正慈円

雲まよふ夕に秋をこめなから風もほに出ぬ荻のうへかな

太神宮へ奉りし夏の歌の中に　太上天皇

山さとの峰のあま雲とたえして夕へすゝしきまきのした露

文治六年女御入内屏風に　入道前関白太政大臣

岩井くむあたりのをさゝ玉こえてかつ〳〵むすふ秋の夕露

千五百番歌合に　宮内卿

片枝さすおふの浦なし初秋になりもならすも風そ身にしむ

百首哥奉りし時　前大僧正慈円

夏衣かたへすゝしくなりぬなりよやふけぬらんゆきあひの空

延喜御時月次の屏風に　壬生忠岑

夏はつる扇と秋の白露といつれかまつはおかんとすらん

紀貫之

みそきする河の瀬みれは唐衣日もゆふくれに浪そたちける

新古今和歌集巻第四

秋歌上

題しらす　中納言家持

神なひのみむろの山の葛かつらうらふきかへす秋はきにけり

百首哥よませ給ける秋の歌　崇徳院御哥

いつしかと荻の葉むけのかたよりにそゝや秋とそ風もきこゆる

藤原季通朝臣

このねぬるよのまに秋はきにけらし朝けの風のきのふにもにぬ

文治六年女御入内屏風に　後徳大寺左大臣

いつもきく麓の里と思へどもきのふにかはる山おろしの風

百首歌よみ侍りける中に　藤原家隆朝臣

きのふだにとはんと思ひし津の国の生田の森に秋は来にけり

家経朝臣の桂の家にて初秋の心をよみ侍りける　藤原秋経

吹くかぜの色こそみえね高砂の尾上の松に秋は来にけり

百首歌奉りし時　皇太后宮大夫俊成

ふしみ山松のかげより見わたせばあくる田のもに秋風ぞ吹く

守覚法親王五十首歌よませ侍りける時　藤原家隆朝臣

明けぬるか衣手さむしすがはらやふしみの里の秋のはつかぜ

千五百番歌合に　摂政太政大臣

深草の露のよすがを契りにて里をばかれず秋は来にけり

右衛門督通具

あはれ又いかにしのばん袖の露野原の風に秋は来にけり

源具親

しきたへの枕のうへに過ぎぬなり露をたづぬる秋の初風

顕昭法師

水くきの岡のくずはも色づきてけさうらがなし秋の初風

越前

あはれなる心のわざぞ夕露を袖のうらにもおきあまるらん

五十首歌奉りし時荻の音　藤原雅経

きのふまでよそにしのびし下荻の末葉の露に秋風ぞ吹く

題しらず　西行法師

をしなべて物をおもはぬ人にさへ心をつくる秋のはつかぜ

あはれいかに草葉の露のこぼるらん秋風たちぬ宮城野の原

崇徳院に百首歌たてまつりける時　皇太后宮大夫俊成

みしぶつきうゑし山田にひたはへて又袖ぬらす秋は来にけり

中納言中将に侍りける時家にて山家秋といふ心をよませ侍りけるに　法性寺入道前関白太政大臣

朝霧や立田の山の里ならで秋来にけりとたれかしらまし

題しらず　中務卿具平親王

夕暮は荻吹く風の音まさる今はたいかに寝覚めせられん

後徳大寺左大臣
夕されば荻の葉むけを吹風にことぞともなく涙おちけり

崇徳院に百首歌奉りける時　皇太后宮大夫俊成
荻の葉も契りありてや秋風のおとづれそむるつまとなるらん

題しらず　七條院権大夫
秋来ぬと松吹風もしらせけりかならず荻のうは葉ならねど

[illegible]秋の初風[illegible]　藤原[illegible]
[illegible]の杜の[illegible]秋の初風

百首歌より　式子内親王
うたゝねの朝けの袖にかはるなりならす扇の秋の初風

題しらず　相模
手もたゆくならす扇のおき所わするばかりに秋風ぞ吹

太宰三位
秋風は吹むすべども白露のみだれておかぬ草の葉ぞなき

曽禰好忠
あさぼらけ荻のうは葉の露みればやゝはださむし秋の初風

小野小町
吹むすぶ風はむかしの秋ながらありしにもにぬ袖の露哉

延喜御時月次屏風に　紀貫之
大空を我もながめてひこ星の妻まつ夜さへひとりかもねん

題しらず　山辺赤人
この夕べ降つる雨はひこ星のと渡る舟のかいのしづくか

宇治前関白太政大臣家にて七夕の心をよみ侍ける　権大納言長家
年をへてすむべき宿の池水は星合の影もおもなれやせん

花山院御時七夕の歌つかうまつりけるに　藤原長能
袖ひちてわが手にむすぶ水のおもに天つ星合の空をみるかな

七月七日[illegible]よみ侍りける　祭主輔親
[illegible]合の空をみる[illegible]

七夕のこゝろをよみ侍ける　太宰大弐高遠
織女の天の羽衣うちかさねぬる夜すゞしき秋風ぞ吹

小弁
[illegible]この衣のつまならして吹かへしける秋の[illegible]

皇太后宮大夫俊成女
あまの河とわたる舟のかぢの葉にいく秋かきつ露のたまづさ

百首歌中に　式子内親王
ながむれば衣手すゞし久かたの天の河原の秋の夕暮

家に百首歌よませ侍りける時　入道前関白太政大臣
いかばかり身にしみぬらん七夕のつま待よひの天の川風

七夕の心を　権中納言公経
ほしあひの夕べすゞしき天河もみぢの橋をわたる秋風

待賢門院堀河
七夕のあふせ絶せぬ天河いかなる秋かわたりそめけん

女御徽子女王
わくらはに天の河波よるながら明る空にはまかせずもがな

大中臣能宣朝臣
いとゞしく思ひけぬべし七夕の別の袖にをける志ら露

中納言兼輔家屏風に　紀貫之
織女は今やわかるゝ天河河霧たちて千鳥なくなり

堀河院御時百首歌奉りける時萩をよみ侍りける　中納言匡房
河水に鹿のしがらみかけてけりうきてながれぬ秋萩の花

題しらず　従三位頼政
かり衣われとはすらじ露しげき野原の萩の花にまかせて

題しらず　権僧正永縁
萩が枝をおりそめにけり月草の花にも衣露にうつると

守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに　顕昭法師
萩が花ま袖にかけてたかまとの尾上の宮にひれふるやたれ

題しらず　祐子内親王家紀伊
をく露もしづ心なく秋風にみだれて咲る真野の萩原

人麿
秋萩の咲ちる野辺の夕露にぬれつゝきませ夜はふけぬとも

中納言家持
さをしかの朝たつ小野の秋萩に玉と見るまでをける白露

凡河内躬恒
秋の野をわけゆく露にうつりつゝ我衣手は花のかぞする

誰をかもまつちの山の女郎花秋と契れる人そあるらし

小野小町

女郎花盛(?)の色のあたにそ出てくるかし雲の上やなき

藤原元真

千五百番歌合に

夕されは玉ちる野辺の女郎花枕さためぬ秋風そ吹く

左近中将良平

萩河をよめる

葉めし(?)見れとも志ら露尾花とも白女郎花の入る枕風

公猷法印

山家深流といふ事をよみける時

うら枯るゝ野辺の草葉の露ならて女郎花にや夕日こそさせ

藤原清輔朝臣

入道前太政大臣家にて歌合し侍りける時

ひとりや秋は来て野辺をそ出て女郎花の露はみたれし

宮内卿

秋の歌とてよみ侍りける

花みれは人なつかしみ女郎花さそはれつゝや

よみ人しらす

をらてみん露も袖にや女郎花野辺の秋風

菅原輔昭

女郎花露よさけの姿かは花のあたなる名にや立らん

躬恒

うつろはむ秋をしれとや女郎花みなれて袖をぬらすらん

坂上是則

さかりなる女郎花をも見すしてや秋の夜すから枕ならせん

よみ人しらす

小倉山峰たちならし鳴鹿の秋の女郎花いかに見るらむ

人麿

風のかけにいかなる色の花見れは女郎花まつ露をしのふ

式子内親王

百首歌の中に

花薄まねくかたにや出てゆく女郎花秋のさかりを

藤原公経

野辺ことに露にうつろふ秋の色をわすれぬ花の女郎花かな

入道前太政大臣家百首歌よませ侍りけるに

和歌所歌合に

野辺ちかく咲そめしより花のなつかしき秋の下風

光明峯寺入道前摂政左大臣

題しらず

身にとまる思ひを荻のうは葉にてこのごろかなし夕暮の空　前大僧正慈円

崇徳院御時百首歌めしけるに荻を

身のほどを思ひつゞくる夕暮の荻の上葉に風わたるなり　大炊御門右大臣

秋歌とてよみ侍りける

秋はたゞものをこそ思へ露かゝる荻の上ふく風につけても　源重之女

堀河院御時百首歌奉りける時

あきかぜのやゝはださむく吹くなへに荻の上葉の音ぞかなしき　藤原基俊

百首歌奉りし時

荻の葉に吹けば嵐の秋なるを待ちける夜半のさをしかの声　摂政太政大臣

おしなべて思ひしことの数〻に猶色まさる秋の夕暮

題不知

暮かゝるむなしき空の秋をみておぼえずたまる袖の露かな

家に百首歌合し侍りける

物おもはでかゝる露やは袖におくながめてけりな秋の夕暮

おのこども詩をつくりて歌に合せ侍りしに山路秋行といふことを　前大僧正慈円

み山路やいつより秋の色ならむ見ざりし雲の夕暮の空

題しらず　寂蓮法師

さびしさはその色としもなかりけり槙たつ山の秋の夕暮

西行法師

心なき身にもあはれはしられけり鴫たつ沢の秋の夕暮

西行法師すゝめて百首歌よませ侍りけるに　藤原定家朝臣

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮

五十首歌奉りしとき　藤原雅経

たへてやは思ひありともいかゞせん葎の宿の秋の夕暮

ゆふべのこゝろを読侍りける　宮内卿

思ふことさしてそれとはなきものを秋の夕べを心にぞとふ

鴨長明

秋風のいたりいたらぬ袖はあらじたゞ我からの露の夕暮

西行法師

おぼつかな秋はいかなる故のあればすゞろに物のかなしかるらん

それなからむかしにもあらぬ秋風にいとゝ詠をしつのをたまき　式子内親王

題しらず　藤原長能

日くらしの鳴夕暮そうかりけるいつもつきせぬ思ひなれとも

和泉式部

秋くれはときはの山の松風もうつるはかりに身にそしみける

曾禰好忠

秋風のよそに吹くる音羽山なにの草木かのとけかるへき

相模

暁の露は涙もとゝまらてうらむる風の声そのこれる

法性寺入道前関白太政大臣家の歌合に野風　藤原基俊

高円の野路の篠原末さはきそゝや木からしけふ吹ぬなり

千五百番歌合に　右衛門督通具

ふか草の里の月影さひしさもすみこしまゝの野への秋風

五十首歌奉りし時杜間月といふ事を　皇太后宮大夫俊成女

おほあらきの森の木間をもりかねて人たのめなる秋の夜の月

守覚法親王五十首歌よませ侍けるに　藤原家隆朝臣

有明の月まつ宿の袖の上に人たのめなるよひの稲妻

摂政太政大臣家百首歌合に　藤原有家朝臣

風わたる浅茅か末の露にたにやとりもはてぬよひの稲妻

題しらず　左衛門督通光

むさし野や行とも秋の果そなきいかなる風か末に吹らん

百首歌奉りし時月の歌とて　大炊御門右大臣

いつまてか涙くもらて月は見し秋まちえても秋そこひしき

題しらず　式子内親王

詠わひぬ秋より外のやともかな野にも山にも月やすむらん

題しらず　前大僧正慈円

月影の初秋風と更行は心つくしにものをこそ思へ

三条院女蔵人左近

足曳の山のあなたにすむ人はまたてや秋の月をみるらん

きこゆる月といふことを　堀川院御歌

[illegible]山のくも海にわかれて[illegible]その月

題しらす　堀川右大臣

人よりも心のかきりなかめつる月はたれともわかしものゆへ

橘為仲朝臣

あやなくもくもらぬ宵をいとふかなしのふの里の秋のよの月

法性寺入道前関白太政大臣

風吹けは玉ちる萩の下露にはかなくやとる野への月かな

従三位頼政

今宵たれすゝ吹風を身にしめて吉野のたけの月をみるらん

法性寺入道前関白太政大臣家に月の歌あまたよませ侍りけるに　太宰大弐重家

月みれはおもひそあへぬ山たかみいつれの年の雪にかあるらん

和歌所の歌合に湖辺月といふことを　藤原家隆朝臣

鳰の海や月の光のうつろへは浪の花にも秋はみえけり

百首歌奉りし時秋の歌　式子内親王

更るまて詠むれはこそかなしけれ思ひもいれし秋のよの月

題しらす　皇太后宮大夫俊成女

ことはりの秋にはあへぬ涙かな月のかつらもかはるひかりに

藤原家隆朝臣

詠つゝおもふもさひし久かたの月の都の明かたのそら

五十首歌奉りし時月前草花　摂政太政大臣

故郷の本あらの小萩咲しより夜な〳〵庭の月そうつろふ

建仁元年三月歌合に山家秋月といふことを

時しもあれ故郷人はおともせてみ山の月に秋風そ吹

八月十五夜和歌所歌合に深山月といふことを

深からぬ外山の庵のねさめたにさそな木の間の月はさひしき

月前松風　寂蓮法師

月は猶もらぬ木のまも住吉の松をつくして秋風そ吹

鴨長明

なかむれは千々に物思ふ月に又我身ひとつの峯の松かせ

山月といふことをよみ侍ける　藤原秀能

あしひきの山路の苔の露のうへにねさめ夜ふかき月をみるかな

八月十五夜和歌所歌合に海辺秋月といふことを　宮内卿

心あるをしまのあまの袂かな月やとれとはぬれぬものから

忘れじな難波の秋の夜半の空こと浦にすむ月はみるとも　宜秋門院丹後

松島や潮くむ海士の秋の袖月は物思ふならひのみかは　鴨長明

題しらず

こととはん野島が崎の海人衣波と月とにいかがしほるる　前大僧正慈円

和歌所歌合に海辺月と

秋の夜の月やをじまの天の原明け方近き沖の釣舟　藤原家隆朝臣

題しらず

うき身にはながむるかひもなかりけり心にくもる秋の夜の月　前大僧正慈円

いづくにか今宵の月のくもるべきをぐらの山も名をやかふらん　大江千里

心こそあくがれにけれ秋の夜の夜深き月をひとり見しまに　源道済

かはらじな知るも知らぬも秋の夜の月待つほどの心ばかりは　上東門院小少将

たのめたる人はなけれど秋の夜は月見てぬべき心ちこそせね　和泉式部

月あかく侍りける夜

見る人の袖をぞしぼる秋の夜は月にいかなる影かそふらん　藤原範永朝臣

題しらず

身にそへる影とこそみれ秋の月袖にうつらぬ折しなければ　相模

永承四年内裏歌合に

月影のすみわたるかな天の原雲吹きはらふ夜はの嵐に　大納言経信

題しらず

たつた山よはにあらしの松吹けば雲にはうとき峰の月影　左衛門督通光

崇徳院に百首歌奉りけるに

秋風にたなびく雲の絶え間よりもれ出づる月の影のさやけさ　左京大夫顕輔

題しらず

山の端に雲のよこぎる宵の間は出でても月ぞなほ待たれける　道因法師

[illegible]秋の[illegible]月　殷富門院大輔

式子内親王

霄のまにさてもねぬへき月ならは山のはちかき物はおもはし

ふくるまてなかむれはこそかなしけれおもひもいれし秋のよの月

五十首歌たてまつりし時

摂政太政大臣

雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして月をみるかな

家に月五十首歌よませ侍ける時

月たにもなくさめかたき秋のよの心もしらぬ松の風かな

藤原定家朝臣

さむしろや待夜の秋の風ふけて月をかたしくうちの橋姫

[illegible]

宮内卿藤原経

秋の夜のあかつきひとりなかむれは待よにあまるありあけの月

五十首歌たてまつりけるに野径月

摂政太政大臣

ゆくすゑは空もひとつのむさし野に草の原よりいつる月かけ

雨後月

宮内卿

月をなを待らんものかむら雨の晴行雲のすゑのさと人

題不知

右衛門督通具

秋の夜は宿かる月も露なから袖に吹こす荻の上風

源家長

秋の月しのに宿かる影たけてをさゝか原に露ふけにけり

元久元年八月十五夜和歌所にて田家月といふことを

前大納言忠良

風わたる山田の庵をもる月や穂なみにむすふ氷なるらん

和歌所歌合に田家月を

前大僧正慈円

雁のくる伏見の小田に夢覚てねぬ夜の庵に月をみるかな

皇太后宮大夫俊成女

いなは吹風にまかせてすむ庵は月そまことにもりあかしける

題しらす

あくかれてねぬ夜の塵のつもるまて月にはらはぬ床のさむしろ

大中臣定雅

秋の露やわか袂の床のやとりも月やとれとも袖そ露けき

崇徳院に百首歌たてまつりけるに

左京大夫顕輔

秋の田に庵さす賤のとまをあらみ月とともにやもりあかすらん

百首歌たてまつりし時秋のうた　式子内親王

秋の色はまかきにうとくなりゆけと手枕なるゝねやの月影

秋のうたの中に　太上天皇

秋の露やたもとにいたくむすふらん長き夜あかすやとる月かな

千五百番歌合に　左衛門督通光

さらにまた暮をたのめと明にけり月はつれなき秋のよの空

摂政家百首歌合に暁月の心を詠侍る　二條院讃岐

大かたの秋の寝覚の露けくはまたたか袖に有明の月

千五百番歌合に　藤原雅経

払ひかねさこそ露のしけからめやとるか月の袖のせはきに

新古今和歌集巻第五

秋哥下

和歌所にて男ども歌よみ侍りしに夕の鹿といふことを　藤原家隆朝臣

下紅葉かつちる山の夕時雨ぬれてやひとり鹿の鳴らん

百首歌奉りし時　入道左大臣

山おろしに鹿のねたかく聞ゆなり尾上の月にさよやふけぬる

題しらず　寂蓮法師

野分せし小野の草ふしあれはてゝみ山にふかきさをしかの声

俊恵法師

あらし吹まくすか原になく鹿はうらみてのみや妻をこふらん

前中納言匡房

妻こふる鹿のたちとをたつぬれはさ山かすそに秋風そ吹

百首歌奉りし時秋の歌　惟明親王

み山への松乃梢をわたるなり嵐にやとすさをしかの声

鹿の歌とてよみ侍りける　土御門内大臣

我ならぬ人もあはれやまさるらん鹿なく山乃秋の夕くれ

百首歌よみ侍りける　後徳大寺左大臣

たくへくる松の嵐やたゆむらん尾上にかへるさをしかの声

千五百番歌合に　前大僧正慈円

鳴鹿のこゑにめさめてしのふかな見はてぬ夢の秋の思ひを

歌合し侍りける時鹿をよめる　権中納言俊忠

終夜妻とふ鹿のなくなへに小萩が原の露ぞこぼるゝ

題しらず　源道済

寝覚して久しくなりぬ秋の夜は明けやしぬらん鹿ぞ鳴くなる

西行法師

を山田の庵ちかく鳴く鹿の音におどろかされておどろかすかな

白河院鳥羽に渡らせ給ひける時田家秋興といふことを人々よみ侍りけるに　中宮大夫師忠

山里のいなばの風に寝覚して夜ふかく鹿の声をきくかな

郁芳門院の前栽合によみ侍りける　藤原顕綱朝臣

秋萩やほころびそめし牡鹿の鳴くなる野べのよそのゆふ風

題しらず　俊恵法師

たつた山木末まばらになるまゝにふかくも鹿のそよぐなるかな

式子内親王家百首歌合の後よみ侍りけるに　権大納言忠家

なく鹿の秋の寝覚のとこのうへにおきゐて袖や露けかるらん

摂政太政大臣家の百首歌合に　前大僧正慈円

身にしむる庵りの袖の露ならんいかにも限る秋の色かは

題しらず　よみ人しらず

秋田かる仮庵をつくり我をれば衣手さむし露ぞおきける

前中納言匡房

ねぐらにもわきてやしかの色見えん山田のをしね秋ふけてきく

藤原為政朝臣

時雨るゝ夕日の影に入りし鹿を庵にねさして枕をこえぬかな

中納言家持

今よりは秋風さむくなりぬべしいかでか独り長き夜をねん

人麿

つきイ

鶉なくふるき庵の狭き庭の秋の色こそ露にしをるれ

牡鹿の妻とふ山の岡べなるわさ田はからじ霜はおくとも

貫之

夕まて狩る山田のいねは袖のみてこそ入りさるへしと見えけれ

菅贈太政大臣

萩の葉よいかなる時におきつゆの袖の涙のあはれなる露

我宿の尾花かうへの白露のきえぬ程こそ枕風に候

中納言家持

秋やくるやさきやおもふらん浅茅か原の今朝の白露

恵慶法師

なきされいつく白露に我宿の浅茅かうへに色付にけり

人麿

おほつかな野にも山にも白露のなに事をかは思ひ置らん

王六麿内侍

於冷泉院みそかなりける所に野の草といふ題を

露しけき野へにかよはゝ唐衣ぬるとも人の家にて

堀川右大臣

庭の色にしけき蓬にことよせて心のまゝにおける露かな

藤原季経

[illegible]

秋の野の萩おしなへておく露にぬれてや人の尋ゆくらん

百首歌中

袖にさへ露やおくらんひとり秋の夕暮のけしきのとふ

寂蓮法師

題しらす

露は袖に物思ふころはさそなおく必秋のならひならねと

太上天皇

野原より露のゆかりを尋きて我衣手に秋風そ吹

西行法師

題しらす

ことわりと秋にならひし袖なれとかゝる涙の袖のはかりは

守覚法親王家五十首歌中

雲の様たる秋の夕暮ぬれぬるに袖の露を枕にせよとや

藤原家隆朝臣

百首歌中に

絶えぬる袖の浅茅にむすほれし露の庭の秋風のかせ

式子内親王

題しらす

秋風は身にしむはかり吹にけり今やうつらん妹か小衣

藤原輔尹朝臣

千五百番歌合に

衣うつ音は枕にすかはらやふしみの夢をいく夜残しつ

前大僧正慈円

衣うつみ山の庵のしはしはもしらぬ夢路にむすふ手枕

権中納言公経

和歌所歌合に月の下に衣を擣つといふことを　摂政太政大臣

里は荒て月やあらぬと恨てもたれ浅茅生に衣うつらん

宮内卿

まとろまてなかめよとてのすさひかな麻のさ衣月にうつ声

千五百番歌合に　藤原定家朝臣

秋とたにわすれんと思ふ月影をさもあやにくにうつ衣かな

擣衣をよみ侍ける　大納言経信

故郷に衣うつとはゆく雁や旅の空にもなきてつくらん

中納言兼輔家屏風に　貫之

雁なきて吹風さむみから衣君まちかてにうたぬ夜そなき

擣衣のこゝろを　藤原雅経

みよし野の山の秋風さよふけて故郷寒く衣うつなり

百首歌奉りし時　式子内親王

千たひうつ砧の音に夢さめて物思ふ袖の露そくたくる

更にけり山の端ちかく月さえてとをちの里に衣うつ声

九月十三夜月くまなく侍けるをなかめあかして侍ける　公経卿

秋はつるさよふけかたの月みれは袖ものこらす露そおきける

百首歌奉りし時　藤原定家朝臣

独ぬる山鳥のおのしたり尾に霜置まよふ床の月影

摂政太政大臣家に詩歌合せ侍けるに野月露涼といふことをよみ侍ける　寂蓮法師

ひとめみし野への気色はうら枯て露のよすかにやとる月かな

月のうたとてよみ侍ける　大納言経信

秋の夜は衣さむしろかさねても月の光にしく物そなき

九月はかりに　花山院御歌

秋の夜ははや長月に成にけりことはりなりやねさめせらるゝ

五十首歌奉りし時　寂蓮法師

村雨の露もまたひぬ槇の葉に霧立のほる秋の夕暮

秋の歌とて　太上天皇

さひしさはみ山の秋の朝くもり霧にしほるゝ槇の下露

河霧といふことを　左衛門督通光

明ほのや川せの浪のたかせ舟くたすか人の袖の秋きり

堀河院御時百首歌奉りける時霧を詠る　権大納言公実

ふもとをは宇治の河霧たちこめて雲ゐにみゆる朝日山かな

よみ人しらず

山里の霧のまかきのへたてすは遠方人の袖もみてまし

曾禰好忠

なく雁の音をのみそきく小倉山霧たちはるゝ時しなけれは

清原深養父

かきほなる荻の葉そよき秋風の吹なるなへに雁そ鳴なる

人麿

秋かせに山とひこゆる雁金のいや遠さかり雲かくれつゝ

凡河内躬恒

初雁の羽風涼しくなるなへに誰か旅ねの衣かへさぬ

よみ人しらず

雁金は風にきほひて過れとも我待人のことつてもなし

西行法師

横雲の風にわかるゝしのゝめに山とひこゆる初雁の声

白雲をつはさにかけて行雁の門田の面の友したふなる

五十首歌奉りし時月前聞雁といふことを　前大僧正慈円

大江山かたふく月の影さえて鳥羽田の面におつる雁金

題しらず　俊恵法師

むら雲や雁の羽風に晴ぬらん声きく空にすめる月影

皇太后宮大夫俊成女

吹まよふ雲井をわたる初雁の翅にならす四方の秋風

詩を合せ侍りしに山路秋行といふことを　藤原家隆朝臣

秋風の袖に吹まく峰の雲を翅にかけて雁も鳴なり

五十首歌奉りし時菊籬月といふことを　宮内卿

霜をまつ籬の菊の宵の間に置まよふ色は山の端の月

堀河院御時内裏へ菊をめしけるに奉るとて結び付ける　花園左大臣

九重にうつろひぬとも菊の花もとの籬を思ひわするな

権中納言定頼

今よりは又咲花もなき物をいたくなをきそ菊の上の露

秋ゝせよ志ほるゝの人乃菅まわも虫の祢いさゝろ松けるに
（かれ川聖名のきゝくまとを）（中務卿具平親王）
（多かりしらす）（大江嘉言）
祢さんもろ神さへさしく秋の秋乃嵐ふくなわ松虫のなり
（千五百番歌合より）（お大僧正慈実）
秋ゝ風ふくゝ衣も露も濡ゝ草ゝさとさふ拘ハ鶏なわ
入日さしぬりとのお花うちなひ雖秋ゝせり鶏鳴らん
（多かりしらす）（皇太后宮大夫俊成女）
あさふちろ露の枕ハ濡まひく鶏なくもゆゝ乃やまゝせ
（千五百番歌合より）
やゝふ人も嵐ゝ秋いさそ末のたゝつむ宿の石芝
ゝさかゝる露をハ神ハをれまゝひうち拾ゝ川の人乃秋ゝる
（秋のうことそ）（太上天皇）
雖ふけぬなけや雲秋の蕃屋くかけさしよもきふの月

きわくさと鳴や雲秋乃さしろ衣くしかゝ樵も祢葉
（百ゝ歌ありし時）（桜間右衛門）
（千五百番歌合より）（長谷大夫公継）
祢さんもろ長月の秋ハ家室ゝ今鶏鳴せハ雲やをらん
（和歌所にて六ゝ歌つゝ両つゝし時秋の歌）（お大僧正慈実）
秋ゝ嫗うき淡路の鳴ハ名所ハ月ゝ月ゝをとる濡せ
（菅秋のこゝろを）
長月をいくゝ名所ハ成ぬらん淡葉ハ月のいとゝさひゆく
（桜間大夫右衛門大鶏ハ鳴けり時百ゝ歌ありしまゝ也鳴けりて）（雍豊法師）
鶏の雲ハかけ橋秋くれ雲ハ秋中にハ雲やさそん濡るらん
（さくらのりみちたしめゝろみゝ）（中務卿具平親王）
川のまふ紅葉しぬらん山樵ハ日ゝ花のちる紅おしみし
（紅葉ハ遠雲とりふことを）（宮倉院御歌）
うゝ雲のちまふ山乃ゝ葉ハさやゝ形ゝ祢とそれとみゝかわ
（秋歌とてよめり）（八條院宮倉）
神なひのゝむろハ稍いらんなゝの山を時雨もろゝろ

玲瓏河ふる紅葉に日數ゐて山田の原の時雨をそきく
家務中天皇院の陳子ありしとて川かさうの和　太上天皇
入日さしさかの山人柞原くもらぬ雨と木のもの雨ゆゑ
入日お雲日太政大臣家に百ぐ所詠けるに紅葉をも皇太后宮大夫後水
山もや雨葉をもとんたる田山松ハ志くれなゐ雨ゆゑのかハ
大井門にまゐりて紅葉ふりん紛けるに　菅原輔平朝臣
しぐとなくてうみまり紅葉を嵐の山乃林麓なるに
多ひしらず　菅原好忠
入日さしさかの山人柞原くもらぬ雨と木のもの雨ゆゑ
百ぐ所なりし時　宮内卿
左田河嵐や嶺によりけるもしたるぬ雨も錦絶まわ
左大将に紛けり時家百ぐ所合し紛けるにまゐてそを詠けり　梅田太政官
柞原雨をもふるやかりけるもしたるぬ雨の下葉あれ安にかも
藤原宣家朝臣
時まゐぬ波さへ今ぬに以川ミ河柞葉もわかわしふくらし
陳子の原におまてる雨にもしかり　源後朝臣
原ハちるぬ葉をにうつもれて形れ志のふりあれ風ゐ吹

桐のもとも雨ゆゑかなくて成にまわるなく人を紛ぬるけまさ
百ぐ所なりし秋のうた　武生門親王
人をこそ雨せに木のもとぬ雨ゆゑ雲ハ春よりハ雨也
多ひしらず　菅原昭忠
紅葉ハ名に紅ハ木も色ようハ川ゐあれの山れ
七見法親王又十ぐ所よりハ紛けるり　長宮權大夫公継
露時雨ゆゑ山陰乃下紅葉ぬるもおんあさの形なる
子又百ぐ所合ひ　藤原家隆朝臣
松にもふ正木のつゝ雨にかり外山の秋を風すさふん
多ひしらず　西川法師
法性寺入日お雲日太政大臣家に合ひ　お蔭後親隆
鶉なくかゝ雨にそゝ極りみち雨ぬ計にあれ也そゝ
百ぐ所なりし時　二條院讃岐
雨ゆゑ雨ゆゑの名ハ雨ゆゑけまさまれハふこ雨山川の水
多ひしらず　柿本人麿
飛鳥川紅葉なかゝ雨ゆゑの山乃秋風吹そ志ぬ

権中納言長方

あすか川瀬々になみよる紅やかつらき山のこからしの風

長月のころみなせに日比侍けるにあらしの山の紅葉なみたにたくふよし申つかはして侍ける人の返ことに　権中納言公経

紅葉をさこそあらしのはらふらめこの山もとも雨とふるなり

家に百首哥合し侍けるに　摂政太政大臣

立田姫いまはのころの秋風にしくれをいそく人の袖かな

千五百番哥合に　権中納言兼宗

ゆく秋の形見なるへき紅葉はもあすはしくれとふりやまかはん

紅葉をよみ侍ける　前大納言公任

うちむれて散紅葉をたつぬれは山路よりこそ秋はゆきけれ

津の国に侍けるころ道済かもとにつかはしける　能因法師

夏草のかりそめにとてこし宿も難波の浦に秋そくれぬる

暮の秋思ふ事侍けるころ

かくしつゝ暮ぬる秋とおいぬれとしかすかに猶物そかなしき

百首哥よませ侍けるに　守覚法親王

身にかへていさゝは秋をおしみみむさらてももろき露の命を

閏九月尽のこゝろを　前大僧正

なへて世のおしさにそへておしむかな秋より後の秋のかきりを

新古今和歌集巻第六

冬哥

千五百番哥合に初冬の心をよめる　皇太后宮大夫俊成

おきあかす秋のわかれの袖の露霜こそむすへ冬やきぬらん

天暦御時神無月といふことをかみにおきて哥つかうまつりけるに　藤原高光

神無月風に紅葉のちる時はそこはかとなく物そかなしき

題しらす　源重之

名とり川やなせの浪そさわくなる紅葉やいとゝよりてせくらん

後冷泉院御時うへのをのこともおほゐ川にまかりて紅葉浮水といふこゝろをよみ侍ける　藤原資宗朝臣

いかたしよまてこととはん水上はいかはかりふく山のあらしそ

大納言経信

散かゝる紅葉なかれぬ大井河いつれゐせきの水のしからみ

大井川にまかりて落葉満水といふことをよみ侍ける　藤原家経朝臣

高瀬舟しふくはかりに紅葉はのなかれてくたる大井川かな

日くるれいわふ人を知し海さ紀ちる嶺のわりしれ高まるわして
源後彩朝卜
さりしらに
菅原清輔朝卜
をのつから音をとろ地を庭の和をよ来れ紀ぬまく若れ夕風
美日社家合に落葉といふことを読をわしお大傳正慈禎
来れ葉ちる宿ふるしく神のうををまことを志そ引嵐かな
右衛門督西具
おのをちる阿毎やまふふ我神にも落ち波乃い落とみるまそ
菅原雅經
稲わり雲に嵐乃しふまとあわちるゝ正来れつらきれ山
七條院大納言
初阿毎思れ山の和葉をと嵐ふきとい深をやあるらん
信濃
阿毎つく神を引あへをと足引乃山れ来葉にあらしふく法
菅原秀徳
山さ雲の風をとりまし女々當ふ来葉みそれく地そうなし女

冬れきそ山をあらいふ来葉ふわ弱る松さへ峯にさひしなる
あすそなりし内
文内口
うらふし紀秋れくるやち面山なるあへぬ枝ふ嵐ふく為利
彩補口家合に落葉のふを
菅原資隆朝臣
阿毎ふ雲さけい来葉のふる地をそれふもめるくわり被ふ
今もいしらさと
法眼芳文算
阿もあれ冬ハ葉りつまれ神無月まいれ如ぬ枯れしを来
津守雪基
いけ乃まに雲れ来れかりるらんをしなと鶴れ来柏の風
飛り法師
月を絡たるの乃雲ハをれまをわふあるへなるを引志ふれなる
お大傳正兄忠
神無月来れこの葉はなるをそく庭ふそ風れ音ハ少ゆる
清輔朝臣
此来れ戸に入日の新ハ所なりしいふ志くるく山道なるん

山家時雨といふこゝろを　藤原隆信朝臣

雲はれて後もしくるゝ柴の戸や山風はらふ松のした露

寛平御時后宮の歌合に　よみ人しらす

神無月時雨ふるらし佐保山のまさきのかつら色まさりゆく

題しらす　中務卿具平親王

木のはしく宿に時雨ときゝまてそ露にぬるゝ袖とこそしれ

中納言資綱

時雨つゝをそくれ行の宿ことによもよそにまたぬ

十月廿日あまりの杜をすくとて　能因法師

時雨の雨そめかねてけり山城のときはの杜のまきの下葉は

題しらす　清原元輔

冬をあさみまた時雨とおもひしをたえさりけりな老の涙も

旅宿時雨といふことを　後白河院御哥

まはらなる柴の庵に旅ねして時雨にぬるゝさ夜衣かな

時雨を　前大僧正慈圓

やよ時雨もの思ふ袖のなかりせは木葉の後に何を染まし

冬歌の中に　太上天皇

深緑あらそひかねていかならんまなく時雨のふるの神杉

題しらす　人麿

時雨の雨まなくしふれはまきの葉もあらそひかねて色付にけり

和泉式部

世中になほもふるかな時雨つゝ雲まの月のいてやと思へと

百首歌奉りし時　二条院讃岐

折しもあれなかめにかゝる浮雲の袖もひとつにうち時雨つゝ

題しらす　西行法師

秋しのや外山の里や時雨らん生駒のたけに雲のかゝれる

道因法師

はれくもる時雨はさためなきものをふりはてぬるは我身なりけり

千五百番歌合に冬歌　源具親

今はまたちらても紛ふ時雨かなひとりふりゆく庭の松風

題しらす　俊恵法師

みよしのゝ山かきくもり雪ふれは麓の里はうちしくれつゝ

百首歌奉りしとき　　入道左大臣
あれのやふ河原の霧かゝるかなりはてゝやふく数ながるらん
千五百番歌合に冬の歌　　二条院讃岐
せきかへるなみたも袖をいとはしの春やまたくもるらん袖の霜かな
題しらず　　源信明朝臣
ほのぼのと有明の月の月影に紅葉吹きおろす山おろしの風
中務卿具平親王
もみぢ葉を何惜しみけん木の間よりもりくる月はこよひこそ見れ
宜秋門院丹後
吹きはらふ嵐の後の高嶺より木の葉くもらで月や出づらん
春日社歌合に暁月といふことを　　右衛門督通具
霜こほる袖にも影は残りけり露より馴れし有明の月
和歌所にて六首歌奉りしに冬月　　藤原家隆朝臣
ながめつゝいくたび袖にくもるらん時雨にふくる有明の月
題しらず　　源泰光
さだめなくしぐるゝ空の村雲にいくたびおなじ月を待つらん

千五百番歌合に　　源具親
今よりは木の葉がくれもなけれども時雨に残る村雲の月
題しらず
はれくもる影を都にさきだてゝしぐれとつぐる山のはの月
五十首歌奉りし時　　寂蓮法師
ゑもとく小里にすむ月のひかりは河霧をとふ秋の村雲
旅泊冬月といふことを　　良暹法師
とまりして稲葉まかせに河霧つゝ空もみえぬを眺むる月は
題しらず　　曾禰好忠
露霜の夜半に起きゐて冬の夜の月見るほどに袖はこほりぬ
前大僧正慈円
ひぬふきとをのゝ篠原しもさえてきえしもとけぬ鶴の霜
西行法師
小倉山ふもとの里に木の葉散れば梢にはるゝ月を見るかな
五十首歌奉りし　　藤原雅経
秋の色を払ひはてゝや久方の月の桂に木枯らしの風

たいしらす

式子内親王

風さむみこのはゝれゆくよな〳〵にのこるくまなき庭の月影

殷富門院大輔

我門乃かり田の面にふす鴫の床あらはなる冬の夜の月

藤原清輔朝臣

冬枯の杜乃朽葉の霜のうへにおちたる月の影のさむけさ

千五百番の歌合に

皇太后宮大夫俊成女

さえ侘てさむる枕に影みれは霜ふかき夜の有明の月

右衛門督通具

霜結ふ袖のかたしきうちとけてねぬよの月乃影そさむけき

五十首歌たてまつりし時

藤原雅経

影とめし露のやとりを思ひ出て霜にあととふ浅茅生の月

橋上霜といふことを

法印幸清

かたしきの袖をや霜にかさぬらん月に夜かるゝうちの橋姫

たいしらす

源重之

夜々の萩か枝はくれなゐにむすひ置し霜はいく夜やさゆらん

藤原道信朝臣

さ夜ふけて声さへさむきあしたつはいくへの霜か置まさるらん

五十首歌中に

太上天皇

冬の夜乃なかきを送る袖ぬれぬ暁かたのよものあらしに

百首歌奉りし時

摂政太政大臣

さゝの葉はみ山もさやにうちそよきこほれる霜を吹嵐かな

崇徳院御時百首歌奉りけるに

藤原清輔朝臣

君こすはひとりやねなんさゝの葉のみ山もそよにさやく霜夜を

たいしらす

皇太后宮大夫俊成女

霜かれはそこともみえぬ草の原たれにとはまし秋のなこりを

百首歌中に

前大僧正慈円

志もさゆる山田乃くろのむらすゝきかる人なしにのこるころかな

たいしらす

曾禰好忠

草のうへにこゝら玉ゐし白露を下葉の霜と結ふ冬かな

中納言家持

鵲のわたせる橋におく霜のしろきをみれは夜そふけにける

えの梅のこゝろをきくおりせしよみけるついてに 延喜御時

河波つくれは嵯峨のみちの葉ちれと霜の絹にそ錦かな

延喜十四年尚侍ふちはらの満子に菊宴給はせける時 中納言兼輔

菊乃花たをりてはみし初霜のおきなからこそ色まさりけれ

同し御時大井川に行幸侍りける日 坂上是則

影さへに今はと菊のうつろふは波のそこにも霜やおくらん

題しらす 和泉式部

野へみれは尾花かもとの思ひ草枯行冬になりそしにける

題しらす 西行法師

津の国のなにはの春は夢なれや芦の枯葉に風わたるなり

五十首歌よませ侍りける時 大納言経通

冬ふかく成にけらしな難波江の青葉ましらぬ芦の村立

題しらす 西行法師

さひしさにたへたる人乃又もあれな庵ならへん冬の山里

寒子侍りける時歌の人よみ侍りけり 康資王母

あはさちの庵乃冬草さけつまわひしく絶にふみゝぬ人の跡

冬の歌とてよみ侍りける 守覚法親王

昔思ふさ夜乃寝覚の床さえて涙もこほる袖のうへかな

百首歌たてまつりし時

たちぬるゝ山のしつくも音たえて槙の下葉にたるひしにけり

題しらす 皇太后宮大夫俊成

かつ氷かつはくたくる山川乃岩間にむせふ暁乃こゑ

摂政太政大臣

消かへり岩間にまよふ水のあはのしはしやとかる薄氷かな

枕にも袖にも涙つらゝゐてむすはぬ夢をとふ嵐かな

五十首歌たてまつりし時

みこやゆゑくらの岩さきより清瀧川にのこる浪

百首歌たてまつりしとき

かたしきの袖のこほりもむすほれとけてねぬよの夢そみしかき

最勝四天王院の障子に宇治川かきたる所 太上天皇

橋姫のかたしき衣さむしろに待よむなしき宇治の明ほ乃

前大僧正慈鎮

あじろ木にいさよふ浪の音ふけてひとりや寝ぬる宇治の橋姫

百首歌中に　　式子内親王

みるまゝに冬はきにけり鴨のゐる入江の汀うすこほりつゝ

摂政太政大臣家歌合に湖上冬月　　藤原家隆朝臣

志賀の浦や遠ざかりゆく浪間より氷りて出る有明の月

守覚法親王五十首歌よませ侍りけるに　　皇太后宮大夫俊成

ひとりみる池の氷にすむ月のやがて袖にもうつりぬるかな

題しらず　　山部赤人

うばたまの夜のふけゆけば楸おふる清き河原に千鳥しばなく

さほの河原にて千鳥のなきけるをよみ侍りける　　伊勢大輔

行さきはさ夜ふけぬれど千鳥鳴さほのかはらは過うかりけり

みちのくにまかりける時よみ侍りける　　能因法師

夕されば潮風こしてみちのくの野田の玉川千鳥なくなり

題しらず　　重之

白浪に羽うちかはし浜千鳥かなしき物は夜の一声

後徳大寺左大臣

夕なぎにとわたる千鳥波まよりみゆるこしまの雲にきえぬる

堀河院に百首歌奉りける時　　祐子内親王家紀伊

浦風に吹上の浜のはま千鳥浪たちくらし夜半に鳴なり

五十首歌奉りしに　　摂政太政大臣

月ぞすむ誰かはこゝにきのくにや吹上の千鳥ひとり鳴なり

千五百番歌合に　　正三位季能

さ夜千鳥声こそちかくなるみがたかたぶく月に潮やみつらん

最勝四天王院の障子になるみの浦かきたる所　　藤原秀能

かぜ吹ばよそになるみのかたおもひおもはぬ浪に鳴千鳥かな

おなじところ　　権大納言通光

浦人の日も夕ぐれになるみがたかへる袖より千鳥なくなり

文治六年女御入内屏風に　　正三位季経

風さゆるとしまが磯のむら千鳥立ゐは浪の心なりけり

五十首歌奉りしとき　　藤原雅経

はかなしやさても幾夜か行水に数かきわぶる鴛のひとりね

堀川院に百首の歌奉りけるに　　　　　　　　　　　　　　　　[illegible]

みなと川うきねの床にきこゆなり...

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　湯原王

吉野なる夏実乃河の川よどにかもぞなくなる山かげにして

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　徳円法師

岡のへにうつりし...

法性寺入道前関白太政大臣

さゞ浪や志賀の唐崎風さえて比良の高ねにあられふるなり

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　人麿

矢田乃野に浅茅色づくあらち山嶺のあは雪さむくぞあるらし

雲の約基俊にへつかはしける　　　　　　　　　上人

なほもしもの...

返し　　　　　　　　　　　　　　　　　藤原基俊

...

冬のはじめに...　　　　　　　　　　　　信中納言長方

初雪の...

冬の歌の中に初雪...　　　　　　　　　　式部

ぬれ...

百首歌の中に　　　　　　　　　　　　　式子内親王

さむしろのよはの衣手さえさえて初雪しろし岡のへの松

入道前関白太政大臣家に百首歌よみ侍りける時　　　　寂蓮法師

ふりそむるけさだに人のまたれつるみ山の里の雪の夕ぐれ

雪のあした後徳大寺左大臣の許に遣しける　　　　　皇太后宮大夫俊成

けふはもし君もやとふとながむれどまだ跡もなき庭の雪かな

返し　　　　　　　　　　　　　　　　　後徳大寺左大臣

今ぞきく心は跡もなかりけり雪かきわけて思ひやれども

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　前大納言公任

しら山に年ふる雪やつもるらむよはにかたしく袂さゆなり

和歌所にて雪といふことを　　　　　　　刑部卿範兼

明やらぬねざめの床にきこゆなり籬の竹の雪の下折れ

...晴るゝ山里といふことをよみ侍りけるに

とはれしは山さとや...白雪と...

みちのくにまかりける人に初雪のふりて侍けるを見て
上東門院に侍ける女房によみておくりける　藤原範永朝臣

山里ぞゑりやみぬらんおもふらくもとくも雪のふかさを

野亭雪をよみ侍ける　藤原国房

さびしさをいかにせよとて岡べなるならのはしだり雪のふるらん

百首歌たてまつりし時　藤原定家朝臣

駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

摂政太政大臣家に侍ける時山家雪といふことをよませ侍けるに

待人の麓の道はたえぬらん軒ばの杉に雪おもるなり

同家にて所の名をさぐりて冬歌よませ侍けるに伏見の里の雪を　藤原有家朝臣

夢かよふ道さへ絶ぬくれ竹の伏見の里の雪の下おれ

家に百首歌よませ侍けるに　入道前関白太政大臣

ふる雪にたくもの煙かきたえてさびしくもあるか塩がまの浦

題しらず　赤人

田子の浦にうち出てみれば白妙のふじのたかねに雪はふりつゝ

延喜御時歌たてまつれと仰られければ　紀貫之

雪のみやふりぬといはむ山里に我も多くの年ぞつもれる

守覚法親王五十首歌よませ侍けるに　皇太后宮大夫俊成

雪ふれば嶺のまさかきうづもれて月にみがける天のかぐ山

題しらず　小侍従

かくらすもしわすれまさる雪ふるを……

前大僧正慈円

庭の雪に我跡つけて出つるをとはれにけりと人やみるらん

左衛門督通光

ながむればわが山の端に雪しろし都の人よあはれとも見よ

曽禰好忠

冬草のかれにし人の今さらに雪ふみわけて見えんものかは

雪のあした基俊がもとへ申遣ける　俊恵法師

……のまつらん……庭の雪

百首歌の中に　太上天皇

比ころは花も紅葉も枝になししばしなきえそ松のしら雪

千五百番歌合に　右衛門督通具

草も木もふりまかへたる雪もよに春まつ梅の花の香そする

百首歌めしける時　崇徳院御歌

みかりする交野のみのにふる霰あなかままた鳥もこそたて

内大臣に侍ける時家歌合に　法性寺入道前関白太政大臣

御狩すと鳥たちの原をあさりつゝかたのゝ野へにけふもくらしつ

摂政太政大臣家百首歌合に　左近中将公衡

みかり野はかつふる雪にうつもれて鳥たちもみえすくさかくれつゝ

鷹狩のこゝろをよみ侍ける　権僧正永縁

狩くらしかたのゝましはをりしきて淀の川せの月をみるかな

埋火をよみ侍ける

中／＼にきえはきえなん埋火のいきてかひある世にもあらぬに

百首歌たてまつりしとき　式子内親王

日数ふる雪けにまさる炭竈の煙もさひし大原の里

歳暮に人のもとへつかはしける　西行法師

をのつからいはぬをしたふ人やあるとやすらふ程に年の暮ぬる

年のくれによみ侍ける　上西門院兵衛

かはりては身にそふものとしりなからくれゆく年をなにしたふらん

皇太后宮大夫俊成女

へたてゆく世ゝのおもかけかきくらし雪とふりぬる年の暮かな

大納言隆季

あたらしき年やわか身をとめくらんひまゆく駒にみちをまかせて

俊恵法師家に十首歌よみ侍けるに歳暮の心を　俊恵法師

なけきつゝことしもくれぬ露の命いけるはかりを思ひ出にして

百首歌たてまつりしとき　小侍従

思ひやれ八十ちの年の暮なれはいかはかりかは物はかなしき

題しらす　西行法師

昔思ふ庭にうき木をつみおきてみし世にもにぬ年の暮かな

摂政太政大臣

石上ふるのゝをさゝ霜をへて一よはかりにのこる年かな

前大僧正慈円

年明てうき世の夢のさむへくはくるともけふはいとはさらまし

あさことのあかゐの水に年暮て我世の程乃くまれぬる哉　権律師隆聖

百首哥奉りし時　入道左大臣

いそかれぬ年乃暮こそあはれなれ昔はよそにきゝし春かは

年の暮に身の老ぬることを歎きて読侍ける　和泉式部

かそふれは年の残りもなかりけり老ぬるはかりかなしきはなし

入道前関白百首哥読せ侍ける時歳暮の心を読侍ける　後徳大寺左大臣

石はしる初瀬の川の波枕はやくも年のくれにけるかな

土御門内大臣家にて海辺歳暮といふ心を読侍ける　有家朝臣

行年をおしまの海士のぬれ衣かさねて袖に波やかくらん

寂蓮法師

老の波こえける身こそあはれなれことしも今は末の松山

千五百番哥合に　皇太后宮大夫俊成女

へたてゆく世々のおもかけかきくらし雪とふりぬる年のくれかな

新古今和歌集巻第七

賀哥

みつき物ゆるされて国とめるを御覧して　仁徳天皇御哥

高き屋にのほりて見れは煙たつ民のかまとはにきはひにけり

題しらす　よみ人しらす

初春の初子のけふの玉はゝき手にとるからにゆらく玉のを

子日をよめる　藤原清正

子のひしてしめつる野への姫小松ひかてや千代のかけをまたまし

題しらす　元真

君か世の年の数をは白妙の浜の真砂と誰かしきけん

亭子院の六十御賀屏風に若菜つめる所をよみ侍ける

若菜おふる野へといふ野へを君か為万代しめてつまむとそ思ふ

延長御時屏風哥

ゆきてみぬ人もしのへと春の野のかたみにつめる若菜なりけり

[illegible]右大臣

君か世に[illegible]まて見そらん

七条の后乃宮五十賀屏風に　伊勢

住の江乃濱のまさこをふむたつは久しきあとをとゝむるなりけり

延喜御時屏風歌　貫之

年ことに生ひそふ竹のよゝをへてかはらぬ色を誰とかはみん

題しらす　躬恒

千とせふるおのへの松は秋風のこゑこそかはれ色はかはらす

延喜御時屏風に　藤原興風

山川乃きくのした水いかなれはなかれて人乃老をせくらん

貫之

いのりつゝ猶なか月の菊の花いつれの秋かうゑてみさらん

文治六年女御入内屏風に　皇太后宮大夫俊成

山人の折袖にほふ菊の露うちはらふにも千世はへぬへし

貞信公家屏風に　元輔

神[illegible]萬代[illegible]

題しらす　伊勢

山かせはふけとふかねと白浪のよする岩ねは久しかりけり

後一条院うまれさせ給へりける九月月くまなかりける夜大二条関白中将に侍りけるに若き人々さそひて池の舟にのりて中島の松かけさしまはすほとおもしろく見えけれは　紫式部

くもりなく千年にすめる水のおもにやとれる月の影ものとけし

永承四年内裏歌合に池水といふ心を　伊勢大輔

池水の世々にひさしくすみぬれは底の玉もゝ光見えけり

堀河院の大嘗会御禊日ころ雨ふりてその日はれたりけれは紀伊典侍に申しける　六条右大臣

君か代乃千年の数もかくれなくくもらぬ空の光にそみる

天暦[illegible]年[illegible]の家人々に祝の心をよみ侍りける　藤原清正

住の江におひそふ松の枝ことに君か千年の数そこもれる

寛治八年関白前太政大臣高陽院歌合に祝の心を　康資王母

万代を松の尾山のかけしけみ君をそいのるときはかきはに

後冷泉院御時殿上のをのこともに卯杖の松を人の子によみ侍ける　大弐三位

相生のをしほの山乃小松原いまより千代のかけをまつらん

永保四年内裏子日に　大納言経信

子日するみかきのうちの小松原千代をはほかの物とやはみる

権中納言通俊

子日する野へ乃小松をうつし植て年のをなかく君そ引へき

承暦二年内裏歌合に祝の心をよみ侍けるに　前中納言匡房

君か代は久しかるへしわたらひや五十鈴乃川のなかれ絶せて

題しらす　よみ人しらす

ときはなる松にかゝれる苔なれは年のをなかきしるへとそ思ふ

二条院御時花有喜色といふ心を人々つかうまつりけるに　刑部卿範兼

君か代にあへるはたれもうれしきを花は色にもいてにけるかな

同し御時南殿の花の盛に歌よませ侍けるに　参河内侍

身にかへて花もおしまし君か代にみるへき春のかきりなけれは

百首歌たてまつりし時　式子内親王

あめのしためくむ草木のめもはるにかきりもしらぬ御代の末々

京極殿にて初て人々歌つかうまつりしに松有春色といふことをよみ侍し　後京極摂政

おしなへてこのめも春のあさみとり松にそ千世の色はこもれる

百首歌たてまつりし時

敷嶋ややまとしまねも神代より君かためとやかためおきけん

千五百番歌合に

ぬれてほす玉くしの葉の露霜にあまてる光いく世へぬらん

祝の心をよみ侍ける　皇太后宮大夫俊成

君か世は千世ともさゝし天のとや出る月日のかきりなけれは

千五百番歌合に　藤原定家朝臣

我か道をまもらは君をまもるらんよはひはゆつれすみよしの松

八月十五夜和歌所歌合に月多秋友といふ心を詠侍し　寂蓮法師

高砂の松も昔になりぬへしなほ行末は秋の夜の月

和歌所の開闔になりて初てまいりし日奏し侍し　源家長

もしほ草かくともつきし君か代の数によみおくわかの浦波

建久七年入道前関白太政大臣宇治にて人々に歌よませ侍けるに
寄橋祝　前大納言隆房

うれしさやかたしく袖につゝむらんけふまちえたる宇治の橋姫

嘉応元年入道前関白太政大臣宇治にて河水久澄といふことを人々よませ侍けるに
藤原清輔朝臣

年へたる宇治の橋守こととはんいくよになりぬ水のみなかみ

日吉禰宜成仲七十賀し侍けるにつかはしける
後徳大寺左大臣

七十にみつの浜松おいぬれと千代の残りは猶そはるけき

百首うたよみ侍けるに

やほかゆく浜のまさこを君か代の数にとらなんおきつしま守

家に歌合し侍けるに春の祝の心を読侍ける
摂政太政大臣

春日山都の南しかそおもふ北の藤なみ春にあへとは

天暦御時大嘗会主基備中国中山
よみ人しらず

ときはなる吉備の中山おしなへて千年を松の深き色かな

長和五年大嘗会悠紀方風俗歌近江国朝日郷
祭主輔親

あかねさす朝日の里のひかけ草とよのあかりのかさしなるへし

永承元年大嘗会悠紀方屏風近江国守山をよめる
式部大輔資業

すへらきをときはかきはにもる山の山人ならし山かつらせり

寛治二年大嘗会屏風にたかの尾山をよめる
前中納言匡房

とやかへるたかの尾山の玉椿霜をはふとも色はかはらし

久寿二年大嘗会悠紀方屏風近江国鏡山をよめる
宮内卿永範

くもりなき鏡の山の月をみてあきらけき世を空にしるかな

平治元年大嘗会主基方辰日参入音声生野をよめる
刑部卿範兼

大江山こえていく野の末とほみ道ある世にもあひにけるかな

仁安元年大嘗会悠紀方稲舂歌
皇太后宮大夫俊成

あふみのやさかたの稲をかけつみて道ある御代のはしめにそつく

仁安元年大嘗会主基方稲舂歌丹波国長田村をよめる
権中納言兼光

神代よりけふのためとや八束穂に長田の稲のしなひそめけん

元暦元年大嘗会悠紀方屏風近江国青羽山
式部大輔光範

立よれはすゝしかりけり水鳥の青羽の山の松の夕風

建久九年大嘗会主基屏風に松井
権中納言資実

ときはなる松井の水をむすふ手のしつくことにそ千世はみえける

新古今和歌集巻第八

哀傷歌

題しらず　　僧正遍昭

末の露もとの雫や世の中のおくれさきだつためしなるらん

小野小町

あはれなりわが身のはてや浅みどりつひには野べの霞と思へば

醍醐のみかどかくれ給ひてのち弥生のつごもりに三条右大臣につかはしける　　中納言兼輔

桜ちる春の末にはなりにけりあままもしらぬながめせしまに

正暦二年諒闇の春桜の枝につけて道信朝臣につかはしける　　実方朝臣

墨染のころもうき世の花ざかりをり忘れてもをりてけるかな

返し　　道信朝臣

あかざりし花をや春も恋ひつらんありし昔を思ひ出でつつ

弥生のころ人におくれてなげきける人のもとへつかはしける　　成尋法師

花桜まださかりにて散りにけんなげきのほどを思ひこそやれ

人の桜を植ゑおきてその年の四月に身まかりにける又の年初めて花咲きたるを見て　　大江嘉言

花見んと植ゑけん人もなき宿の桜は去年の春ぞ咲かまし

年ごろすみ侍りける女の身まかりにける四十九日はてて猶山里にこもりゐてよみ侍りける　　左京大夫顕輔

誰もみな花の都に散りはててひとりしぐるる秋の山里

公時卿母身まかりてなげき侍りける春法金剛院の花を見て思ひ出づる事多くてよみ侍りける　　徳大寺左大臣

花見てはいとど家路ぞいそがれぬ待つらんと思ふ人しなければ

定家朝臣母の思ひに侍りける春の暮につかはしける　　摂政太政大臣

春霞かすみし空のなごりさへけふを限りのわかれなりけり

おほい…身まかりにけるを桜ちるまでこもりゐてよみ侍りける　　右衛門督通方

この春は桜をさへもみるべきに霞にまよふ鳥部野の…

六條摂政かくれ侍りてのち植ゑおきて侍りける牡丹の咲きて侍りけるを折りて女房のもとよりつかはして侍りければ　　太宰大弐重家

かたみとてみれば歎きのふかみ草何なかなかの匂ひなるらん

おさなき子のうせにけるが植ゑおきたる菖蒲を見てよみ侍りける　　高陽院木綿四手

あやめ草たれしのべとか植ゑおきて蓬がもとの露と消えけん

駒くらへ侍りける五月五日人のもとへやりける　上西門院兵衛

今日くれとあやめもしらぬ袂かな昔をこふるねのみかゝりて

近衛院かくれさせ給ひての又の年五月五日皇嘉門院へたてまつられける　九條院

あやめ草ひきたかへたる袂にはむかしをこふる音そかゝりける

返し　皇嘉門院

さもこそはおなしたもとの色ならめかはらぬねをもかけてけるかな

まへの中宮(?)かくれ給ひける母のおもひ(?)に侍りける比(?)……小野宮(?)……

よにふるれとおなしかなしさ君をのみおもふかひなきなけきをそする

返し

ひとよをはわかぬ身にしもあはれなる(?)たれかはこれを(?)……

小式部内侍露おきたる萩おりたる唐衣をきて侍りけるを身まかりて後上東門院よりたつねさせ給ひけるに奉るとて　和泉式部

をくと見し露もありけりはかなくて消えにし人をなににたとへん

返し　上東門院

思ひきやはかなくをきし袖のうへの露をかたみにかけん物とは

白河院御時中宮おはしまさでのちその御方は草のみ茂りて侍りけるに七月七日童べの露とりけるを見て　周防内侍

あさちはらはかなくをきし草のうへの露をかたみとおもひかけきや

一品資子内親王にあひて昔の事とも申し出してよみ侍りける　女御徽子女王

袖にさへあきのゆふへはしられけりきえしあさちかつゆをかけつゝ

例ならぬことおもくならせ給ひて御くしおろし給ひける日上東門院中宮と申しける時つかはしける　一条院御製

あきかせの露のやとりに君をおきて塵をいてぬることそかなしき

あきのころおさなき子にをくれたる人に　大貳三位

別れけんなこりの袖もかはかぬにをきやそふらん秋の夕露

返し　よみ人しらず

をきそふる露とゝもにはきえもせて涙にのみもうきしつむかな

廉義公の母なくなりて後女郎花を見て　清慎公

女郎花みるに心はなくさまていとゝむかしの秋そこひしき

弾正尹為尊親王かくれて後なけき侍りける比　和泉式部

ねさめする身をふきとをす風の音をむかしは袖のよそにきゝけん

従一位源師子かくれ侍りて宇治より新少将かもとにつかはしける　知足院入道前関白太政大臣

袖ぬるゝ萩のうはゝの露はかりむかしわすれぬ虫のねそする

法輪寺にまうで侍るとて嵯峨野に大納言忠家が墓の侍りけるほとりにまかりてよみ侍りける　権中納言俊忠

さらでだに露けきさがの野べにきて昔の跡にしほれぬるかな

公時卿母身まかりて歎き侍りける比大納言実国のもとにつかはしける　後徳大寺左大臣

かなしさは秋のさがのゝきりぎりす猶ふるさとにねをやなくらん

母のかくれ侍りけるをさがのほとりにおさめ侍りける夜よみける　皇太后宮大夫俊成

今はさはうき世のさがの野べをこそ露きえはてし跡としのばめ

母身まかりにける秋野分しける日もとすみ侍りける所にまかりて　藤原定家朝臣

玉ゆらの露も涙もとゞまらずなき人こふるやどの秋風

父秀宗身まかりての秋寄風懐旧といふことをよみ侍りける　藤原秀能

露をだに今はかたみの藤衣あだにも袖をふくあらしかな

久我内大臣春の比うせて侍りける年の秋土御門内大臣中将に侍りける時つかはしける　殷富門院大輔

秋ふかき寝覚にいかゞ思ひ出るはかなくみえし春の夜の夢

返し　土御門内大臣

みし夢をわするゝ時はなけれども秋の寝覚はげにぞかなしき

あるひとおやにおくれける母身まかりて後の秋よみてつかはしける　大納言実家

なれし秋のふけし夜床はそれながら心の底の夢ぞかなしき

みちのくにへまかりける野中に目にたつさまなる塚の侍りけるをとはせ侍りければこれなん中将の塚と申すとこたへければ中将とはいづれの人ぞと問ひ侍りければ実方朝臣の事となん申しけるに冬の事にて霜枯の薄ほのぼの見えわたりて折節物悲しう覚え侍りければ　西行法師

くちもせぬその名ばかりをとゞめおきて枯野の薄かたみにぞみる

[illegible]

あはれをもとふる後やひとわり友なき山のみちしばのつゆ

母の思ひに侍りける秋法輪寺にこもりて嵐のいたく吹きければ　皇太后宮大夫俊成

うき世には今はあらしの山風にこれやなれ行はじめなるらん

定家朝臣母身まかりて後秋比墓所ちかき堂にとまりてよみ侍りける　俊成

まれにくる夜はもかなしき松風をたえずや苔のしたにきくらん

堀川院かくれさせ給て後神無月風の音あはれに聞えければ　久我内大臣

物思へば色なき風もなかりけり身にしむ秋の心ならひに

藤原定通身まかりて後月あかき夜人の夢に殿上になんまゐるとてよみ侍りける歌

ふるさとを別れし秋をかぞふれば八年になりぬ有明の月

源為善朝臣身まかりにける又の年月をみて　能因法師

命あればことしの秋も月はみつわかれし人にあふよなきかな

さ中もろこしへわたらんとて十月の比白川の家にまかりけるに紅葉のちりけるをみて

大納言公経

あはれをもみよやと山里の紅葉をも人もをしまぬ世に

十月のころ水無瀬に仰せられて大僧正慈円のもとへつかはされける

今上天皇

おもひ出る折たく柴の夕けふりむせふもうれしわすれかたみに

返し

大僧正慈円

おもひ出る折たく柴ときくからにたくひしられぬ夕けふりかな

西行法師とゝもに

今上天皇

あはれ人の秋のみやまにしくれ行月の夜にもうらみねと

神無月しくるゝころもいかなれや秋のことふ人

まことなれや人の心のつらさをもみれはこそ秋のよを

題しらす

式子内親王

ありてをしたふへきわかれにもあらぬいにしへを

いかにせむ玉の緒よ絶なはたえねなからへは

わすれなん衣のそてにやとる月かけ

水底にうつれる月のかけはかり

おもひのこすこともなき身のなけき

公忠朝臣

源信明朝臣

おもふこといはてそたゝにやみぬへき

うしとてもいとふへき世のほかにまた

上東門院

源兼澄

たのめこしことの葉いまはかへしてん

後一条院中宮かくれ給ひてのち人のゆめに見えし

ふるさとにゆく人もかなつけやらんしらぬ山路にひとりまよふと

小野宮太政大臣かくれ侍りてのち[illegible]大納言[illegible]家

[illegible]

小式部内侍身まかりて後上東門院より年ころ給はりける衣をなきあとにもつかはしたりけるに小式部内侍とかきつけられたるをみて

和泉式部

もろともに苔の下にはくちすしてうつもれぬ名をみるそかなしき

世のはかなき事をなけく比みちのくに名ある所々かきたる絵を見て

紫式部

みし人の烟となりし夕より名そむつましきしほかまの浦

後朱雀院かくれ給ひて後源三位のもとへつかはしける

弁乳母

あはれ君いかなる野辺の烟にてむなしき空の雲と成けむ

返し

源三位

おもへ君もえし烟にまかひなてたちおくれたる春の霞を

大江嘉言つしまになりて下りけるに[illegible]

能因法師

あはれ人けふの命をしらませは難波のあしにちきらさらまし

[illegible]

大江匡衡朝臣

[illegible]

[illegible]

後徳大寺左大臣

[illegible]

権中納言通家母かくれ侍りける秋[illegible]

按察使公通

限なき思ひの程の夢のうちはおとろかさしと歎こしかな

返し

後徳大寺左大臣

母の思ひに侍りける比[illegible]

みし夢にやかてまきれぬ我身こそとはるゝけふもまつかなしけれ

[illegible]

世中の[illegible]

西行法師

いつなけきいつおもふへきことなれは後の世しらて人のすくらん

前大僧正慈円

皆人のしりかほにしてしらぬかなかならすしぬるならひありとは

きのふみし人はいかにとおとろけとなほなかき夜の夢にそありける

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

和泉式部

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中納言[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

法橋[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中納言[illegible]

[illegible]

中納言[illegible]

かたひ寄り女山さかをまてたるかくなかまきれたつ里くくとこと
つまぬくく侍けるかあらさ成よ高へさうかくあらすようつよ
名なる紀ぬかく人くくいそり侍られた東大夏殿姫

いけのさしかを山をつまなれてく都をさひこしふかゝ舞
素白出をおさめなけをみ命　人麿

久くれありかしあるく君ゆへ月日也志らて思ひこるらん
くぬいしらに　小野小町

あるかいなくな紀ハ救ふ世中に紀いつ里れ日まそ歌うん
在原業平朝臣

白玉か何うせ人のとひしと紀露とあらへ濃なまし物を
文衣の服にてさしいまつけるをみかひて　延喜御序　高

年ぬ里いかくもたゝせわ雲深のこゝ思ふてふそれかあらぬか
志ひまて人の家に屋ふ里りけるをその家にしまりしまのあほ
く侍けまいあるしらしつりけり　中納言兼輔

なれ人と思ひ〇そいゝ思ふまおほける宿にせうをそすう
やまひにしらしてくしくこりしおそ侍けるかあまりくらしう
ちりしく他りさいわて志太弁　公忠義人に侍けるにあひて　まさ
おさそそうかさしかくさしかくてまけるまくまやまひおりく

なかてくさかまほけ里ハ公忠朝臣につりけり　藤原季縄

娘しくそ侍ふおりんと歌けり世ふを泊せいたまし物を
母の女御くれ侍く七月七日侍けり　中務卿具平親王

雲深の神ゝ兒母もうさなくに志おわもあへさを家をしらるく
うせにけり人のふとのりのくらるをみいてくそのゆりけるう人の
りしよつりけり　紫式部

蓋ぬまの男とハ志りそ人の世れ都を志りそ人のなるなる

新古今和歌集卷第九

離別部

みちのくにくらわ侍けるへ　紫式部をくるまて涼侍けり
紀貫之

ひほとろ紀れ山風さむくはくみそくふきなんとそ志
くぬいしらに　伊勢

志なむ世にもあしちれつる山いけにくへにあんとをとらん
おさうす契けり人の別侍けるに　紫式部

小へ引為のほそさにとつくよをこれうかれかさ結すして

ゐ中へまかりける人に旅衣つかはすとて　大中臣能宣朝臣

秋霧のたつ旅衣おきてみよ露はかりなる形見なりとも

みちのくへまかりける人に　貫之

みくぬまもあかぬ心を玉ほこの道の神たちへの別ら鉾

年頃の宿をはなれて遠き所へまかりけるに餞し侍るとて　中納言兼輔

相坂の雲に我宿かりせいろくひとつのきはくゆまし

寂昭上人入唐し侍りけるに装束おくりけるにたちけるをしらて

きならせと思ひし物を旅衣たつ日をしらすなりにけるかな

返し　寂昭法師

これやさは雲のはたてにおると聞たつ事しらぬあまの羽衣

みちのくのかみにてまかりける時範永朝臣の許につかはしける　源頼綱朝臣

白川みまれ人のまれは波そ白はまを

行末にあふくま川のなかりせはいかにかせましけふの別れを

返し　藤原範永朝臣

君にまたあふくま川を待へきにのこりすくなき我そかなしき

大宰帥隆家くたりけるに扇たまふとて　枇杷皇太后宮

涼しさはいきの松原まさるともそふる扇の風なわすれそ

亭子院おりゐのみかとときこえける時浄蔵法師めしくせられてまかりけるを見おくりて山の方をおもひやりてよみ侍りける　一條右大臣　恒佐

神無月よもの紅葉ゆゑかまさるらん今日別れぬる道をしるらん

よみ人しらす　大江千里

おくれゐてもとまれと思へともとられぬ時をしらぬかな

成尋法師入唐し侍りけるに母のよみ侍りける

唐もあめのしたにそありと聞てる日のもとをわすれさらなん

修行に出立ける人の許につかはしける　道命法師

別路はこれや限りの旅ならんさらにいくへき心地こそせね

むさしのかみにて七月七日つくしへ下りけるに八月のわたりになりてつかはしける　高階成順

天河空にやみし我そ渡さんまた見ぬ人の

皇后宮歌合にみちのくへ下りける人に餞し侍るとて　中納言隆家

別路はいつもなけきのたえせぬにいとゝかなしき秋の夕暮

藤原家房朝臣

西行

そのかみまかりしまてにおくれにし人のなきかなしさを
教へおきし秋をかきりに立かへるへき浪の行方そくるしかりける

六月はかりに御さいゐんに入させ給ひける時中納言たゝ房
みちのくにへまかりける時に大弐三位二條院讃岐つかはしける
ふきかへす風とみえて錦かな二條院讃岐

みちのくのしのふのもちすりみたれそめしは
あつまちや野ちのしのはらわけ入てあとたにみえす秋風そふく

大江嘉言

しら雲の八重にかさなるをちにても思はん人に心へたつな

これのみそみえ時わかぬ紫のゆかりの色を思ひやるかな
ほとゝきすなくやさ月のなかきよもひとりしぬれはあかしかねつゝ

よみ人しらす

行くものゝとまるに別れかなしきをしりてしなくはものもおもはし

法師

かへるさをまちこそ別れもなくさめし今やうれしきおもひそひなん

法師

こえかへん行き別れちはいつとしもしらぬにいかてたのめおかまし

ある人法眼にてかくもすよみたつかひたる時　藤原隆信朝臣

頼もしな君をおもひ人にあひてなは松浦のおきにたつ白浪

少将法師つかはしける

思ひやる心ははるかにゆくをいかてさはなれてうち忘るらん　俊恵法師

みちのくへまかりける人に餞しける時　登蓮法師

君はなほ月とともにそ縁ありて雲のうへにもすみわたるらむ

三條院御時に出させ給ひけるに

よそにのみ聞きわたるらんあはぬまはかくてもいかにありとしもなし

ゆくもとまるもかくあはれを思へ知るてふ今日の山路をこゆるかな

東にまかりける阿闍梨によみてつかはしける　円位法師

待つらん君の袖にかかる涙にもかへさん心ちこそすれ

よみ人しらす

かへるへき別れの道に涙こそ先立ちぬれとしらせてしかな

皇太后宮大夫俊成

別れ路はこれやかきりの山こえて今はかへらぬみちにそありける

能因法師

わかるれはやとる袖さへぬれぬれともかくみにしはし秋の月影

別れ侍りける人のもとへつかはしける　雅昭朝臣

かへるさは袖よりねてもしられけりわかるゝ旅の日数の露

つくしへまかりける女に月かきたる扇をつかはすとて　よみ人しらず

都をは心の空に出しかと月はひとしくかよふとをしれ

遠き所へまかりける人によみてつかはしける　家

別路は雲井のよそになりぬともこゝろはかよふ風のたよりに

人のもとへまかりける人に衣つかはすとて　藤原家隆朝臣

たちかへる波をはるかにへたつともこゝろのうちは君そしるらん

新古今和歌集巻第十

羇旅歌

和銅三年三月藤原の宮よりならの宮にうつり給ひける時　元明天皇御歌

とふとりのあすかのさとをおきていなは君かあたりは見えすかもあらん

天平十二年十月伊勢国にみゆきし給ひける時　聖武天皇御歌

いもにこひわかの松原見わたせはしほひのかたにたつなきわたる

もろこしにて読侍りける　山上憶良

いさこともはやひのもとへおほとものみつのはま松まちこひぬらん

題しらす　人麿

あまさかるひなのなかちを漕くれはあかしのとよりやまとしまみゆ

燈のあかしおほとにいらん日やこきわかれなん家のあたり見す

帥の任はててつくしよりのほり侍りける時　大納言旅人

こゝにありてつくしやいつこ白雲のたなひく山のかたにしあるらし

題しらす　よみ人しらす

朝霧にぬれにし衣ほさすしてひとりや君か山路こゆらん

あつまのかたへまかりけるにあさまのたけに煙のたつを見てよめる　在原業平朝臣

しなのなるあさまのたけにたつ煙をちこち人の見やはとかめぬ

するかの国うつの山にあへる人につけて京につかはしける

するかなるうつの山へのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり

たひのこゝろをよみ侍ける　大納言経信

たひねして暁かたの鹿のねにいなはおしなみ秋風そふく

恵慶法師

わきもこか旅ねの衣うすきほとよきてふかなむ夜半の山風

後冷泉院御時上のをのことも旅の歌よみ侍けるに　左近中将隆綱

あれにしと[illegible]しかの山里に旅ねの[illegible]

[illegible]人のもとへ[illegible]つかはしける　権中納言国信

[illegible]旅ねの[illegible]

堀河院百首に

山路にてそほちにけりな白露のあかつきおきの木々のしつくに

大納言師頼

草枕旅ねの人は心せよありあけの月もかたふきにけり

旅宿といへる心をよめる　源師賢朝臣

[illegible]旅ねするあしのまろやによする白浪

[illegible]とて読侍ける　大納言経信

旅ねさへ[illegible]

題しらず

み山路にけさや出つる旅人の笠しろたへに雪つもりつゝ

旅宿雪といへる心を読侍ける　修理大夫顕季

松か根に尾花かりしき夜もすから片しく袖に雪はふりつゝ

みちのくにのかみにてくたり侍ける八月十五夜に京を思ひ出て大弐の三位のもとにつかはしける　橘為仲朝臣

見し人もとふの浦風おとせぬにつれなくすめる秋の夜の月

[illegible]といふ所にて霧中見月といふ心を　大江嘉言

草枕[illegible]秋の夜の月霧にすむらん

守覚法親王家に五十首歌よませ侍ける時旅の歌　皇太后宮大夫俊成

夏かりのあしのかりねもあはれなり玉江の月のあけかたの空

たちかへりまたもきてみん松島やをしまのとまや浪にあらすな

藤原定家朝臣

こととへよおもひおきつのはま千鳥なく〳〵出しあとの月影

藤原家隆朝臣

野辺の露浦わの浪をかこちても行へもしらぬ袖の月影

旅のうたとてよみける
摂政太政大臣
もろともに出し空こそわすられね都の山乃有明の月

題しらす
西行法師
都にて月をあはれとおもひしは数よりほかのすさひなりけり

月みはと契りて出し故郷乃人もや今宵袖ぬらすらむ

五十首歌たてまつりしとき
家隆朝臣
あけはまた越へき山の峯なれや空行月のすゑの白雲

藤原雅経
ふるさとの今日の面影さそひこと月にそちきるさよの中山

八月十五夜和歌所にて月前旅といふことを
摂政太政大臣
忘れしと契りて出し面影はみゆらむものを古郷の月

旅のうたとてよみ侍りける
前大僧正慈円
東路の夜半のなかめをかたらなむ都の山にかゝる月かけ

海辺秋月といふ事を
越前
いく夜かは月をあはれとなかめきて波にをりしく伊勢の濱荻

百首歌たてまつりし
宜秋門院丹後
しらさりし八十瀬の波をわけ過きてかたしくものは伊勢の濱荻

題しらす
前中納言定房
風さむみ伊勢の濱荻分ゆけは衣かりかね波に鳴なり

権中納言定頼
磯なれて心もとけぬこも枕あらくなかけそ水の白波

百首歌奉りし
式子内親王
行すゑは今いくよとかいはしろの岡のかやねに枕むすはん

松かねのをしまか磯のさよ枕いたくなぬれそあまの袖かは

千五百番歌合に
皇太后宮大夫俊成女
かくてしもわかせいつ秋をわすれん山路の苔乃露乃[illegible]

旅歌とてよみ侍りける
権僧正永縁
白雲のかゝる旅寝もならはぬにふかき山路に日はくれにけり

菅原の里といふ所を
大納言経信
夕日さすあさちか原の旅人はあはれいつくに宿をからまし

摂政太政大臣家歌合に羇中晩嵐といふことをよみ侍りける　藤原定家朝臣
いつくにか今夜は宿をかり衣日も夕くれのみねの嵐に
たひのうたとてよみ侍りける
旅人の袖ふきかへす秋風に夕日さひしき山のかけはし
藤原家隆朝臣
故郷にきゝし嵐の声もにすわすれぬ人をさやの中山
藤原雅経
白雲のいくへの峯をこえぬらんなれぬ嵐に袖をまかせて
源家長
きのふたに志からの峯はこえにしをいつまてなれし山の月をみるらん
和歌所歌合に羇中暮といふことを　皇太后宮大夫俊成女
あはれとも秋を夕となかめつゝ色のことゝはとのへのうら
雅経朝臣
いつらさはちるやわかれし夕絹の袖にあきかせ吹そめの山
宜秋門院丹後
袖とめわすれ川霜とむすふなれ行ぬらん風もこそあれ

藤原秀能
草枕夕をしらぬ人といふもなをこのほとはまつよりもあれ
旅のこゝろを　有家朝臣
ふしわひぬしのゝをさゝのかり枕はかなの露や一夜はかりに
和歌所にて歌合に旅宿嵐といふことを　藤原業清
岩かねの床に嵐をかたしきて独やねなんさよの中山
たひのうたとて
誰となき宿の夕を契にてかはるあるしをいく夜とふらん
羇中夕といふことを　鴨長明
枕とていつれの草にちきるらん行をかきりの野への夕暮
五十首歌奉りける時　殷富門院大輔
たのめこし草の枕に露ふかみたゝひとりねの夜はのかり庵
長月の比初瀬に詣ける道にてよみ侍りける　禅性法師
初瀬山夕こえくれて宿とへはみわのひはらに秋風そふく
旅のうたとて　藤原秀能
さゝねよふ秋の嵐にかりねしてさらぬにたにも峯の山の嵐

摂政太政大臣家歌合に秋旅といふことを　藤原定家朝臣

忘れなんまつとなつけそ中々にいなはの山の峰の秋かせ

百首歌奉りし時旅歌　藤原家隆朝臣

契らねと一夜はすきぬ清見かた波にわかるゝあかつきの雲

千五百番歌合に

古郷にたのめし人も末の松まつらん袖に波やこすらん

歌合し侍りける時旅の心を　入道前関白太政大臣

日をへつゝ都しのふの浦さひて波よりほかのをとつれもなし

堀河院御時百首歌奉りける時旅歌　藤原顕仲朝臣

さすらふる我身にしあれはきさかたやあまのとまやにあまた旅ねぬ

入道前関白家百首歌よみ侍りけるに旅の心を　皇太后宮大夫俊成

難波人あしひたくやにやとかりてすゝろに袖のしほたるゝかな

題しらす　権僧正雅縁

みし人もとまらぬ紀志連けりおもはしけるみねの椎柴

参議雅経

ふるさとゝかねれ旅もかさねつゝききけるもさためぬの宿

述懐百首歌よみ侍りける鹿の歌　皇太后宮大夫俊成

世中よ道こそなけれ思ひ入山の奥にも鹿そなくなる

千五百番歌合に　宜秋門院丹後

おのつからいはぬをしたふ人やあるとくらへし

天王寺へまいりけるに俄に雨のふりけれは江口に宿をかりけるにかし侍らさりけれは　西行法師

世中をいとふまてこそかたからめかりのやとりをおしむ君かな

返し　遊女妙

世をいとふ人としきけはかりの宿に心とむなとおもふはかりそ

和歌所にてをのことも旅の歌つかうまつりしに　藤原定家朝臣

袖にふけさそな旅ねの夢もみし思ふかたよりかよふ浦風

家隆朝臣

旅ねするゆめちはゆるせうつの山関とはきかすもる人もなし

詩を歌にあはせ侍りしに山路秋行といふことを　藤原定家朝臣

都にも今や衣をうつの山夕霜はらふつたの下みち

鴨長明

袖にしも月かゝれとは契りおかす涙はしるやうつの山こえ

くまぐさ山杖引人乃紬をみよまゝれ構を河毎さわきわ
百ゝ字なし 時 猿舞
さとわりまとの色に入ぬ色は慈しうへなく恋もおし
こゝはまゝそゝくさふおすゝ川のおとわに常にて紛ける東漢紛ける
あゝへゆらんとはあれ川ほとゝねされに閑せたゝふる
東の方にさゝわけるに漢紛ける 素戸人法師 和川法師
年かけくゝ古思へしとおひきや家あるもきりさよれ中山
猿舞とく
おひをくゝの心まゝさくれく霧ゐる紬れかゝかゝるれ
絲野へさいわ紛しに猿の心を 太上天皇
みうまに山風わくくおくうめわ鶴も今は乗さむぬら
世

新古今集 下

新古今和歌集巻第十一

恋歌一

題しらず　よみ人しらず

よそにのみみてややみなんかづらきやたかまの山の峯の白雲

音にのみありときゝこしみよしのゝたきはけふこそ袖におちけれ

人麿

足引の山田もる庵におくかびの下こがれつゝ我こふらくは

石上ふるのわさ田のほにはいでず心のうちに恋やわたらん

女につかはしける　在原業平朝臣

春日野のわかむらさきのすり衣しのぶのみだれかぎりしられず

中将更衣につかはしける　延喜御歌

紫の色にこゝろはあらねどもふかくぞ人をおもひ染つる

みかれ原わけさそなかるゝ泉河いかけみさとそ恋しかるらん
（あつしらす）（中納言兼輔）
うのはしや姫をやよねふるけきれはしとはみてわかぬ君ゆ
（平定文家哥合より）（坂上是則）
年をあそ思ふ山の思ふしにそ見もたまかのかせいふれけり
（人のみこはかりて侍けるをのかまへて女まつりけり　友原高光）
年月を我力かうへくるあまとしふ山のゆかすもあれ
（九条右大臣女にしめてはかりしけり　西文おほ父臣）
（返し）
袖たりし衣といはれは人志れぬとは袖を我のこやせん
（天暦御時哥合に）（大納言後賢母）
人はこゝに思らせてしかれくまぬのみこもわにのこ恋や流らん
（けしめて女にしつりしけり）（太宰太郎高遠）
みこもりの浦の岩かれつゝめたいかれかひさにかゝるゝ袂そ
（いかれかれにしかわしかんなり）（謙徳公）
庵衣袖にし人めいつゝめとも己はなく袖を涙なれしまし

天は見さよの河かわにみかし人の袖面かけの志ゐて恋しき
（たゝ侍れ物をんゝ郎　菊姫をけりしつゝ袖みこつりしけり　お太納言公任）
わらはしの年に経てみるよわは我しうまゝめおふさうの実
（つまなく侍けり女に志ゐ浦のつこもわにつりしけり　謙徳公）
我屋ゆゑはうことも何かをし姫へにいはてこそみめ弱かかやと
（浦河宮日文なとつりしてさゝはいつくうゆゑ四位かれは　本院侍従）
（返し）
まうしひ見のきふわと成ぬれは雲井かうらも袖弱てん
（忠義公）
（年のしらす）（男之）
志ゐしなれ煙を雲にまうへはく世代なれて姫の山にしまし
（清原深養父）
煙なれ思ひなられと人志れと儲ていは姫の袖をのこれく
（女にしつりしけり）（藤原惟成）
風姫けいふ玉の屋さしの夕煙山の見にはしまけるかれ
（文つりしけ女に同し司のうこ如けり人かうふとそてつりしけり　友原兼孝）
白雲れ花みしもなとうふ花おなしみうさの山乃ふりくと

題しらず

けふも又かくやいふきのさしも草さらは我のみもえやわたらん　和泉式部

つくは山は山しけ山しけゝれと思ひいるにはさはらさりけり　源重之

文かよはす人あまたありける女のもとにつかはしける　大中臣能宣朝臣

われならぬ人に心をつくは山したにかよはん道たにやなき

しのひて女につかはしける　大江匡衡朝臣

人しれす思ふ心はあしひきの山した水のわきやかへらん

女に遣しける [illegible]　清原元輔

[illegible]霞のうちの桜花風はふくともちらさらなん

年老いて [illegible]　大中臣能宣朝臣

ゆく[illegible]咲ちる花をおもひつゝ[illegible]

題しらず　躬恒

おく山の[illegible]

[illegible]　具平親王

[illegible]

四月あまりのころ [illegible] 女につかはしける　謙徳公

[illegible]氷とくらし

[illegible]

題しらず

[illegible]

[illegible]

題しらず　藤原興風

[illegible]

中納言家持

[illegible]

[illegible] 女の許につかはしける　藤原忠行

[illegible]

和言の事言合より久思慈といふことを　拾遺太政大臣

石上ゆる此神秋ふわぬれと色にはあれ露も時雨も

小野宮文言合より思慈のこゝ絵を　太上天皇

我しひは桂の下紫よりりる時雨ぬるゝも神の色に出めや

百ゝ言ありし時こゝめる　大僧正慈演

わう慈は松紙志られの深うねて海くまとう原に風さりて

家より言合し絵けるに夜慈の心を　拾遺太政大臣

宮様乃鳴るやよ和にもしの春かしぬ神と人のこゝ心を

帝王法師

忘ひわれは神より常をつくこそしいたゝや抱をこふ人なし

和言歌にそおのこた久慈といふことを　讃岐に太上天皇

忘ひつゝ常に常なる年のうひやる紀あくわらまし此の誓此覚

百ゝ言の中より思慈を　武子内親王

玉のとよあしれいさしねおうへ志のふるものよりわもうする

忘れていうちなけるなり我のこゝ志りてゐる月日紙

わう慈は志る人なしせく庭の涙りしとれつきのを拾

百ゝ言讃絵けるに思慈　入唐和尚大政大臣

思ふるよりんのひきいるけ遣た猶りる抱いなみさこ之きつを

法泉院みこの家とやしけるに何さらひきる世界をこうしていひまつり絵けるに

比手習しけるに和にまきわてりのよ古詩絵けるに　遠徳公

清らけ遣と恨こんとけるに抱もなりて猶りさ紀とかもの世心に

恨し　よこひとしけ

夏ようは笠のさいもゝめた乃まに思ぬ人とみくをや家ん

あのしらす　貴之

風ぬけはさんに波こに破るれや我衣手のかりく時なる紀

唐絵和下

須戸乃わきれ浪うけ衣よ和にのこさくは我力に成にけるに

くすゝ夏を母につゝかすとてたゝこにかりて　三條院女御入戸道

浪こゝに神うぬ遣けるわやめ草にあくさう祢とりとむやて

又月又日寄内絵よりつゝりしける　お大納言公任

時雨以行かせ絵しわやめ草にまふ遣いりれう祢にうるなくへき

題しらず　　　　　　　　　　　　　在原行平

五月雨は空におぼつかなき郭公なにをうきねに鳴わたるらん

郭公なきとかきけど花のえに…

題しらず　　　　　　　　　　　　　凡河内躬恒

郭公のなきつるかたをながむればただ有明の月ぞのこれる

何となく物ぞかなしき…

題しらず　　　　　　　　　　　　　伊勢

みくまのの浦よりをちに漕ぐ舟の我をばよそにへだてつるかな

難波がたみじかき蘆のふしのまもあはでこの世をすぐしてよとや

　　　　　　　　　　　　　　　　　人麿

みかきもり衛士のたく火の…

　　　　　　　　　　　　　　　　　よみ人しらず

うれし涙おちそふ袖のつゆやいせとはなんと…

東路の道のはてなる常陸帯のかごとばかりもあはんとぞ思ふ

かくわたる[illegible]…

何事かおもふ…人の袖…

わびぬとも…

氷とぢし…

歎きつゝ[illegible]…

　　女のもとにまかりて…中納言…

冬の夜の…

　　　　　　　　　　　　　　　　　藤原元真

　　　　　　　　　　　　　　　　　よみ人しらず

春雨の[illegible]…

渡川かたもしらぬいなせ之渡ぬは人の心ひろかなし
　世に　つらしける　　　　　　　　　　　　　在原元方
いかなせんくめちの橋のなかたえてわたらぬ中にやみなん
　まかなの浦にてよみ侍ける
雑ふれこ海の松ひろ志もゆかん松乃我浪よさひき
　よみ人しらず　　　　　　　　　　　　　　　小弁
我恋をいかなる汁ら雑浪あるわれ志のやの浪にまかせ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　伊勢
都鳥いわかれし海の風にてこえふかうら浪のまにまに
　人につかはしける
次さの瀧よ落たらむ山のこなたにとし浪のまに
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　藤原清正
わかひなるにさふまする白浪のさわく梢志も我かたへかな
　よみ人しらず
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　源宗于
よし川の山下まかつ岩浪たかくゆく水の早くそ人をおもひそめてし
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　貫之

河霧の山志もさけなくも草葉に露の玉しくもよし浪の上
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　坂上是則
とかくも吉野の草葉にしけき浪よ志けの遊浪の浪を浪ま
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　曾禰好忠
かくまて乃さ秋まてあれこや我か人に心の
ゆらのとをわたる舟人楫をたえゆくへもしらぬ恋のみちかな
　寛平御時きさいの宮の歌合のうた
おもひせよ君への涙を川のなかれくるまも逢みてし
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　権中納言匡房
楫をたえゆらの湊によする舟の志あなかしこ浪風
　百首歌よみし
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　藤原基俊
こころへせよ沈る浪よ湊船のゆくゑ志らぬ人の心せ
　よみ人しらず
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　武蔵歌主
紀のかはやゆらの湊よ出て世のさるかみ逢みて志れ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　権中納言長方

法性寺入唐の雲日本政大臣家の哥合り　桂中納言師綱

法性寺入唐の雲日本政大臣家の哥合り　桂中納言師綱

法性寺入唐の雲日本政大臣家の哥合り　桂中納言師綱

雖波人以ゆるえ為ふ桂をてんあふとおみよ方をつくして

和歌所の哥合り　悪無をとよめる　拾遺大臣

あきのうみるあを波に波をつくさ此濱を尋ぬる

隠名悪と云ふ心を　皇太后宮大夫俊成

あきのうみるあを波に波をつくさ此濱を尋ぬる

あしらす　相撲

あきそのみるめ来るべき方をしらす海に浪なれぬ後の逆人

みるめ海にあらしやいかにとそさしてさして我に数よあまの鈎無

業平朝臣

新古今和歌集巻第十二

悪哥二

草ゆゑ哥ましき哥ゆゑ悪　皇太后宮大夫俊成女

下もしに思ひ消なん煙さに語あれ宮にそうれしき

拾遺大臣家の哥合り　前栄宮大夫朝臣

なまひかれあまはりは火焼そめて煙は宮にくゆつもまふとも

百ゆゑ哥なりしとき悪哥　拾遺大臣

悪我のこ浜千れ濱人りしなれ物しあへぬ神の果をしらるや

悪の哥とてこゝあり　二条院繁波

みるめこう入ぬる後の苔まなるめ神さへ浪の下にくちぬる

無をさる悪と云ふ心をこゝ俗けり　俊彰朝臣

悪こふとなるみはらしの濱楸しなれてのも無をしらす

悪悪の心を　お土政大臣

しるらめや来禁物わしく苔なれいた海にもらす下の心

左右ゆゑ俗けり時家に百ゆゑ哥合し俗けりに悪無の心を　拾遺大臣

津をれよ重こゝ海の岸の物何海来のまくに下に色かゆるとも

悪哥あまさこゝ俗けりとり　後濱大寺左大臣

かくとさにしふんをいはせ山しるゝゆくこ川の苔もうられて

津さやおりふしをさそのこゝろえうやまし語れ我を悪うこ

殷富院大輔

無常の心を　　前僧正慈円

あしともいはん人のゆく空よろしや人めつむ物思ひは

見れどもあかぬ花といふ心を詠侍ける　花園左大臣

人しれぬ思ひは我がうへにあまりて見るめもよしなく渡るさと

題しらず　神祇伯顕仲

物思ふといへるはいかでか思ひもやらでいとど人の袖のあはれ

無常の心を　源俊頼朝臣

人はまづ思ひしるべき世の中山下の道のほどもなく見えわ

和歌所歌合に無常の心を　雅経

きえねただしのぶの山の峯の雲かかる心のあともなきまで

千五百番歌合に　右衛門督通光

浪あればよその山の端のかげもなく人のこころぞ見えぬ

和歌所歌合に寄風恋といふことを　二條院讃岐

うらみてもなほ人めをば思ふかな浦のあまのたくなはの

皇太后宮大夫俊成

あまりよる夜のつらさに恋しさをせめてもなほいとはるれ

題しらず　俊恵

人もまた見えぬ山路の岩かげに流るる水を袖にせきつつ

西行法師

思ひ知る心のうちぞ悲しきに人め思ふてものおもひのや

数ならぬ身のとがにてしもあるものを恨むるなき心かな

百首歌の中に恋の心を　藤原家隆朝臣

草枕ゆふべの露をかたしきて我がたもとにぞ山風ぞ吹く

入道前関白太政大臣家に百首歌よませ侍ける時恋の心を　太宰大弐重家

身の世をいかでかくのみ思ふらんやせぬる恋の種

左大臣家にて題をさぐりて歌よみ侍けるに　

おもふことなくてやみなんのちの世もなかなか心のうちもしられ

皇太后宮大夫俊成

うき身をばわれだにいとふいとへただそをだに同じ心と思はん

前大納言隆房

いかにせんいつまでとてかあぢきなく人の心をたのみそめけん

千五百番歌合に　　九条前内大臣

あ[illegible]といかなれは[illegible]そのゝ夕暮の空

[illegible]侍りける　　皇太后宮大夫俊成女

おもは[illegible]の露をおきし[illegible]

水無瀬恋十五首歌合に　　摂政太政大臣

山かつの麻のさ衣をさをあらみあはて月日やすきふける庵

欲言出恋といへる心を　　藤原忠定

おもへともいはて月日はすきのかとさすかにいかゝしのひはつへき

百首歌奉りし時　　皇太后宮大夫俊成

年[illegible]の雲[illegible]の露[illegible]

入道前関白右大臣に侍りける時百首歌人々によませ侍りける忍恋

ちらすなよしのゝ葉草のかりにても露かゝるへき袖のうへかは

題しらず　　藤原元真

白玉か露かとゝはむ人もかな物おもふ袖をさしてこたへん

女につかはしける　　藤原義孝

いつまての命もしらぬ世中につらきなけきのやますもあるかな

崇徳院に百首歌奉りけるとき　　大炊御門右大臣

我恋はちきのかたそきかたくのみゆきあはて年のつもりぬるかな

入道前関白家に百首歌よませ侍りけるにあひてあはぬ恋を　　藤原基輔朝臣

いつとなくしほやくあまのとまひさし久しく[illegible]あはぬおもひは

夕恋といふ心をよみ侍りける　　藤原秀能

もしほやくあまの磯屋の夕煙たつ名もくるし思ひたえなて

海辺恋といふことをよめる　　定家朝臣

須磨のあまの袖に吹こす塩風のなるとはすれと手にもたまらす

摂政太政大臣家歌合によみ侍りける　　寂蓮法師

ありとてもあはぬためしの名とり川くちたにはてねせゝの埋木

千五百番歌合に　　摂政太政大臣

なけかすよ今はたおなし名とり川せゝの埋木くちはてぬとも

百首歌奉りし時　　二条院讃岐

涙川たきつ心のはやきせをしからみかけてせく袖そなき

摂政太政大臣百首歌よませ侍りけるに　　高松院右衛門佐

よそなからあやしとたにもおもへかし恋せぬ人の袖のいろかは

恋の歌とてよめる　よみ人しらず

思ひわび[illegible]の瀬をせき[illegible]袖より[illegible]

入道前関白太政大臣家歌合に　道因法師

紅に涙の色のなりゆくをいくしほまでと君にとはばや

百首歌中に　式子内親王

夢にても見ゆらんものを歎きつつうちぬるよひの袖のけしきは

[illegible]　後徳大寺左大臣

[illegible]

千五百番歌合に　摂政太政大臣

[illegible]その面影も[illegible]

題しらず　大納言実宗

[illegible]

[illegible]　前大納言忠良

[illegible]

[illegible]　正三位経家

[illegible]

[illegible]恋といふ心を　[illegible]

[illegible]

摂政太政大臣家百首歌合に　中宮大夫家房

[illegible]

[illegible]　家隆朝臣

[illegible]

名立恋といふ心をよみ侍りける　権中納言俊忠

なき名のみたつたの山に立つ雲の[illegible]

百首歌中に忍恋のこころを　惟明親王

[illegible]

[illegible]　[illegible]

我恋はしる人もなし[illegible]

水無瀬恋十五首歌合に春恋の心を　皇太后宮大夫俊成女

面影のかすめる月ぞやどりける春やむかしの袖の涙に

冬恋　定家朝臣

床の霜枕の氷消えわびぬむすびもおかぬ人の契に

摂政太政大臣家百首歌合に　有家朝臣

つれなさのたくひまてやはつらからぬ月をもめてし有明の空

宇治にて夜恋といふことをおのこともつかうまつりしに　藤原秀能

袖のうへに誰ゆへ月はやとるそとよそになしても人のとへかし

久恋といふことを　雅経

よし川のよとみにされ水の年へても絶ぬ思ひにむすほれつゝ

家に百首歌合し侍りけるに祈恋といふことを　摂政太政大臣

いくよわれ浪にしをれてきふね川袖に玉ちる物思ふらん

定家朝臣

年も経ぬいのるちきりははつせ山をのへのかねのよその夕暮

恋のうたとてよめる　皇太后宮大夫俊成

うき身をはわれたにいとふいとへたゝそをたにおなし心とおもはん

題しらす　権中納言長方

恋しなむおなしうき名をいかにしてあふにかへつと人にいはれん

殷富門院大輔

あすしらぬ命をそおもふおのつからあらはあふよをまつにつけても

八条院高倉

つれもなき人の心はうつせみのむなしき恋に身をやかへてん

西行法師

何となくさすかにをしき命かなありへは人や思ひしるとて

思ひしる人ありあけの世なりせはつきせす身をは恨さらまし

新古今和歌集巻第十三

恋哥三

中関白かよひそめ侍りけるころ　儀同三司母

わすれしの行末まてはかたけれはけふをかきりの命ともかな

忍ひたる女をかりそめなる所にゐてまかりてかへりてあしたにつかはしける　謙徳公

かきりなくむすひをきつる草枕いつこのたひを思ひわすれん

題しらす　業平朝臣

おもふには忍ふることそまけにけるあふにしかへはさもあらはあれ

人の拝まさりけるをあそ物よつりけり　慶賀公
此日ことあふまりしへ思ひしをまふまを命れあしまるを
百ことこそ
武子内親王
逢こと絶せふ松かえのこ手四事以て親志得ゆく神とかは志
乃中物に向けり時又義和のことに抱中勅て拝ゆてつりけり源氏法師下
悪しさにきふうれ何ゆるおく山乃ひかをの落こし神はぬれて
きいしらす
和州法師
逢まその命をかれと志ひしを悔しうけりけりつこと落ふ
三條院女蔵人たち
人にうす花うれ乃りゆ衣さそ身にあらそ名やうらん
興風
逢みくもかひなりけるむは玉れたれ武蔵にあらうつは
宣旨御下
中しくは抱志ひうれて稀ぬるよはたれ武蔵もえやみけり
思ひうる人とふうして
伊勢
蔵まそも人にうるれ志ると此へは手枕なれ抱きに拝しと

あひしらす
和泉式部
抱ぬに志ねはいはしあしまうに君にまれ蔵
人より抱ひたしめて
三内侍
忘れても人にうるれうこれ乃蔵みて居もなからぬよを
女しつたしけり
菅原花永御下
はらかりし抱ほの年は忘れて一夜乃蔵を起とそ
あひしらす
高倉院御所
けさまおいとこ志ひをこれまそ歌さうつむあふさ此山
初舎悪のこころを
俊頼御下
あしのや乃志何をこ常れて結ひ心やもとも打こくうれ
きいしらす
かつまうめ小梅に此蔵高山の蔵抱露うつ里にと人にうるれ
人忘れを思けるをふこ知とちすと分けり今ありけり　本拝
此にをんくとのこ咲秋風に下もの露れられる花方紙
きいしらす
宣旨御下
わけるに二見れ海にうる波乃神のこぬれておさ何隠人

年ことのあけぬる秋をこそ惜しまれはまたれけるたまさかにやはゆく　伊勢

九月十日餘り秋をしまて和泉式部か門をさして出侍けるに雨ふりけれは出てたちやすらひ侍りける　今宰相敦慶親王

秋のよの有明の月乃入までにやすらひかねてかへりにしかな

よみ人しらず

心あてにおらはや秋萩のゆきさへみちの空まて濡れぬへきかな　左近衛中将

まちわひてけふくれぬ秋の露のおきそのたのまれもせぬ　延喜御時

きぬ衣くりかへし恋ひわたりけるに

秋の露のおきつつ覚もしらぬ人の消えつつふる世をはかなみ　安養源周子

よみ人しらず

しらぬまの露やいかならん露けきかなしきねとしらずとも秋のなへ　兼輔中納言

志ひ出ることのはかなしきなくも秋をしらぬわけて菊のうへの露　清慎公

うち出乃まゝれ夜をまちわひて秋は今宵となりかならぬ　右大臣

夜の更て侍りまうてはてゝよみける人まかりけるに

いかゝ秋乃深まさる空のけしきもひとつに暁の月のほとり　菅原道真

さそはれていひけるに侍りけれは

あさと出て吹く秋風の袖に露のおくらん　大納言源清蔭

紅葉のはに霞のかゝるをみて侍りける人の見にまかりけるときによめる

けさのまに秋もおしみてはかなくも風のまにまに散りそめにけり　和泉式部

ふかくしけれは秋のけしきかな露の心にかゝりけり　在原業平

まて侍りける人とてよめる

よひのまに志けりもつる花乃ちりぬるをまちかねて　伊勢大輔

雨ふりける日に侍りける人のもとに

秋のよのかたみはいつもなきものをこころとめても何かはせん　九条右大臣

小八條のみことに侍りける　菅原道真

くれぬとて秋のなごりのかなしさはいつかたまらん夕暮の空

よみ人しらず

志けりまて待ちし秋はいまはの月のかけにまかせん　藤原雅経

女をかへしてよみける人のもとより　三条右大臣

折につけてかはりゆく秋のおもひは露にぬれつゝ夢のゆかしさ

二条院御時あかつきかへりなんとする人にとて女房にかはりて　二条院讃岐

明ぬれとまたきぬ〳〵になりやらて人の袖をもぬらしつる哉

題しらす　西行法師

面影のわすらるましき別かな名残を人の月にとゝめて

後朝恋の心を　摂政太政大臣

又もこん秋をたのむの雁たにもなきてそかへる春のあけほの

女のもとにまかりてあしたにつかはしける　かた氏朝臣

頼めて思ふにつきせぬ道芝の露ともろともにきえなましかは

女のもとに物をたにいはむとてまかれりけるにむなしくかへりてあしたに　左大将朝光

消かへりあるかなきかのわか身かなうらみてかへる道芝の露

二条関白白河院入内のあしたにつかはしける　花山院御歌

秋かるも重ねし袖の露けさは今朝わけこし野辺の露にまさるや

法性寺入道前関白太政大臣家歌合に　藤原道経

庭におふる夕かけ草の下露や暮をまつまの涙なるらん

題しらす　小侍従

待宵にふけ行かねの声きけはあかぬ別の鳥は物かは

藤原知家

是も又おなしあはれやありやせん今日を限の命ともかな

西行法師

たのめぬに君くやと待宵の間のふけゆかてたゝあけなましかは

題しらす　清原元輔

大井川ゐせきの水のわくらはにけふはたのめし暮にやはあらぬ

まうてこんと契りける人のおそくまうてきけれは

夕暮は君かゝよひちふかゝらはわかやとにこそひきもとめめ

西行法師人々にすゝめて百首歌よませ侍りけるに　宜秋門院丹後

あちきなくつらき嵐の声もうしなと夕暮にまちならひけん

恋の歌とて　太上天皇

たのめすは人をまつちの山なりとねなましものをいさよひの月

水無瀬恋十五首歌合に夕恋といふ心を　摂政太政大臣

何ゆへと思ひもいれぬ夕たにまち出しものを山のはの月

寄風恋　家隆朝臣

やよやいつはりの空あきの風にてもまつ川ほとりあるはひとゝ

あいーらす

人をとてうせの宮をとをまあらてにをはるの君作てり
西行法師
八重霞こそ名
いつはゝ月みむとをもれうるあのむら雲はをはるの
明月
あの月をうへ人をなうるむよ
たさ歌をあれい松風のこゑ
落葉書類
今うんとうあのとをはしたいをはるの月やまりけん
秋をこそうれ
歌子内親王
春をは園へもいとゝ花のをかいうれ宮のをは
春をこそ
西行法師
あの月あに君をもとをはる雪はの宮ゆをうをはるの
宣旨局下
ゆうさの花をや人乃宮をむ月をはる歌をうれあるの月
あらーらす
宣旨局
君をうんとうひ秋をとをはるあれいあのまゝりく思つをある

衣をとをはるの山をはるの宮をはる秋君をはるの秋をはる
人丸
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる
をはるの君をはるの宮をはる秋をはるの君をはるの宮をはる

百首歌の中に　源重之

霜の上に朝ゐる雲の消えけれは年まて人を[illegible]

題しらず　安法法師女

独寝とおもはれさる宿の床の上に衣いく秋の霜ぞつもれる

源重之

山城の淀れにて[illegible]独寝[illegible]

貫之

うきて世の人をもあはれ[illegible]

宮仕へしける女をかたらひ侍りけるにやんごとなき男の入たちていふけしきを見て恨けるを女あらかひければよみ侍りける　平定文

偽をたゞすの森のゆふだすきかけつゝちかへ我を思はゞ

人につかはしける　右大将道綱母

[illegible]

恋の哥を　入道前関白太政大臣

我計つらきを忍ぶ人やあると今世にあらば思ひあはせよ

摂政太政大臣家百首歌合に恋の心を　皇太后宮大夫俊成

[illegible]

[illegible]

題しらず　久我内大臣

哀とも誰かは露を思はまし消え残るべき我身ならねば

題しらず　殷富門院大輔

つらきをも恨ぬ我にならふなようき身をしらぬ人もこそあれ

殷富門院大輔

何かいとふよもながらへじさのみやはうきにたへたる命なるべき

刑部卿頼輔

恋しなむ命は猶も惜しけれは世にあるかひはなけれども

西行法師

哀とて人の心のなさけあれな数ならぬにはよらぬなげきを

身を知れは人のとかとは思はねと恨かほにもぬるゝ袖哉

よしさらぬ様の世をさまるのめをけつらさにはこぬ方にも様れ
女のめをうんさうさつりを咲して浮世中の名にあしてよ

新古今和歌集巻第十四

恋哥四

中務の紛けり時女よつりしけり　法眞公

よひくまゝ君を衣やしたひつゝ人はいとゝて様をのこゝ鳴
女し　よこひとしらす

若ゝぬにもしたひかけるよひくを紛いいかゝ物ちうはと湧
お物を轉りしつりしけり

底しさにしたゝる命をしたひ出くとふ人あらはあしとあらへよ
うせるゝ物をうまゝまゝそにとちるとしてふつ井あてつりしけり　藤原公

おもてにも此白きふこゝ陽つまつ世しも色さるゝちのこゝとる
女し　思子女王　贈皇后文母

此白ともきふさもしたゝに今はとておしく様のふまとひり
入名殿文母まゝそこにけり此ひしかしけり此ひしかしけり此ひしかしけり

絶ぬるり新たにみくはとふへなとくこゝのかれはこくさゝにかゝ
右大将の総母

りこくにしおつてあやめ草おもはゝ様をやはかきんとしたひし
四十六歳の年後はさりけり此文月の日後朱雀院の御遊ことに陽明門院
あつしらす

こゝの紫乃うけろふゝぬにもあ様をいとく明夜の降雨さるん
伊勢

ぬく風よつきてもとりんさくかに乃かよひ居ハ寒よ雨こも
皆大将の総母

葛のそにあらぬ我力も杖をのぬくまつきつゝ恨つりれ
后の文久ぬさとにおりけり此つりしけり　天暦御宇

霜さやく聖への草をそにあらぬ先ちるとう人めのかれ雨さる浅
ひさしくさいくさわけるへり　延喜御宇

浅芽生る聖へやかるん山かけのかれなりの草はなこもかれに
此女し　よこひとしらす

ちりまかりてとまらさりけるさまなりけれは向ひあはむ年もこゝぬ
つやとの梅をかけれはすとうえその梅をりつかはして　女御徽子女王

ことしよりはるしらぬ何ゆへつるもおはさの梅をこそみめ　天暦御哥

御返し

今こんと云の先つ梅か香にまよひそ見えけるみゆる梅をしけれ　女御の志をしるされつりけり　朱雀院御哥

都のつほにけるかとおもひねたらてそ雲井にゆかしけれ　女御徽子女王

御返し

おもひやるなれは見よ有明とおもふ雲のうへわかれみさらん　従三位隆房卿

羅宮藤原為長朝臣まりて後西限に梅の日堀川の女房へ　後朱雀院御哥

春夜の梅の香してなにまつ柳の糸みたれつゝ人を恋つる　藤原家良

御返し

まつ柳の糸みたれけむあをゝもへとおもひなよれ　後朱雀院御哥

みつりけり

青柳の糸なかくしてあひくともおもひそめてん人にしらるな　藤原実子

御返し

おほかたにわかれゆくもおもひねまつ柳いまさらにしとゆるうたのまゝん

やかて秋かけの女は相にて葵をみるれの日つかはしける　右京大夫

年へのあつさ人をしるも秋そのにをかし呉竹

女房

われはけふ葵のかさすわかれもとみとや女房の行ぬ　よそ人しらす

いかなる花のまこまるりつりけり

あふことは絹の内なる月影のおほかたにやは哀なるらん　天暦御哥

あつしらす

さらしなやをば捨山の有明のつきずも物を思ふ頃かな　伊勢

いつとても哀と思ふを寝ぬる夜の月はおほろけなくなくそ見し　中務

更級の山より外にてる月もなくさめかねつ此頃の空　躬恒

天乃とをおしあけ方の月見れはうき人しもそ恋しかりける　よみ人しらす

須磨の花月影寒しとふつきの雲路の波にわかれてそ行

人につかはしける　　忠岑

いはくいさやあはれけの月影をとうらの霞ふきと結ひおもひゐ

題しらず　　よみ人しらず

まして外山の峯にもみなのにくるらんの宿よりさして月影

題しらず　　藤原為衡

今はとてわかれし程の月をたに涙にくれてなかめやはせし

肥後

面影のわすれぬ人によそへつゝ入をそしたふ秋の夜の月

後徳大寺左大臣

うき人の月はなにそのゆかりそと思ひなからもうちなかめつゝ

西行法師

月のみやうはの空なるかたみにて思ひもいてはこゝろかよはん

くまもなきおりしも人を思ひ出て心と月をやつしつるかな

物思ひてなかむるころの月の色にいかはかりなる哀そふらん

八条院高倉

くもれかしなかむるからにかなしきは月におほゆる人の面影

百首歌中に　　太上天皇

わすらるゝ身をしる袖の村雨につれなく山の月は出けり

千五百番歌合に　　摂政太政大臣

めくりあはん限はいつとしらねとも月なへたてそよその浮雲

我涙もとめて袖にやとれ月さりとて人の影はみえねと

権中納言公経

恋わふる涙や空にくもるらんひかりもかはるねやの月影

左衛門督通光

いくめくり空行月もへたてきぬ契し中はよその浮雲

右衛門督通具

今こんと契りしことは夢なから見し夜に似たる有明の月

有家朝臣

わすれしといひしはかりの名残とてその夜の月はめくりきにけり

題しらず　摂政太政大臣

思ひ出てよなよな月に尋ねすは待てと契りし中や絶えなん

家隆朝臣

忘るなよ今は心のかはるともなれしその夜の有明の月

法眼宗円

そのまゝに松の嵐もかはらぬを忘れやしぬるふけし夜の月

藤原秀能

人そうきたのめぬ月はめくりきて昔忘れぬ蓬生の宿

八月十五夜和歌所歌合に月前恋といふことを　摂政太政大臣

わくらはに待つる宵もふけにけりさやは契りし山の端の月

有家朝臣

こぬ人をまつとはなくて待宵のふけゆく空の月もうらめし

定家朝臣

松山と契りし人はつれなくて袖こす浪にのこる月影

千五百番歌合に　皇太后宮大夫俊成女

ならひこしたかいつはりもまた知らて待とせしまの庭のよもきふ

和歌所の歌合に久恋といふことを　二条院讃岐

跡たえて浅茅か末になりにけりたのめし宿の庭の白露

摂政太政大臣家百首歌合に　寂蓮法師

こぬ人を思ひたえたる庭の面の蓬か末そまつにまされる

題しらず　右衛門督通光

尋ねても袖にかくへき方そなき深き蓬の露のかことを

藤原保季朝臣

かたみとてほのふみわけし跡もなしこしは昔の庭の荻原

法橋行遍

名残をは庭の浅茅にとゝめおきて誰ゆゑ君か住うかれけん

摂政太政大臣家百首歌合に　定家朝臣

忘すはなれし袖もや氷るらん寝ぬ夜の床の霜のさむしろ

家隆朝臣

風ふかはよそになるみのかたおもひ思はぬ浪になく千鳥かな

百首歌奉りし時　摂政太政大臣

いはさりき今こんまての空の雲月日へたてゝ物思へとは

千五百番歌合に　　　家隆朝臣
思ひ出よ誰かね言の末ならん昨日の雲の跡の山風

二条院御時艶書の歌めしけるに　　　刑部卿範兼
忘れ行人ゆへ空をながむれば絶々にこそ雲もみえけれ

題しらず　　　殷富門院大輔
忘れなばいけらんものかと思ひしにそれもかなはぬこの世なりけり

西行法師
うとくなる人をなにとて恨らんしられずしらぬ折もありしに

今ぞしる思ひ出よと契しは忘れんとての情なりけり

建仁元年三月歌合に逢不遇恋の心を　　　土御門内大臣
あひみしは昔語りのうつゝにてそのかね言を夢になせとや

権中納言公経
哀なる心のやみのゆかりとも見し夜の夢を誰かさだめん

太宰大弐重家
契きやあかぬ別れに露おきし暁ばかり形見なれとは

寂蓮法師
恨わびまたじ今はの身なれども思ひなれにし夕暮の空

宜秋門院丹後
忘れじの言の葉いかになりにけん頼めし暮は秋風ぞ吹

家に百首歌合し侍りけるに　　　摂政太政大臣
思ひかね打寝る宵もありなまし吹だにすさべ庭の松風

有家朝臣
さらぞふかゝらむと思ふに秋こゝ衣の衣々に松風ぞ吹

題しらず　　　よみ人しらず
心より月も秋なる寝覚えんわが身ひとつの世の哀とぞ思ふ

題しらず　　　西行法師
哀とて人の心のなさけあれな数ならぬにはよらぬ歎を

入道前関白太政大臣家歌合に　　　俊恵法師
我恋は今をかぎりと夕まぐれ荻吹風の音づれて行

題しらず　　　式子内親王
今はたゞ心の外に聞ものを知らずがほなる荻の上風

家哥合に
いつもきく物とや人のおもふらんこぬ夕くれの松風の声
摂政太政大臣

心あらはふかすもあらなん宵〳〵に人まつ宿の庭の松風
前大僧正慈円

和哥所にて哥合し侍りしに逢不遇恋の心を　寂蓮法師
里はあれぬむなしき床のあたりまて身はならはしの秋風そふく

[illegible]五十首よませて哥合に
さとはあれぬ尾上の宮のをのつからまちこしよひもむかしなりけり
太上天皇

物おもはてたゝ大かたの露にたにぬるれはぬるゝ秋のたもとを
有家朝臣

草枕むすひさためんかたしらすならはぬ野への夢のかよひ路
雅経

和歌所哥合に深山恋といふことを　家隆朝臣
さても猶とはれぬ秋の夕は山雲ふく風も峰にみゆらん

思ひいる深き心のたよりまてみしはそれともなき山路哉
藤原秀能

題しらす
詠てもあはれと思へ大かたのそらたにかなし秋の夕暮
鴨長明

千五百番哥合に　右衛門督通具
ことの葉のうつりし秋もすきぬれは我身しくれとふる涙かな

消わひぬうつろふ人の秋の色に身をこからしの森の下露
定家朝臣

摂政太政大臣家哥合に　寂蓮法師
こぬ人を秋のけしきやふけぬらん恨によはる松虫の声

恋のうたとて読侍ける　前大僧正慈円
我恋は庭のむら萩うらかれて人をも身をも秋の夕暮

被忘恋の心を　太上天皇
袖の露もあらぬ色にそきえかへるうつれはかはるなけきせしまに

むせふともしらしな心かはらやに我のみけたぬ下の煙は
定家朝臣

しられしなおなし袖にはかよふともたか夕くれとたのむ秋風
家隆朝臣

皇太后宮大夫俊成女

露はらふね覚は秋の昔にて見はてぬ夢にのこる面影

摂政太政大臣家百首歌合に　大僧正慈円

心こそゆくゑもしらね三輪の山杉乃木末の夕暮の空

百首歌中　式子内親王

さりともと待し月日そうつりゆく心の花の色にまかせて

いきてよもあすまで人はつらからし此夕暮をとはゝとへかし

暁恋の心を　大僧正慈円

暁の涙や空にたくふらん袖に落くる鐘の音かな

千五百番歌合に　権中納言公経

はかなくも思ひわひぬ此浦による浪の枕にかゝるくさく

定家朝臣

あちきなくつらき嵐の声もうしなと夕暮にまちならひけん

水無瀬恋十五首歌合に　雅経

見し人の面影とめよ清見かた袖にせきもる波のかよひち

皇太后宮大夫俊成女

ふりにけり時雨は袖に秋かけていひしはかりを待とせしまに

かよひこし宿の道芝かれ〳〵に跡なき霜のむすほゝれつゝ

新古今和歌集巻第十五

恋歌五

水無瀬恋十五首歌合に　藤原定家朝臣

白妙の袖の別に露おちて身にしむ色の秋風そふく

藤原家隆朝臣

思ひ入身は深草の秋の露たのめし末や木枯の風

前大僧正慈円

野辺の露は色もなくてやこほれつる袖より過る荻の上風

題しらす　左近中将公衡

恋わひて野辺の露とは消ぬとも誰か草葉を哀といはん

右衛門督通具
まくられは おきてゐたるの 床の上に 涙の露は 袖にしも おく

題しらず
権中納言信忠
秋の夜は 露こそ殊に 寒からし 草むらごとに 虫のわぶれば

よみ人しらず
わが宿の 尾花がすゑに 白露の 置きし日よりぞ 秋風も吹く

右近将監
藤原元真
おきてみば 秋の月をも 露と消ぬ 浦に涙の 袖に見ゆらん

この歌を侍りける女の許へ遣はしけるに 返事にいひ遣はしける
和泉式部
今はただ 思ひ絶えなん とばかりを 人づてならで いふよしもがな

おなじ事を 御返しに侍りける女のもとへつかはしける
藤原惟成
わかれての 後ぞかなしき 露の間も 涙を袖に かくるやどりも

ふるさとへ まかりける人に
藤原惟成
打なびく 野辺の萩原 おく露の 散りまがふ なく 人ぞこひしき

題しらず
萩の上の 露や涙と なりぬらん 色も変らず 秋の夕暮

題しらず
左近中将藤原朝臣
晩秋消えぬ かつ枯れわたる 野辺の草 露にむすぼれ あはれなるらむ

ひさしくまゐらざりける人に
光孝天皇御製
君がせぬ わが手枕は 草なれや 涙の露の 夜な夜なぞおく

小野小町
露ばかり おくらん袖は たのまれず 涙の川の たぎつ瀬なれば

みちのくにのかたに侍りける 九月ばかりにまかりける
重之
思ひやれ 露のかの村 雲時雨つつ わたるらん 萩のうら葉の しぐれみぬらん

秋の夕暮ひとりながめてよみ侍りける
六条右大臣家
身にちかく 来にける秋と 色かはる 秋ぞと人の 思ひけるかな

題しらず
和泉
色かはる 萩の下葉を 見てもまづ 人の心の 秋ぞ知らるる

讃岐
吹きまよふ 野風をさむみ 秋萩の うつりも行くか 人の心の

入道前摂政の御許へ 時雨つる秋に 見えける

源のこうに出るあまの鍋さるれなる紀貫すくるべきなる
桃のこうくせしひし源川いまは我方の志つむへまつ
なを浦に神に湊のさいくかり給う船のよわしけよ
いまう神まうれし日よわ白ぬれ衣ぬるしよ志つくそぬ海
あかつとの波の下まふかくれて志川ふるく孫とあるれ
湖にしてしほの猿なひかめやもれてこれ風はふくとも
忘るらんと志ふんのうくひよわりしよわけ水抱そかれよ
夏はれら人をは惠しと忘れるはかりしらんつ稚を忘しき

命をはあるなる湖抱せいかしとつら紀をめはなくもるれ
いけるよりくれるん世中に身れあまはよく命つられ
今まてよ忘ぬ人をせまもあしとのうさ海く年のへぬれは
あるをまにむとひくもふんぬるくは君の中をたのほし
山志ろれ外をのあるてよくみく粉しかひなる紀世をかう
君のあるりかんつをくらむ伊弱山をれかつしそ無ふるも
沖見よ志ぬるせしの泊りなく身れとかれ如ぬへさかれ
やしのぬる堂山高れよれまてもあるしさけは縄つてそぬる

ひるはきてよるはわかるゝ山鳥のかけみる時そねはなかれける

我とこそおもひて人を恋しけれ今ことに人に恋られにけれ

人丸

夏野ゆくをしかのつのゝつかのまもわすれすおもへいもか心を

みかりするかりはの小野のならしはのなれはまさらて恋そまされる

八代女王

みそきするならの小川の河風にいのりそわたる下に絶しと

清原深養父

ねつゝみる秋の神かはかなは枕のしたにしるやしるらん

中納言家持につかはしける　山口女王

あしへよりみちくる塩のいやましにおもふか君かわすれかねつる

塩の海のまへより浜の浮ねさそなきぬるの夢[illegible]

題しらず　赤染衛門

いかにねてみえしなるらんうたゝねの夢より後は物をこそおもへ

斎宮女御

わきてしく袖ゆへ夢のおもかけそひまなく[illegible]

伊勢

春の夜の夢にあひつとみえつれはおもひ絶にし人そまたるゝ

兼明親王

長き夜の夢をはかなみさめてこそみしやいかなる数ならん

女御徽子女王

ゆめならてうつゝのうさもわすられておもひなくさむほとそはかなき

春の夜おもふことありてよみ侍りける　能宣朝臣

うたゝねにわかれてかへる春の夜はいかにみつゝかあかしつらん

題しらず　寂蓮法師

涙川身もうくはかりなかるれとけぬはおもひのほむら計よ

百首歌たてまつりし時　家隆朝臣

なくイ

おもひみよくらふの山のかりねにも夢の忘れかてにや

題しらず
ゆふぐれはわが涙こそ秋風にさわぐ夕べの人のみもおもはれ
丹後

千五百番歌合に
夜るなりくらねよのとみ夢れなるらんこよひもまたやねられん
皇太后宮大夫俊成女

題しらず
うち風わしそのまど迷ひのさもちらにおもひせしにまたねさへ涙のつ
宮内卿

和歌所歌合に遇不逢恋のこゝろを
夢にても見えはせんとも忘れなばうらむる心ぞつらぬは
皇太后宮大夫俊成女

恋歌とて
たまのをよたえなばたえね命とも数ならぬ身のことのはのかけの世か
式子内親王

堀河院に百首歌奉りける時恋歌
ことにけるその数とも思はれずいくたびかはらのすがた見えても
弁

題しらず
さの磯のうら面影さそひてまたやせつなくぬれし袖を
皇太后宮大夫俊成女

題しらず
あかれねむしろ君がなにおもひよるとも涙よ明わたれそ
相模

おとこのいかで[illegible]ほのかなるをのみ見えければ大弐三位
はかなくもまた恋しさの思ひにかねてそしらぬ心の見るに
昔見ける人の家に女房のさしのぞきてありけれは
はかなしやなに迷ひのあとも人をこひまさりて
年ごろ後のことを思ひやりてつかはしける
花さかぬ朽木の杣の杣人の〔いかなる〕くれに思ひいづらん
藤原仲文
ひさしく音せぬ人に
とのつらさこそいま迄とおもひまかせたる人のとはぬ枕やふかき
大納言経信母
忠家朝臣かれがれになりて後ひさしくおとづれ侍らざりければ
ひさしくやおとづれぬれば我やしらぬ恋は[illegible]
按察使公通母
たちかへり人の心もしらぬねもうらみてやしほにぬれし言の葉
題しらず
あけくれはなつかしさのみ世のなかのむくひあかるらん
皇嘉門院尾張
いかにしていかにこの世にありへばかしばしも物を思はざるべき
和泉式部
あふことのかたみをさへもみそれ人のいさをよことみつしのりん
素性法師

小野小町
秋風にあはぬこのはのたまらねはへさ今は忘られにけり
僧正遍昭
うつろふやあちふかきいろの後にし中に物や思はん
兼明親王
今はとて忘るゝ絶て野中の水のあかれてさらん
伊勢
思ひ川やみのと岸なる松葉しくら川も忘れねと
業平朝臣
出ぬし絶えにしまゝの人はちも今夜ん
梅のむかしの袖にうつりて我せにゝ月ねせぬ
東宮女御にまゐりけるに
天暦御歌
ならぬこと思ひはみえにおほつかなきは我身つらかれ
御返し
女御徽子女王
なけくらんと見えみそれかゝ川わかみにあさまなき
光孝天皇御歌
題しらす
おもひてはありしひのあまりあれはかたるにをむ涙せとそ
兵部卿致平親王
思ひ知る人さへなき身なれは
思ひ捨てしをも恋ふる涙をしせや玉水
よみ人しらす
雲井にはるかに遠き山の月もさそり恋すれ
素性法師
延喜御歌
雲の上に鳴きて秋ぞなく人の声つれなせね
東宮女御まゐりて久しくなりにけれは
天暦御歌
恋ひて秋まてやいまは絶えて袖ぬれのそ
題しらす
神わたり川のかはし葉ともいそぐはつれ
清原深養父
文節のうちにてみむけり人まつ年つかけり 藤原雅数
ときとよ夜かまえ待る人のめぐりの月を夜さへ
題しらす
藤原元真
住吉の恋忘れ草種絶えてなき世にあへる我そかなしき

東三条女院さいかうかけるまりことりにかゝるあらぬくん　六條内府
みのうへの人のよ粉もかきはらしとやつれん蔭こそはれか
ひさしくおとつれさりける人のもとへ　通親公
あはれなよのつねな露乃ぬきさらかなゝ命のゝくこそあらん
よみ人しらず　権中納言敦忠
ものを思ひ世をわけていのちそてたのめともなほさすかねて世を
世のうきも人のつらさも忍ふるに恋しきにこそ思ひ絶ぬれ　藤原元真
思ふことひとつもなきやうにきこえて…　藤原雅経
数ならぬ身はいやしくもやはや世中に何とかしこの川のなかれそ
よみ人しらず
人しれぬ思ひのかくはしやさしらぬ淵をもこそ　藤原雅経
我よりはまよへる人のゆきはいかにあれ秋の夜の月にもあかし　よみ人しらず
今はたゝ思ひたえなむとはかりを人つてならて言ふよしもかな

おもひあまりうき身を嘆きおきわかれ捨られん
年月もなかめつくしてふる里の露わけわひてかへるさ
秋の夕の哀れさも山の風のさゆるまゝに我は独寝つれなき我を
くしらぬ旅寝のあはれそてかれたはまくらなく涙ならん
相生の松はつらくもあらしかはみるめも人は浜千鳥
白波はたちさわくとも和歌の浦のなれそなれにし人をそたのむ
行てみぬ湊の浪のよるひるみなとの海人の縄のたくなは

新古今和歌集巻第十六

雜歌上

八宮お宮白太政大臣家百こ[illegible]せ[illegible]

[illegible]

年暮ー[illegible]波の津らくまけまもわ苔の袖にもまもやしらん

[illegible]

山のけやさしそ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

春くれハ袖乃[illegible]

[illegible]

[illegible]

梅

梅か香にたちよる世の梅ぞ袖のかをりにゝほふなる

枇杷左大臣はしめて家につかうまつりける時梅を折りて

をらぬにもかゝりける梅の花なれは手折らはいかにゝほひまさらん

延喜の御時もみちの宴の殿上人にかけておほむ(?)

いまゝて折りける梅の花をみて

源公忠朝臣

百敷よりいてゝ梅は家なくてもさかりにゝほひけり

梅の花をみ給ひて

花山院法皇

色香をはおもひも入すうめの花つねならぬ世によそへてそ見る

上東門院世をそむき給ひにける春庭の紅梅をみ侍りて

大弐三位

梅の花なにゝほふらん見る人の色をも香をも忘れぬる世に

東三条院出家の後おなしところにて(?)紅梅につけてつかはしける

東三条院の御方の女房

春霞たちかへりつゝ梅の花にほひは山のかひもわかれす

清(?)遍

淺みとりわけても春の霞の山のかひもなき心(?)かな

柳

菅贈太政大臣

路の辺乃朽木の柳春くれはあはれ昔としのはれそする

題しらす

崇徳院御製(?)

青柳の糸よりかけて春風にみたれぬ(?)玉をぬける白露

堀川院の御時百首の歌の中に

殷富門院大輔(?)

かつきえみるめのみちのさくらはなはるのあまねき(?)しらせそ

題しらす

九条右大臣

おもひをはまかせつゝそやこのもとにみれはなみたの春のあさつゆ

春の陽(?)にてそ花のちるをみてよみ侍りける

肥後

花ならぬ世をはなれつゝ玉のをやみたれぬ花のみかけてまたるゝ

題しらす

二条院御製(?)

枝しけみ花のちるとはみえねとも散らぬもみちのかつかはるらん

近衛院の御時春のころ鞠のかゝりの桜のさかりなりけるを見侍りて

前大納言公能(?)

春をへてみゆきになるゝ花の蔭ふりゆく身をもあはれとやおもふ

承暦(?)のころほひまかりけるに久しくあはすとそのゝちに

ゆりてしそのよく白雲さかりける頃のこととよみ

けるそのおほうつしなさせしみちてみせけ(?)いへ

蒼々の気色立るれなかるゝをあはれと見て後よみける　飛鳥井雅経

なれ／＼てみしはなごりの春ぞともなどしら川の花の下かげ

建久六年東大寺供養の時奥儀の人々を桜の下にて
とらへて後よみていけりける　ことひとしらず

あたら夜のはなにとひて思ふ事さくらがりける人のあとゝ
こゝろみて行けるを後に大やけさまにしへ人のきゝて
さらひおきけるをはなれがたくてよみけれ

源時光

いさやまた月日のゆくもしらぬかな花のちらぬはまだ春にして

数日のみこもりてなん大納言公経の白川の家にまかりてまかさの日
みなのさかりける後よみてけり中納言

和泉式部

おほかたの春にうらやむ心からよそにも見えぬ我宿の花

後にしらせ

藤原重家

みくさもみえず花のさかりはなけれども心ある人はさくらをぞ見ん

堀河院の御時殿上の人々白河院にまかりて花をみ侍りける日の
まへにてよみけるとぞ

帥中納言忠良

花にけふこゝろもうつる物なれば雨の宿にもつゆやおくらん

関白の法性寺にて宗忠申侍りけるとき人々をめしてことばと
つらねけるに

大納言宗家

桜花折て人しるとも見るもとがへつる心かなくばいかゞせん

大納言経信

さもこそは世にある人のうへとは思はねど花し匂はばうけがたき

花風静花なほちるといふ心をよみ侍りける

大納言忠教

桜花すぎゆく春の友とてや風のおとせぬ世にもちるらん

為相卿のもとにて花のちるを見て三条内大臣のよみ侍りける歌に

ありし世の名残の花はいまは咲山つゝむとも我よりもめん

世をのがれて後百首歌よみ侍りける中に

前大僧正慈円

今は我よしのゝ山の花をこそやどの物とも見るべかりけれ

入道前関白太政大臣家百首歌に

春くれば桜の山のよそにのみわたりて花を見るべき

おなじ家の百首歌に

てる月も雲のよそにぞめぐりける花ぞこの世の光なりける

雲林院にて人々つかうまつりける

おなじく後宮大夫

みをやおもふかたぞしらでさく花の雲のはたちのことをしらず

世の中に心ある人はうしともみえで花ぞちりけれ

西行法師

世中を思へばなべて散る花の我身をさてもいづちかもせん

東山に花見にまかり侍るとて道にてひけるとさうにあるとて
あまたさそひけれと申つかはしける　勝観法師
身はとめつ心はおくる山さくら風のたよりに思ひをこせよ　信親朝臣

さゝなみやしかの浦波立かへり見まくほしきは山ざくらかな
橘為仲朝臣みちのくにまかりける時かへりこむほどをおもひやりて
あふ坂の山をもしらん末の松山こえてや今日の夜はの月

都にはいまだかすみにけりな花さかり松のかたりに霞なの月
きさらきの比
世はなれし吉野の山は霞にも雪のふる里に咲らん
百首歌よみ侍りしとき　清輔朝臣
かすみたに春こそ来ぬれ山里の雪の下なる梅の初花　俊成
千五百番歌合に　有家朝臣
春の夜の夢のうき橋とたえして峯にわかるゝよこ雲の空
崇徳院にて梅の春の歌とてよみ侍りける　八条前太政大臣
まつ人のくるゝをまちし梅の花かをたにしるき春の夜の月

題しらす
風ふけは山梅のちるをかなしみて惜む袖にも花ぞうつれる
前斎院にさふらひて侍りける比桜の花のさかりに山里の花を見てよみける
前斎院中宮
九重にわけし山吹の花の色をいさ人にも見せんとぞ思ふ

題しらす　前大僧正慈円
よの中は散るをかなしみ春霞心にのこる花の色かな
卯月の始の四月一日上東門院大宮にまゐりける時衣更の心を
清輔朝臣
から衣花の袂にぬきかへて夏のころもを今日ぞきるらん

題しらす　上東門院
四月祭の日まかりける車の中にて人のよみけるを
紫式部
神代よりかはらぬ葵の影をしも今日はかけつる袖のしるしに
いつきの宮にて見侍りける
式子内親王
斎院のほとゝきす今朝の山の杉の木の間より鳴き出でにける
ほとゝきすその神山の旅枕ほのかたらひし空ぞ忘れぬ
立出る名残ありあけの月影にいとゞかたらふほとゝきすかな

いく年もさくらの花は代々なれと猶おしまるゝは春の曙

三条院御時五月五日あやめの根[illegible]

梅かえに[illegible]明るし[illegible]あやめも[illegible]

五月雨乃空にもすめる月影に涙乃雨ははるゝまもなし

赤染衛門

述懐百首よみ侍りけるに五月雨

五月雨は[illegible]

皇太后宮大夫俊成

花山院御製

独りぬる宿のとこ夏朝な朝な涙の露にぬれぬ日そなき

[illegible]

[illegible]

和泉式部

[illegible]

七条院大納言

袖の浦波の吹くかへす秋風に雲の上まてすゝしからなん

中務

秋やくる露やまかふと思ふまであるは涙のふるにそありける

[illegible]

はやくよりわらはともたちに侍りける人の年ころへてゆきあひたるほのかにて七月十日のころ月にきほひてかへり侍りけれは

紫式部

めくりあひてみしやそれともわかぬまに雲かくれにし夜半の月かけ

[illegible]

月かけの山のはわけてかくれなはそむくうき世をわれやなかめん

[illegible]

山のはを出てよもまた月[illegible]

[illegible]

伊勢大輔

うき世には[illegible]月のみそすむ

よし　　　　　　　　　　　　参議正光

浮やまかくれてとこゝろにかゝりけり袖くも月のかけやかりける

正暦寺にまうてゝ見侍りけるに人々あまたおもしろく月を見侍りける夜旅の

月ともる海をのこすらんけふ山の端におもひかねつゝも

山里にまかりて月を人のもとにつかはし侍りける　法印静賢

おもひ出る人もあらしの山乃はに獨そいりしありあけの月

八月十五夜和歌所にておのことも哥つかうまつりしに　民部卿範光

ひかりには風もなかりけり天の原吹すさふ月にみてまし

和哥所哥合に湖上月明といふことを　宜秋門院丹後

秋もなほ浦こく舟に跡たえて月かおもかけのこる浦風

題しらす　　　　　　　　　　　　藤原盛方朝臣

山の端をいてゝもなほそいとひつる世中いとゝそらにも明の月

永治元年譲位ちかくなりてよもすから月を見て侍りけるに　待賢門院堀河

忘れしな雲ゐのうへにすみなれて見し夜の月のかはりゆく世に

崇徳院百首哥よませ侍りけるに

いかにして神のやとりのわたるらんやみにかくれし月は宮にや

文治のころほひ百首哥よませ侍りけるに懐旧哥とてよみ侍りける　左中将公衡

心にはわするゝ時もなかりけり三代の昔の雲乃上の月

百首哥よみ侍りし時秋哥　　　　　　二条院讃岐

昔みし雲ゐをめくる秋の月今いくとせか袖にやとさん

月の述懐といふことをよみ侍りける　藤原隆信朝臣

うき身世になからへは猶おもひ出よたもとにちきる有明の月

石山に詣て月をみてよみ侍りける　藤原長能

都にも人やまつらん石山のみねにのこれる秋の夜の月

題しらす　　　　　　　　　　　　新姫

わすれてもわかおもひけりかくみし月のちかひにはかはらぬものを

月のあかゝりける夜あひかたらひける人の此比の月はみるやと申したりけれは　源道済

いつくにてわれをなかむる秋の夜の月はみるらむわかおもひきや

秋の比ほひ相しれりける人のもとに月の出るを見てよみける　増基法師

天のはら遥にわたるかなしさに月のおもかけたのみける

能宣朝臣やまとの国のまつらの山にてすみける女のもとにまかりけるにいはせける　よみ人しらす

そのかみに心をかよはせし山のはにかゝるくもりて月を入れぬ

百首歌たてまつりし時　　摂政太政大臣

月みばといひしばかりの人はこでまきの戸たゝく庭の松風

五十首歌たてまつりしに山家月の心を　　前大僧正慈円

山さとに月はみるやと人はこず空ゆく風ぞこのはをもとふ

摂政太政大臣大将に侍りける時月歌五十首よませ侍りけるに

ありあけの月乃ゆくゑをなかめてぞ野寺乃鐘はきくべかりける

おなじ家の歌合に山月の心を読侍る　　藤原業清

山のはを出ても松乃木のまよりこゝろつくしのあり明の月

和歌所歌合に深山暁月といふことを　　鴨長明

よもすがらひとりみ山のまきのはにくもるもすめる有明の月

熊野にまうでて侍りし時山中にて[illegible]

[illegible]山乃末はのおつる松風[illegible]の月ぞ[illegible]

山家の心をよみ侍りける　　寂蓮法師

月を[illegible]の[illegible]てみ山のくれを[illegible]嵐[illegible]

[illegible]峯乃[illegible]に[illegible]山の端ちかくの[illegible]月影

[illegible]歌の　　花山院御製

暁乃月見むとしもおもはねどみし人ゆゑにながめられつゝ

　　伊勢大輔

[illegible]乃月は[illegible]人[illegible]の[illegible]

　　和泉式部

すみなれし人かげもせぬ我宿に有明の月のいく夜ともなく

家にて月照水といふ心を人々よみ侍りけるに　　大納言経信

すむ人もあるかなきかの宿ならし葦まの月のもるにまかせて

秋のくれに病にわづらひて世をのがれにける又の年の秋九月十余日月くまなく侍りけるによみ侍りける　　皇太后宮大夫俊成

おもひきやわかれし秋にめぐりあひて又もこの世乃月をみむとは

題しらず　　西行法師

月をみて心うかれしいにしへの秋にもさらにめぐりあひぬる

[illegible]月に袖[illegible]けし[illegible]の枕を[illegible]

同

月乃色に心をきよく染ましや都を出ぬ我身なりせば

をりからの流世はなれてまつりおもふ契なれ秋のよの月

入道親王覚性

更けにける我身のかげをおもふまに遥かに月のかたぶきにける

藤原範綱

おもひいでて昔をしのぶ袖の上にありしにもにぬ月ぞやどれる

秋の夜の月に心をあくがれてさてこそ世に年のつもりけれ

五十首歌よみ侍りし時

おほき后宮大夫

秋をへて月をながむる身となれりいそぢの闇をなになげくらん

百首歌よみ侍りし

前参議教長

ながめても六十の秋はすぎにけり思へばかなし山のはの月

題しらず

源光行

山かつ人の秋の月をみるたびにわがものおもひはいつもせぬかな

千五百番歌合に

二条院讃岐

光のうつる月やむかしの縁ありしわかのうらにもかはる世の中

世をのがれて大原にすみ侍りける比月をみてよめる

寂超法師

すみかの月よわかつて雑をおもふ山住のとものそまつらむ

朝夕に月の秋をながむるに月ほどの人のさだめなき世に

月の前述懐といへる心をよみ侍りける

大江匡房

ありやとも月のかたぶくまでに月をみるなり

左近中将忠親

なかなかにみる人ぞなき山かげの秋の月

千五百番歌合に

藤原親定

山のはに明ける月をながめてもいかにぞみる

源有仲

雲の上にみえし月かげありあけの月

前右大臣

入りぬれば月のやどりはいつの夜の月

月のさやけき秋の夜にわたる雁の声をききて

山の風にかへるさへ袖にかかる月かな

[illegible]

[illegible]

[illegible]

題しらず　　　　　　　　　　　　　祐子内親王家紀伊

白露はおきにけらしな宮木野のもとあらの小萩末たわむまで

法成寺入道前摂政女郎花をゝりて歌よむべきよし侍りければ

紫式部

女郎花さかりの色をみるからに露のわきける身こそしらるれ

法成寺入道前摂政太政大臣

白露はわきてもおかじ女郎花心からにや色のそむらん

題しらず　　　　　　　　　　　　　曽祢好忠

山里にまどひてひとり松風のひゞきに物ぞ秋てあしかな

秋のくれに身のおいぬるを歎きて詠侍りける　安法法師

百年の秋のあらしはすごしきぬいづれの暮の露と消なん

殿上につかはしける　前中納言匡房

秋はつるつれ山のさびしきにふかき夜の月を誰とみるらん

九月ばかりにすゝきを崇徳院によせて詠る　大納言忠家

花すゝき秋のなごりを思ふにも我身ぞつゆとともにきえなん

後徳大寺左大臣

秋もはやわかれにつきて思ふらむ荻もさやかにそよぐなり

題しらず　　　　　　　　　　　　　前中納言匡房

世中に秋きてぞしる荻の葉のかぜのおとこそまさりけれ

後冷泉院の御時殿上のをのこども萩をもてあそびけるに　太皇太后宮

梅ならぬ鶯の秋のあはれは今ぞしる木のまの月の露とまる

九月十三夜の月を見てよめる　源頼

よしのやまことに秋をしるからに月の光ぞあはれなりける　よみ人しらず

山川の岩のいろもかはらでひとりすゞしき岩根の松風

百首歌奉りし時　　　　　　　　　　大炊御門右大臣

あさぼらけ汀の氷とけぬべし若菜つむらん花そちりける

家隆卿大嘗会の屛風に山川の流るゝ所　藤原家隆朝臣

春の夜はあふさか川の月影も花のにほひもかすみこめけり

正治二年百首歌奉りける時よみ侍りけるに　前中納言定家

秋の色はすゞしき風をまちえてぞ月のひかりもさやけかりける

藤原家隆

旅衣すゞしき雲のかよひぢのつきのかげにぞ秋をしるらん

ありあけの月のかげにもさそはれて秋のなごりをおしむなりけり　後鳥羽院御製

露はけふ涙ぞおきしかりがねのこゑにぞ白雲をおもひやれ

宮まいりせられける遊猿の心をよめり　皇太后宮大夫俊成

松山や梢にかゝりつる雲とれにたえぬあけかたの月をまつらん

佛名のあしたに雪のふりける花をとらんとて　朱雀院内侍

時そ雪にあはれ花ちれとおもふむしの心ち袖ぬれ

花山院おりゐ給ひて又の年御佛名にけつり花まつらせ給けるに　右衛門督公任

程もなく花のちりなんむかしの世にもかへらぬ花の色かな

題しらす　内大臣

みし人を見ぬ世となりし心にも忘れぬ花の面影

年のくれによみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

老ぬとも又もあはんと行年に涙の玉を手向つるかな

慈圓大僧正

大かたにすくる月日をなかめしハ我身に年のつもるなりけり

新古今和歌集巻第十七

雜歌中

朱鳥五年九月紀伊國行幸時　河島皇子

白波の濱松かえの手向草いく世まてにか年のへぬらん

題しらす　式部卿宇合

山城のいはたのをのゝはゝそ原みつゝや君か山路こゆらん

在原業平朝臣

あしのやのなたの塩やきいとまなみつけのをくしもさゝすきにけり

晴るよの星か河辺の蛍かも我すむかたのあまのたく火か

題しらす　貫之

志かのあまの塩焼煙風をいたみたちはのほらて山にたなひく

難波女の衣ほすとてかりてたく葦火の煙空にそ有ける

おなしこゝろをよめる　忠岑

年ふれハ朽こそまされ橋柱むかしなからの名たにかはらて

恵慶法師

まれ見のあかしの濱にあさりしてみれはあはれへとさらね

後徳大寺左大臣

行かへるあまの檣さへみえぬまに沖の指示よ松風ぞ吹

題しらず　権中納言定家

たかさごの松吹秋風にしら波の暁かけて浦にすみける

まつほの浦にてよめる　藤原基俊

とほ浦のうら浪高くさわぐなり霧にかすめるあまの釣舟

天暦御時屏風歌　壬生忠見

松かせの関にたちくるしら浪はうちよすれども浜の浦浪

左大臣家歌合に松風をよめる　大中臣能宣朝臣

浪かけの岸の松にしらすきて浦をもちきて霜をきける

松吹浦と云事を　摂政太政大臣

人しれぬ浪の音そふ松の枝にふかくひさしきみ浦の風

明石浦をよめる　源俊頼朝臣

あはちしま浦風ふけは明石の月をさそひて

桃さくらの花を　寂蓮法師

いはほにも松のたつ浪や月ひとつみゆるあまの釣舟

千五百番歌合に　正三位季能

よるの浪の音は松風しきけりよりてのみける浦の松風

浦ちかく　藤原家隆

今さらにすみぬとても浪のふきなるさびしさの浦の松風

むかしの歌にかよへるを　順徳院御製

松かぜの浦波はまつの香ゆゑに身にしみてや

大宰三位家とふらひて侍りけるときよみて侍るうた　従二位家隆

侍人をまつともしらぬ里にをりしれさそふ松風

従三位

住吉の松はまてともいはで音をたてゝせのみちぬる

題しらずよみ人しらず

浦のなみの一声にさてうちふく浜のあさ風

藤原親仲

百首歌中浦海辺をよめる　読人

たかさごの秋さむきよるにあまの浦のあまのりいそなけきつゝ

海辺暮鳥といふことを　良経

みをさはしるべもあらぬ浦の塩かまの浦

右神文子をまけうけ百首哥の中によみて侍りける宮にて父をも寺に送り侍りけるに

花やそや夜深つひんハせ侍や一志乃うへにやまのしめ子

伊勢にまかりける時よめる　西行法師

鈴鹿山うき世をよそにふり捨ていかに成行我身なるらん

題しらす　前大僧正慈円

世中を心たかくもいとふかな富士のけふりを身の思ひにて

高野の大師の御廟にまうてける時よめる　西行法師

さりともと思ふ心も虫の音もよわりはてぬる秋の暮かな

題しらす　在原元方

時しらぬ山ハ時しのみいつとそかのこ深くに雪のふるらん

題しらす　前大僧正慈円

春秋もしらぬときハの山里ハすむ人さへや面かはりせぬ

題しらす　西行法師

花さそふ嵐の声も聞くにそや身をもよひの山のこ

吉野山やかて出しとおもふ身を花ちりなはと人や待らん

藤原家衡朝臣

いとひても猶いとはしき世なりけり吉野の奥の秋の夕暮

千五百番哥合に　右衛門督通具

一すちになれなハさても杉の庵によなよなかはる風の音かな

守覚法親王五十首哥よませ侍けるに閑居の心を読る　左衛門督

すらうやとひ捨てても出ぬるよの今に出て川の世ハたゝうかり

百首哥合に山家嵐といへることを　宜秋門院丹後

山里ハ世のうきよりも住わひぬことのほかなる峯のあらしに

百首哥たてまつりし時　藤原隆信

谷乃音松のあらしも聞なれハいつちとなる梢の葉はみせけり

題しらす　寂然法師

ことしけき世をのかれにしみ山辺に嵐の風も心して吹け

母身まかりにける後法輪寺にまうてける時　権大納言法眼

杉山の昔の衣まとひしていつまてか露のことき袖さらすとも

題しらす　如覚

白露のおもかけにかくれ山乃苔の衣をきせてこそみめ

[illegible]

世をそむく[illegible]

よみ人しらず

返し

[illegible]人のいかならん

[illegible]

苔の庵さしてきつれど君まさでかへるみ山のみちぞ露けき

よみ人しらず

返し

あれはてゝ風もさはらぬ苔の庵に我はなくとも露はもるらん

西行法師

山ふかくさこそ心はかよふともすまで哀はしらんものかは

西行法師

山かげにすまぬ心はいかなれやをしまれて入月もある世に

山家送年といふ事を読侍りける　寂蓮法師

立いでゝつま木おりこしかた岡のふかき山路となりにけるかな

[illegible]歌合に山家を　[illegible]

[illegible]山のおくも[illegible]人にとはせん

百首歌たてまつりし時　二条院讃岐

[illegible]

[illegible]　皇太后宮大夫俊成

今はとてつま木こるべき宿の松千代をば君となほいのるかな

五十首歌合に松風といふことを　有家朝臣

[illegible]

山寺にて読侍りける　[illegible]法師

世の中を[illegible]

[illegible]　和泉式部

世をそむく[illegible]大原山は[illegible]

返し　[illegible]

おほはらや[illegible]

西行法師

[illegible]

志ほりせし[illegible]を山ふかく[illegible]

般若寺[illegible]

むかし[illegible]の志け山[illegible]秋[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]乃山[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]川乃[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]川の[illegible]

[illegible]川の[illegible]

人麿

[illegible]川の[illegible]

布引の瀧ミにまかりて　中納言行平

我世をはけふかあすかと待かひの涙の瀧といつれたかけむ

[illegible]布引の瀧[illegible]

みな上乃空よみゆるハ白雲のたつにまかへる布引の瀧

[illegible]布引の瀧[illegible]

ひさかたの[illegible]布引の瀧

[illegible]

むかし[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山里にうき世いとはん友もかなくやしく過し昔かたらん

西行

山里は人来させしと思はねととはるゝ事そうとく成ゆく

前大僧正慈円

草の庵をいとひても又いかゝせん露乃我身のかゝる限は

[illegible]

大僧正行尊

[illegible]門よさしこもる方そ[illegible]

[illegible]

安法法師

世をそむく山乃南乃松風よ苔の衣や夜さむなるらん

西行法師百首歌すゝめてよませ侍りけるに　藤原家隆朝臣

山川の我苔の袂よ露をきてあはぬ山路の月をみるかな

百首歌奉りし時山家の心を

式子内親王

今はわれ松乃はしらの杉の庵よとつへきものを苔ふかき袖

小侍従

しきみつむ山路乃露よぬれにけり暁おきの墨染の袖

摂政太政大臣

忘れしの人たにとはぬ山路かな桜は雪にふりかはれとも

五十首歌奉りし

藤原雅経

影やとす露のみしけくなりはてゝ草にやつるゝ故郷の月

俊恵法師身まかりて後年ころつかはしける薪なと弟子のもとにつかはすとて

賀茂重保

煙たえて焼人もなき炭竈の跡のなけきを誰かこるらん

[illegible]

西行法師

[illegible]柴の庵そ

山家に夕雲といふことをよみ侍りける

前大納言忠良

山さとや[illegible]

後白河院かくれさせ給ひて後百首歌に

式子内親王

をのゝえの朽し昔は遠けれとありしにもあらぬ世をもふるかな

述懐百首歌よみ侍りける

皇太后宮大夫俊成

いかにせんしつかそのふの奥の竹かきこもるとも世の中そかし

[illegible]

[illegible]

[illegible]の露[illegible]

題しらず

墨の江の里のあるじとなれば人もこそとへとも山おろしの風

前大僧正慈円

ふるはたのそはのたつ木にゐる鳩の友よふ声のすこき夕暮

西行法師

山かけのくもりけくおもひゐるそのほしはまさりて月の御あまたの路をいくつともしらすまさりて空に雲をおもひなさん

苔みし庭の小松に逢ゆかりてかしの声を猶にそきく

三井寺やけて後すみ侍る坊を思ひやりてよみ侍る　大僧正行尊

住なれし我古郷やあきらかに奈良にうつらなくらむ

百首歌よみ侍りける　摂政太政大臣

ゆふまくれいなおちるまよ膝よそて月におもひつる人の面影

これやみし昔のみやこ結ひむすひなれの露に月のやとれる

西行法師

人の許にまかりてこれかれ松の陰にまかりゐてあそひけるに思ひて

うき世をそむく山里は衣のみならぬ松の下陰

石上ふりにし人を尋ぬれはあれたる宿にすみれ摘みけり

能因法師

題しらず

あとをとひやまてそ思ひわれさへ宿の苔ふかき

恵慶法師

まだしらぬ人もありけり庵のあたりは

山家にまかりける人に　前中納言

あけぬとて山の端いつるかけをみて

題しらず

人磨

秋されは人も又田山

わきくらやまの花をみて

天智天皇御製

新古今和歌集巻第十八

雜部下

山

是川のうれにあるくにはあれと鶴へいさせいふ人のるれ

菅贈太政大臣

あさの原わきしさしいりひかまいつれの浦うにしおるへき

月

月おとふなかゆとしひしゆきを焼あれしにはとまらさりわ

雲

山まれさひりしまれ海くるをみる時は松ぬのまれね

雲

雲さちて照日のかけはみしにとも分はまとはれしるへみやと

雲

花とちわ玉をみしつあさしをは雲ぬうさ山をそ夏にみけり

松

老ぬとて松は緑そさらわけり我墨髪の雲れさむさふ

登

はくしふを思おつる登へはあれとなれかなりぬ今をやそね

海

うはかやの罪ふ山をみしつるは人をゆうさぬ海へなわけわ

海

うみなら海をへるのれ鹿とこを海にしは月そ照さん

かさしの

ひこ山のかわひをまつ鶴のとこせる橋を我ようさなん

波

なれ来とも白波とやく塩といわれかしまとこの鹿

ふしひしらに

さ波やひら山風のうこぬけは鶴とる海士の袖へるこゆ

白波のよるなれさふ世をつくとあまれ子なれは雨を定す

千五百番歌合に　　　摂政太政大臣

身のうちに法の心ぞ老にける後生の志はさもいまだなしや

題しらす　　　前中納言匡房

きのふけふ方便は定さる方便をつらぬる法に住らく

以下にも我身を知る事をたのもしき後なりけむやがてはめん

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　法然上人

わが路はさりて入江の氷のさえの世に住ける我身に

人麿

大中臣能宣朝臣

何事の羽風にあれかしらぬ後の世と頼む影かな

あさ山の松の緑をとほく見わたして

源頼

老にけるあはれさの松の緑志をかけて今やなく

山をとほく見わたして　　　能因法師

是川の山下水に影みえていまも色ふかくまつはりける

むかしの人をこひしのびけるそのかみの法のことを　法成寺入道前摂政太政大臣

あはれみて法の侍をうちならし法の衣をきそへ侍れ

宿ならぬあはれとおもふ冷泉院の皇太后宮の御のことに思ひけるを

おほかたの人も聞つげて

そのかみの玉の台もいまは衣のうら紙のまゝん

東三条院

後朱雀院の御時太皇太后宮

はかなさをあはれともせで法の席にまかれつゝ

上東門院出家の後こがねの笛をつくりて　供養しけるに

梅の枝につけてまゐらせける

くちはてぬ衣のうらを思ひやる法のみちにいるもむ

枇杷皇太后宮

上東門院

法の衣のたまかけてあさましきわれからやはする

題しらず

和泉式部

志賀のうらにまちく尋ねて今は我身のいかにならん

屏風の絵に塩やきの浦をかきたりけるを　一条院皇后宮

おなじ絵に横川の杉のこずゑを見てつかうまつりける

古の鐘や鐘やあはれむ人もなくみな志かの浦

天暦御時

杉まがふ雲の上へ入たく山の横川の杉の朝まだき

如覚

題しらず

百歳のうちのみつはにあへくもなく雲の上へ入山は住まし

世をうぢやまとて小野やいかとこゝろをみ侍りけるに業平朝臣
宮の内とゝうふてつゝみてまゐてゝゆゑとゝ
ちふたりいきやとゝうゝゝゝゝ

惟喬親王

業平

あるとを何ゝ思ひんうゝ世をもうしろくん雁を物よ
秋の夕ふ伝侍けるに女ゝとゝもきわけ人ゝゝ歌ゝ儀子世
世を君とふ月の秋ちり紅とゝ思ふ恋ゝ
喜ゝ流れりわぬさんとゝけゝ秋後けゝ伊勢
白雲ゝとゝゝゝてうれと百ゝ思ふうゝ秋ゝ物ゝ
ゝ伝ゝゝゝれ伝ゝゝゝ伝ゝけゝ

在原業平

玉津島神社の和歌濁よゝゝゝゝゝ弁かゝゝゝゝ
二条院若紫詞伝ゝゝゝ伝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
伝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
古のゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
家隆実方後の隆ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

藤原家隆卿

人流の濁よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれ伝ゝ師千歌集ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

後鳥羽院御歌

濁ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
濁ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

題しらず　大納言經信

秋かせのふきあはせたる白露の玉のうへにかゝらましやは

有栖川にて人々あそひ侍りけるに大宮のうへにて秋の月の夜あかしける時

あさ露はいつのまにかはきえつらんおきてみれはのかちはなかりけり　左京大夫顕輔

題しらず

ゆふされはこゝろをさへやさそふらん秋の風にそ露やおくらん

思ふことありける人の月をみて

あはれなる事もおもひはなくしら露のきえなてけるをとふ人もなし　小馬命婦

題しらず

露の身のきえてはかなき秋まてもたつねてみれはさすかかなしき　和泉式部

秋ふくはいかなる色の風なれは身にしむはかりあはれなるらん

まゐりのはすなり侍りける比の初冬の夕つかたに

さためなき人の心をしくれにはわか身をもなをうしとこそしれ　前大僧正慈圓

題しらず

世の中はかくてもへけりあまのすむあしのまろやのうきねなりけり　前大僧正行尊

かくてのみあるへき世にもあらねはとおもひなからもすくしつる哉

題しらず

わか身こそうきにしつめるはかなさもありとしらるゝ世にもあるかな　大僧正明尊

うしとみし世をのかれてもなほうきはおもひしらすてすくる月日を　清原元輔

なかなかにおもひしりてそなほうきはいかにせよとてしつむなるらん　源信明

延喜御時女郎花合しける時よめる　藤原道信朝臣

たれをかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに

題しらず

いかにしてなかき日くらし思ひつゝ人のこゝろをはかりかねつる

例ならぬ事ありて心ほそくおほえけるころよめる　前大僧正慈圓

うくてつらきものとしりなからおもはせそめし心なるらん

思ひねの世をはなかくしらすして人のためにもやすくもあらなん

数ならぬ身をも心のもちかほにうかれては又かへりきにけり　西行法師
とはかりのはしのくに住てもはてさいふつかの空ハと
年月をいかて我身におくりけん昨日の人もけふはなき世に
受くる人のもとろふかうは出さありけや誰も今日之今まで
ちえん法親王五十首よませ侍りける時　寂蓮法師
ろしおもても捨られ袖ハ世をしてわか身はなれぬ心あらねし
述懐の心をよみ
物乃ふさ捨ぬハあらせとはいせんなきはあらくも捨さ民乃わ
何事をおもふ人ぞと人とはゝこたへぬさきに袖ぞぬるべき　前大僧正慈円
いつまてか此世ハやあけなんかきくらすとも我身の夢
打すてし世にはなれぬ身にしあれはねさへ昼つらし世
和歌所にて述懐の心を
山里に契し庵やあれぬらんまたれんとだにおもはさりしを
袖におく露をは露としのふとも馴れにし月や色をしるらん　右衛門督通具
君か代にあはすは何を玉の緒のなかくとまてはをしまれし身を　定家朝臣
おしむくれ秋の袖にちりくる紅葉をもいのちにてそ　藤原秀能
和歌の浦やおきつ潮あひにうかひいつる哀我身のよるへしらせよ　家隆朝臣
その世をしらぬ月も杖風もとゝむる袖に露こほれつゝ
君か代にあへる計乃道はあれと身をはたのます行末の空　雅経

杉むらと深山の月もかくるれはあかぬ袖にはなれつゝそみる　皇太后宮大夫俊成

千五百番歌合に　摂政太政大臣

うきしつみこん世はさてもいかにそと心にとひてこたへかねぬる

題しらす

我なから心のはてをしらぬかな捨られぬ世のまたいとはしき

とくへし捨と思ふかひもなくしほ心はかにたゝ世をやとまり

五十首歌よみ侍りけるに述懐の心を　守覚法親王

ありへても世をとむひいなけれはうきよくへうつあはれなりけり

世をはなつらしいかてかそれわけるうきをしらしとおもはれやも　権中納言兼宗

述懐の心をよみ侍りける　左近中将公衡

捨やらぬ我身そつらきさりともと思ふ心にさそはれつゝ

題しらす　読人不知

うきなからあはれいつまて世にふへき露の葉ことにつゆはまたねくとも

うきなからひさしく經る命かなつれなき世をもすてやらむとは　源師光

家百首歌に　藤原季経

さりともと思ふ心も虫の音もよわりはてぬる世のゆくすゑ

菅原在長延

はかなくも世にたへたる身を思へは世中たのしとあはれ我身そ

入道前関白太政大臣家百首歌よませ侍りける時　前右兵衛督

何事のかはりはつる世なりとてあはれそのよのいと清かれ

題しらす　大僧正慈円

暮らくの月日はへやもやせ川くらねともよのまとひにくれ

源俊頼朝臣家にて述懐の歌よみ侍りけるに

あはれなる人の嵐にまたつもれはみちてもも山川の氷

身をすてゝ人のつらさをおもひしるとてわかれしうさを忘れめやは

みなかみのみかけも流るゝかけにこそなかれてうけたまはれて

題しらす　源季広

たちかへりあはれなる事のみをいはぬはかりのいのちにもかな

いつまでとまれとなくすまそわらん葉の庵に志りしがよに
西行法師
月の所山に心ぞ送りいれてやこ所の道の男をいかにせむ
文十四ヶ所中なり
おふ事なるべきふ人のなかるるんわ姫まいに定まる月にてらやけき
お天信正義歌
いかにして今もまて世にいふ所のつきせぬ掴をいとふこころを
西行法師山里にわさらの出て菩薩歌に侍しを月日にあらわて侍るなきかし
さりけり 八條院ヶ倉
うれ世出し月日の新にめくわさてかわらぬ所をみ願ひらん
太神宮ヶ所合なり
太上天皇
松浦定に契りたひ此年も侍ぬ月日をうけよ所をとゝ恋の定
お天信歌全真西山のうたに侍けるまつりしけり 兼仁親王
人をまこひ所をと思ふ心をいかゝふく月にとゝへてそ御る
お天信正義歌まそ八ヶ所の程のうちもやつかれ紀里中つかりて侍けるなりに前本大將頼朝
みちのくろいまて思ふいえそ志ぬ書つくしてよつかの石ふこ

今日まそ人の中のつゆなきさとの
大江嘉言
ハ人の紙類てくれまきわ以所の上にあらんとすれ
多りしらす
清信公
君芝の露にあらそふ我方に出れりまつはさらんとすらん
里赤川院
何とかやかへにおふなる苔にそれにもあらふ我方をかわ
檀中納言資実
うしかゝ紙さ所ろ夏にあつれなさむる現のなさそ思ひき
松の木にやけるをみて
性空上人
なとせ姫る松とまくゆる世中にまさしきそこそる我に
多りしらす
源後粉部
数なくて世に住の江乃方をつくしいつを松とさしなれ也かわ
皇太后宮大夫後成
うれなりしくそ世紙ゆるこにまるわなきやうけし住吉に松
長日社方合に松風といふ事を
藤原家隆部
長日山苔の埋木朽ぬさ君につけこせみ心の松の勢

宜秋門院丹後
何となくきけは涙そこほれぬる苔の袂にかよふ松風

さうしまゐらせてのちあるところにすみ侍りけるころ(?)
女御徽子女王
みな人のそむきはてぬる世中にふるの社の身をいかにせん

賀茂の祭の舞人にて侍りけるを後に祭の日つかひにて(?)
藤原実方朝臣(?)
衣手の山井の水に影見えしなほそのかみの春そこひしき

返し
藤原道信朝臣(?)
いにしへの山井の衣なかりせはわすらるゝ身となりやしなまし

後冷泉院御時大嘗会にひかけのくみをして(?)
先帝の御時おもひ出られてつかはしける(?)
秋歌とて(?)
大納言(?)
立かへりさても見まほしき衣(?)

中務卿具平親王
秋の夜のあかつきのさわく(?)人つくつくとおきて(?)

秋雨を
大中臣能宣朝臣
題しらず

題しらず
小野小町
木枯の風にもみちて人しれすうきことの葉のつもるころかな

述懐百首歌よみ侍りける時紅葉を
皇太后宮大夫俊成
嵐ふく峰のもみちの日にそへてもろくなりゆく我涙かな

題しらず
崇徳院御歌
うたゝねは荻ふく風におとろけとなかき夢路そさむる時なき

文円(?)
竹の葉に風吹よわる夕暮の物のあはれは秋としもなし

和泉式部
夕暮はいつれの雲のなこりとて花たちはなに風の吹らん

くれぬめりいくかをかくて過ぬらん入相の鐘のつくつくとして

西行法師
またれつる入相の鐘の音すなりあすもやあらはきかむとすらん

暁のこゝろを
皇太后宮大夫俊成
あかつきとつけの枕をそはたてゝきくもかなしき鐘の音かな

百首の歌の中に　式子内親王

曉のゆふつけ鳥そあはれなる長きねふりを思ふまくらに

[illegible]　和泉式部

[illegible]

題しらず

[illegible]

[illegible]

百首の歌の中に

[illegible]

百首の歌に述懐の心を　皇太后宮大夫俊成

[illegible]

述懐百首の歌よみ侍りける時鹿の歌とてよめる　俊恵法師

[illegible]

夕暮に[illegible]　俊恵法師

[illegible]

題しらず　西行法師

[illegible]

[illegible]　和泉式部

[illegible]

題しらず

[illegible]

年たけて又こゆへしと思ひきや命なりけりさやの中山

[illegible]　皇太后宮大夫俊成

世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿そなくなる

題しらず　前大僧正慈円

[illegible]

[illegible]

何ゆへに此世をいとふこゝろなき人とかへりやすくすゝまん

おもふ事我後世をわすれぬるかなしけれともうけかたき身を

世をいとふ名をたにもさはとゝめおきて数ならぬ身のおもひ出にせん

西行法師

身のうさを思ひしらてやゝみなまし背くならひのなき世なりせは

いかにとも今は世をわかなや世をも捨ておもふらんやまのおくに

何事もかはりはてぬるよの中にちきりしまゝの世にもかはらす

入道前関白太政大臣

暮ぬとも又ありなしの世の中に身をしるこそはかなしかりけれ

寂

旅人と成て同じ心を人に見せはやとて山寺にこもりて侍りけるに

大僧正行尊

思ひ出るともなき身の今はたゝ心にかゝる事のなきかな

題しらす

数ならぬ身を何ゆへに恨みんとてもかくても過る月日を

百首歌よみ侍りける

おほ僧正慈円

いつまてか此山寺の住居のさひしさをあはれとたにもみん

題しらす

後鳥羽院下野

うき身をは山田のいほにすてゝ世をのかれてこそ住へかりけれ

年比修行の志ありけるをもてなしかけゝるか思ひたちける時よみ侍りける

山田法師

心のおくのふかきまことをしらすしてのかれぬとおもふこそはかなけれ

題しらす

寂蓮法師

数ならぬ身をかくしける世の中にあはれとおもふ人もなきかな

法橋行遍

数ならて今も昔もおなし身のかゝる月日をおくりけるかな

守覚法親王

五十首歌よませける時

あはれなる心のまゝにすむ身こそうき世の外のすみかなりけれ

題しらす

八条院高倉

うき世をはいかにとかく思ふらんとてもかくても有ける月日を

西行法師

あさけおく萬の袴をのかれてあかつきの世にはふるかな

清輔朝臣

あからへ入文いろやまおわれんりしとみし世をも今は思ふむ

寂蓮法師へくもとめて百首の歌よませ侍けるにいかにてこの世のを
よもうてけなきくあまのありとしたにろへ山をといでしら世のをと
侍よくなぬりのおよほ萬のかきくたさんしの高隠松二得てしかり
きかしこみ侍そおとろきさうも此歌をいうきこゆるいつまてつかりけり物く
くさうけ侍けり

西行法師

末の世をしいちまさけのこころかたるとみしいるむなくかよふなよき心まし

千載集えらひ侍りける時ふるきくの歌をみて皇太后宮大夫俊成

月末る我をとも思ふ人やわれもひとらふ心なくらひとり

皇嘉門院よ百首の歌奉りけるに述懐歌

世中はおいつく?へものの道かむるのしむ夜よきる涙かな

百首の歌より

くるしものをも後へき世ぞわすらけれともの思ふの露にを漲さつつ

式子内親王

法のまたなりてみゆのおかをみ侍りく花山院法師

清の雲路おからふるよもわるね旅みの紀若札世にるなき道

神風やとよみかくるにたのしてはけくおかふくとかなしと

西行法師

文けらまたる川岩のよ志波そく霧とふる秋の月の影まれ

よみ人しらず

神路山月さやかなちらひわかてそこの中をいでし花之まわ

伊勢の月よみの御神りまいりて月をみてよめる

さやかなるしのこゝねの雲おとの影やわららる月よみの杜

おほ御歌

神祇の歌とてよめる

やわらくるをたまわもろ影をわやいとく河原の秋風よの月

公卿勅使にて大神宮へまゐりけるに心のむまやまてよみ侍りける中院入道右大臣

ちいはふ文もみまくのわしきふみをまもる門のせく宮波

入道前太政大臣家に百首の歌よみ侍りける皇太后宮大夫俊成

神風や山とくの河の宮柱いくよ世をとめとさて絶きん

俊恵法師

神うつ珠やまる〳〵此をとるのかさし因外の文のよる思をもはん

みそぎするとき　よみ人しらず
うき風や山田の原の榊葉に心のしめはかけぬ日ぞなき

社頭納涼といふことを　大中臣明親
五十鈴川空やまだきに秋の声下つ岩根の松の夕風

香椎宮の杉をよみ侍りける
ちはやぶる香椎の宮のあや杉は神のみそぎにたてるなりけり
このうたはよみ人しらず

八幡宮の権官にて年久しかりけることをうらみて御神楽の夜まゐりて榊に結びつけ侍りける　法印成清
榊葉にそのいふかひはなけれども神に心をかけぬ日ぞなき

賀茂にまゐりて　周防内侍
年ふれどうき影のみぞみたらしのかはる世もなき身をいかにせん

文治六年女御入内屏風に臨時祭かける所をよみ侍りける　皇太后宮大夫俊成
月さゆるみたらし川に影みえて氷にすれる山藍の袖

按察使公通
ゆふしでの風にみだるる音さえて庭白妙に雪ぞつもれる

十首歌合の中に神祇をよめる　前大僧正慈円
君を祈る心の色を人とはばただすの宮のあけの玉垣

題しらず　中務卿具平親王
うせにしや三輪の[illegible]露のとくれば[illegible]

蝉丸
秋風になびく浅茅の末ごとにおく白露のあはれ世の中

世の中はとてもかくても同じこと宮も藁屋もはてしなければ

新古今和歌集巻第十九

神祇歌

この歌は日吉の社司社頭の後ろの山にまかりて子日して侍りける夜人の夢に見えけるとなん
しるらめやけふの子の日の姫小松おひん末まで栄ゆべしとは

この歌は建久二年の春の頃筑紫へまかれりける者の安楽寺の梅を折りて侍りける夜の夢に見えけるとなん
なさけなく折る人つらしわが宿のあるじ忘れぬ梅の立枝を

この歌は興福寺の南円堂造り始め侍りける時春日の榎本の明神よみ給へりけるとなん
補陀落の南の岸に堂たてて今ぞさかえん北の藤なみ

夜やさむき衣やうすきかたそぎの行あひの間より霜やおくらん

いはけなき年[illegible]の松を二[illegible]ひおもひ[illegible]

[illegible]

も[illegible]世に[illegible]

[illegible]

人[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の海[illegible]白波のうへ[illegible]

[illegible]

白波よ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三流[illegible]

賀茂の社の午日うたひ侍るなる

霜のそこも海りの嵐の西かけは出れかの瀬りもなつかしむ

神楽をよみ侍りける　紀貫之

さかき葉に色もかはらぬ榊葉のしげやいかなる神のとめてきつらん

臨時祭をよめる

宮人のすれる衣にゆふだすきかけて心をたれによすらん

大将に侍りける時勅使にて太神宮にまうでて侍りける時　摂政太政大臣

神風やみもすそ川のそのかみに契りしことの末をたがふな

おなじ時外宮にてよみ侍りける　藤原定家朝臣

契ありてけふ宮川のゆふかづら長き世までもかけてたのまん

公継公卿勅使にて太神宮にまうでて侍りけるに斎宮の女房の中より

とどめける　よそにみしらず

うれしさもあはれもいかにこたへまし故郷人にとはれましかば

返し　前大納言公継

神風や五十鈴川波かずしらずすむべき世にまたかへりこむ

太神宮歌合に　太上天皇

ながめばや神路の山に雲消えて夕べの空を出でん月かげ

みあれにまうでて社の司どもくらゐみえけるによみ侍りける　賀茂重保

汲あれし神よあふひのかかりせば何によきをかけてたのまし

社司大祝に事あて侍りけるにおもひつづけてよみ侍りける　賀茂重政

おほ田のうらのふかきせにおもはぬたよりせし河上の神

鴨社の歌合とて人々よみ侍りけるに月を　鴨長明

石川やせみの小川の清ければ月も流れをたづねてぞすむ

弁に侍りける時松尾祭にまかりて周防内侍につかはしける　中納言資仲

万代を祈ぞかくるゆふだすき吉田の山の嶺のあらしに

文治六年女御入内屏風に吉田祭　入道前関白太政大臣

きふねの神のみやゐやおもひくらんむなしくやけふ川風

春日社歌合とて人々よみ侍りけるに神祇のこころを

天の下みかさの山のかげならでたのむかたなき身とは知らずや

皇太后宮大夫俊成

入京歌合に春日にまかりて周防内侍につかはしける　藤原清家

春日野のおどろの道の埋れ水末だに神のしるしあらはせ

千世経てもかはらぬかげを神ぞしる三笠の山の嵐のかぜ

家に侍りける女房の志やうしはさかきの山さき　吉水和尚慈円

とを山神の志るしとも見ゆるしるしはかはらぬのかは

日吉社にたてまつりける歌の中に　二首

やはらくる影そふもとにくもりなきもとの光は峯にすめとも

述懐のうたを

我たのむ七の社のゆふたすきかけても六の道にかへすな

をしなへて日吉のかけはくもらぬに涙あやしききのふけふかな

もろ人のねかひをみつの浜風に心すゝしきしての音かな

小比叡をよみてたてまつりける

さゝなみや道はわけそぞ祈るそなくいはしろの

熊野へまうでて侍りけるみちにて

はるはるとさかしき峯を分すきて音なし川をけふ見つるかな

熊野へまゐりてたてまつり侍りし　太上天皇

岩にむす苔ふみならすみくまのの山のかひある行末もかな

新宮にまうつとてくまのゝ川にて

熊野川くたすはやせのみなれさほさすかみなれぬ浪のかよひち

白川院くまのにまうて給へりける御供の人々しほやの王子にて歌よみ侍りけるに　徳大寺左大臣

立のほるしほやの煙浦風になひくを神の心ともかな

熊野へまゐりて侍りしに岩代の王子に人々の名なとかきつけさせてしはし侍りしに拝殿の長押にかきつけ侍りし

いはしろの神はしるらんしるへせよたのむうき世の夢の行末

熊野の本宮やけて年の内に遷宮侍りしにまゐりて　太上天皇

契あれはうれしきかゝるおりにあひぬ忘るな神も行末の空

加賀守にて侍りける時白山にまうてたりけるを思ひいてゝ日吉の客人の宮にてよみ侍りける　左京大夫顕輔

年ふとも越の白山わすれすはかしらの雪をあはれとも見よ

一品聡子内親王住吉にまうでて人々に歌よませ侍りけるによみ侍りける　藤原顕仲

住吉の浜松かえに風ふけは浪のしらゆふかけぬまそなき

奉幣使にて住吉にまうでて侍りけるにあれはてたりけるを見て侍りける　津守有基

住吉と思ひし宿はあれにけり神のしるしをまつとせしまに

ある所の屏風の絵に十一月神まつる家のまへを馬にのりて人の行を　紀貫之

榊葉の霜うちはらひかれすのみすめとそいのる神のみまへに

延喜御時屏風に夜神楽の心をよみ侍りける　貫之

いやしろしのまとゐへ風を夜いはれあせりつるかなあらひさん

新古今和歌集巻第二十

釋教哥

なほたのめしめぢが原のさせも草我世中にあらんかぎりは

何か思ふ何かなげかん世中はたゞ朝がほの花の上の露

このうたは清水の観音の御歌となんいひつたへたる

智縁上人伯耆の大山にまうでて出なんとしける暁夢に見えける

山深く年ふる我もあるものをいづちか月の出でてゆくらん

難波の三津の寺にて芦の葉のそよぐをきゝて　行基菩薩

わそらくしれせの浪はるさに浮世中にうつりけるかな

比叡山中堂建立の時　傳教大師

阿耨多羅三藐三菩提の仏たち我立杣に冥加あらせ給へ

入唐のときのうた　智證大師

法の舟さしてゆく身ぞもろもろの神も仏も我をみそなへ

菩提寺の講堂の柱に虫のくひたりけるうた

しるべある時にだにゆけ極楽の道にまどへる世中の人

みたけの笙の岩屋にこもりてよめる　日蔵上人

寂莫の苔の岩戸のしづけきに涙の雨のふらぬ日ぞなき

臨終正念ならんことを思ひてよめる　法圓上人

南無阿弥陀仏の御手にかくる糸のをはりみだれぬ心ともがな

題しらず　僧都源信

我だにもまづ極楽にむまれなばしるもしらぬもみなむかへてん

天王寺の亀井の水を御覧じて　上東門院

にごりなき亀井の水をむすびあげて心のちりをすゝぎつるかな

法華経廿八品の哥人によませ侍りけるに提婆品の心を　法成寺入道前摂政太政大臣

わたつ海の底よりきつる程もなくこの身ながらに身をぞきはむる

勧持品の心を　大納言斉信

数ならぬ命は何かおしからん法とく程をしのぶばかりぞ

家の八十まで枝の寿量品よませ侍りける　肥後

しかれやの林にみえませし法よわかちのさかれてうるゝ

涅槃經にとき給ける時[illegible]花を[illegible]の中にもとらせて[illegible]人の[illegible]給けるに[illegible]

皆川のなかれ清くも[illegible]あさき月の影を浮めぬ

述懐の歌の中に　　前大僧正慈円

ねかはくはしはし闇路にやすらひてかゝけやせまし法の灯

かくれ法華の日影にてつとめて法のとも[illegible]

極楽へまた我心ゆきつかすひつしのあゆみしはしとゝまれ

觀心如月輪若在輕霧中の心を　　権僧正公胤

我心なほはれやらぬ秋霧にほのかにみゆる有明の月

家に百首歌よみ侍ける時十界の心をよみ侍けるに縁覚の心を　　摂政太政大臣

おく山に獨うき世はさとりにき常なき色を風になかめて

心経の心をよめる　　小侍従

いろにのみ染し心のくやしきをむなしとときける法のうれしさ

摂政太政大臣家百首歌よみ侍けるに十楽の心をよみ侍けるに聖衆来迎楽　　寂蓮法師

紫の雲路にさそふ琴のねにうき世をはらふ嶺の松風

蓮華初開楽

これやこの浮世の外の春ならん花のとほその明ほのの空

快楽不退楽

春秋にかきらぬ花におく露はおくれさきたつ恨やはある

引接結縁楽

たちかへりくるしき海におくあみもふかきえにこそ心ひくらめ

法華経廿八品歌よみ侍けるに方便品唯有一乗法の心を　　前大僧正慈円

いつくにも我法ならぬ法やあると空吹風にとへとこたへぬ

化城喩品化作大城郭

おもふなよ浮世の中を出はてゝやとるおくにもやとはありけり

分別功徳品或住不退地

鷲の山けふきく法の道ならてかへらぬ宿に行人そなき

普門品心念不空過

おしなへてむなしき空と思しにふちさきぬれは紫の雲

心法常不満といふことを　　皇嘉門院[illegible]

と[illegible]くらはかさ[illegible]みちひの塩のかくのなき[illegible]

先照高山

朝日さす峯のつゞきはめぐめどもまだ霜ふかし谷のかげ草

家に百首歌よみ侍りける時花厳経の心を　入道前関白太政大臣

底きよく心の水をすまさずはいかでさとりのはちすをもみん

勧持品　正三位経家

さはりそへてくもはらしいさやさは法にかへつる命とをしまん

法師品加刀杖瓦石念仏故応忍の心を　寂蓮法師

ふかき夜の窓うつ雨に音せぬはうき世をのきのしのぶなりけり

五百弟子品内秘菩薩行の心を　大僧正慈円

古の鹿なく野べのいほりにも心の月はくもらざりけり

人々すゝめて法文百首歌よみ侍りけるに二乗但空智如螢火　寂然法師

みちのべの螢ばかりをしるべにてひとりぞ出る夕やみのそら

菩薩清涼月遊於畢竟空

雲晴てむなしき空にすみながらうき世の中をめぐる月かげ

栴檀香風悦可衆心

吹風に花たちばなやにほふらんむかしおぼゆるけふの庭かな

欲見教已後到他出

やまぢゆくすゑのりとしたひてぞ鶴のはやしの路の露けさ

此日已過命即衰減　寂然法師

をしからぬ命ともしらで暮ぬれば入相のかねの声ぞかなしき

悲鳴咽痛恋本群　寂然法師

草がれのもとの小野辺をすてゝ来て雨と共にぞ鹿の鳴なる

弁見入無為

うむれはいつの世にかめぐりあはんおもひはきえぬまことの道に入ぬる

合会有別離　源季広

あひ見ても嶺にわかるゝ白雲のかゝる此世のいとはしきかな

因名欲往生　寂然法師

ともすればさくらわかれの花の杖もつんでも後にはしらぬ

心懐恋慕渇仰於仏

わかれにしその面影の恋しきに夢にもみえよ山のはの月

十戒の歌よみ侍りけるに不殺生戒

わたつ海のふかきに沈むいさりせでたもつかひある法を求

不偸盗戒

うれ草乃一望るわとも破かれしひなかけうおさけ白波

不邪婬戒

さしぬさふおもとれかうへの所よ衣まつまあまつぬつまれ室そ

不酔酒戒

花の本露のなさけに雅をあしこ思ひなすめう春れ山風

入名お雲白家に十如元ちよませ仍けうふ如元ち話　二条院讃岐

うれを待むりしのゆへとしりにそ心りに山世を振たてまし

紛賢の院中納言人くますめて其八品の寺よませ仍けうふ序ふ廣度法衣室

ち数無有童のこころを　皇太后宮大夫俊成

まさしへさうともかさしぬ橘程いかふさくかうちうひ成らん

義越の院に極楽六時讃の後よう聞きこ寺なへきは仍けうふ後仍けう町に大衆法

をきこて涙歡喜瞻仰せん

今そ西王入日ふみくもしひこしみくれ此の御ゆふくれの宮

曉ひらて波のおり金の岸によすうかや

以にし色のおのへ乃瑞ふくきるかに岸うけ波のあつ寺ぬ

后宮寺中にし毎日晨朝入法定の心を　式子内親王

鶴なり曉ことにみまくせいまくぬうれ和乃夏そ思しき

発心和歌集の寺善門ふ釋を法　無題　選子内親王

逢ことにはいつくまてとう歎るへきうれ身のゆかんかたはしれ

五百身子ふのこころを　俊頼源伝

玉かけし衣のうらはへしこそを絵かわけるふ紙は思ふ

維摩經十喩中に山男女愛と思ふ心を　和泉集

夢やゆめうつゝや夢ゆきまうぬ小いかわる世にうきかんとすらん

二月十五日の暮るに伊勢大輔かりとにつかりける　和泉

堂にわ色をふ乃猶れ夢にわまや面をけるにしひ面ふ

伊勢大輔

もふ言ひとゝ後にくれぬ面の山しひ入日れかけ紙なかそて

面の法師をよひたてわけるうしまうるへきよしはかしまうて

てしく月のあるうしけるうし門のまへをとをるをこさてこゝそつかり

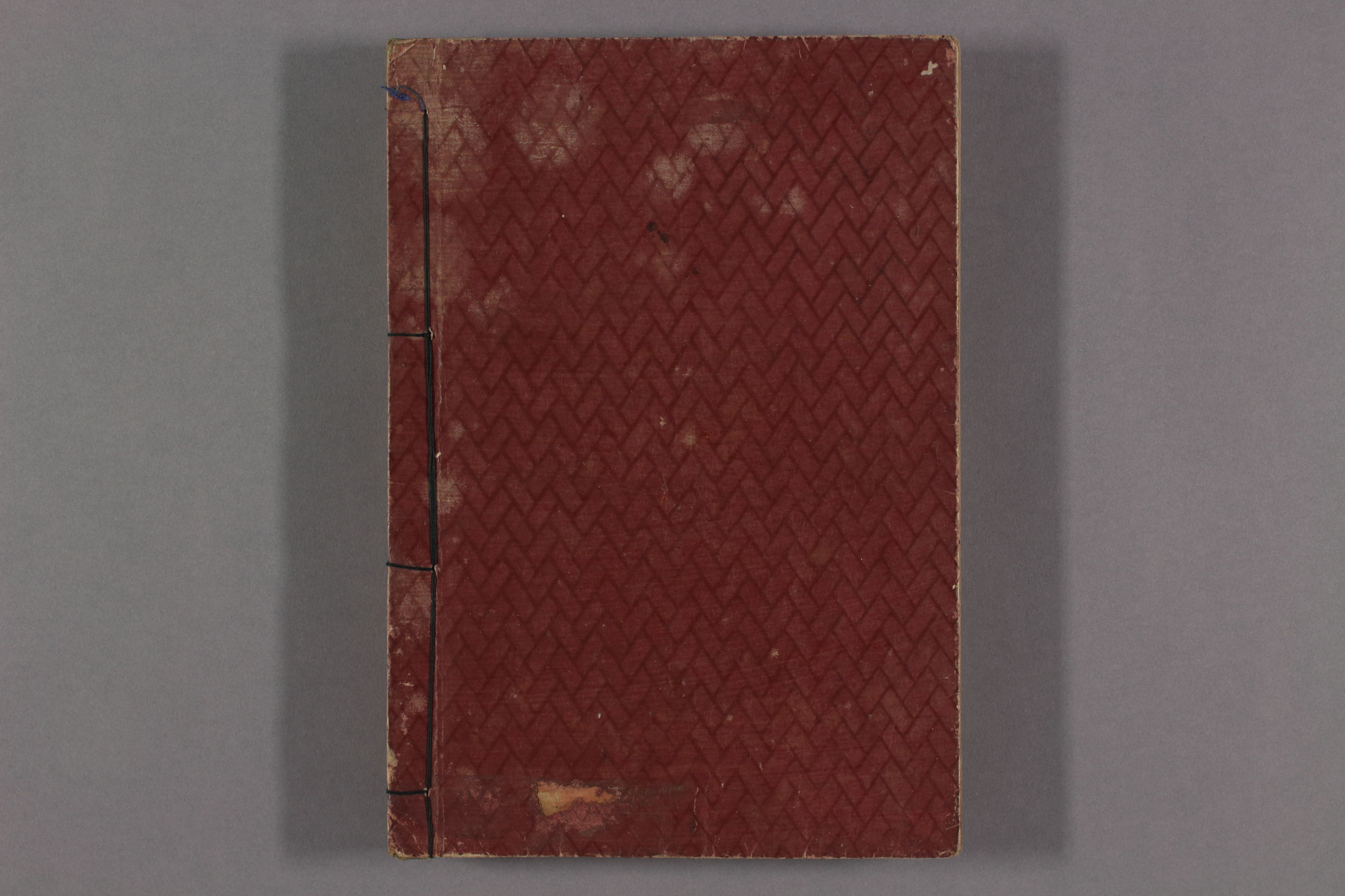
紛賢門院姫河

面へ引しるへ世ふ月かけれ宮を見れ光しうひなりけれ

西の法師

しいそ雲まれかし月紀をまくぬ宮をふや宮にみくらん

人の力さらなりけれ　のち法源使ふ御しけるり即往安樂世界
のふをよめる　瞻西上人
昔みし月のひかりをしるへにてしと我や君を西へゆくらん
勸心をふえ給ける　西の法師
晴れてんれ見てりまとじ月を西乃山邊やちかくなるらん

新古と和歌集全終

梅村孫右衛門板